序

四日市市の中央部を流れる三滝川の左岸台地上に、永井遺跡がある。この遺跡は四日市市の台地上にあった二つの弥生時代の遺跡の一つである。

その一つは、三重地区の大谷遺跡であって、昭和38年に県道、四日市～田光線バイパスの工事によって、遺跡の中央部が破かいされ、昭和41年夏に到って発掘調査が行われた。その結果は、記録と百分の一の模型にその姿をとどめることができた。

残る一つがこの永井遺跡で、この周辺には永代寺山、上畑の遺跡があり、このあたりは弥生時代を中心とした大規模な古代集落地として戦前から知られていた。

今回の調査は、利用度の少ない雑種地や畑地を整理して、宅地化しようとする土地所有者からの申し出に端を発し、国庫補助事業として、400万円の経費と7ヵ月の日数を費して、実施したもので、区画整理の土地にかかっている約4000㎡の土地から、県下でも数少ない方形周溝2基と、弥生時代の溝跡8本、それに数多くの住居址、石器、土器が検出され、弥生時代前期から古墳、奈良、平安、鎌倉時代に到るものとして明らかにされた。

これらの中で、特に住居址の多い地区、約500㎡を緑地として保存することができたのはまことに喜ばしいことである。

調査にあたり、ご尽力をいただいた三重大学教授服部貞蔵氏、三重県教育委員会文化課の職員、ならびに近郊の小中学校教職員をはじめ、発掘調査に当られた方々に厚くお礼申し上げるとともに、発掘作業にご協力いただいた方々に対し、深く謝意を表します。

昭和48年3月

四日市市教育委員会

教育長　市　川　一　郎

はしがき

四日市市尾平町永井及び石塚両地区にわたるいわゆる永井遺跡は昭和36年の埋蔵文化財包蔵地調査に弥生時代のものとして登録されているが、その後尾平町一帯の市街化に伴い、45年には同遺跡の一部に家屋が新築され、その際、多量の弥生式土器が出土したが、未調査のままに終っていた。ところが46年末に至って地元地主の人々による土地区画整理事業の議が起こり、このことを市教育委員会が探知して、幾度か交渉が重ねられ、保存についても充分考慮するということで発掘調査に踏み切った。調査は47年5月8日から11月末までかかったが、調査担当者には県教育委員会の小玉道明氏、伊藤久嗣氏をわずらわし、調査員には市及び周辺の各学校の教員や有志で発掘経験を持つ方々にお願いした。この方々は本職の多忙な中を割き、また休暇中も炎天下に立って労苦を重ねられたのであった。

調査の結果は本文に詳しいが、要するにこの遺跡は弥生各期から鎌倉時代にかけての長期間にわたる複合遺跡で、特に多量の弥生前期の土器、弥生中期後半と後期の方形周溝遺構2基、平安時代の倉庫らしき掘立柱建物址数基などは注目されるものであろう。

この遺跡の保存について方形周溝遺構、弥生前期の数条の溝址、方形建物址を含めることを主張していたが、地形の関係などから緑地保存予定地変更の措置による最小限度にとどまらざるを得なかったのは遺憾である。

しかしこの遺跡はなお東南区に当たる台地先端部に遺構を残しているのでこの地区の保全には関係方面で万全を期して頂きたい。

終りに市教育委員会並びに困難な条件の下に発掘に従事され、また多忙の中に出土品整理、報告書作成に当たって頂いた方々に心から謝意を表するものである。

四日市市文化財調査会委員発掘調査責任者

服　部　貞　蔵

例　　言

1. 本書は、四日市市が国庫及び県費補助をうけて行なった四日市市尾平町・永井遺跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものである。

2. 調査は、四日市市教育委員会が主体となり、三重県教育委員会の指導のもとに、市内小中学校の有志教職員を四日市市文化財臨時調査委員に委嘱し、実施した。

3. 調査をすすめるにあたり、四日市市役所区画整理課をはじめ、地元石塚土地区画整理組合の協力を得た。

4. 本文中の遺構略符号は下記による。

ＳＢ：竪穴住居址、掘立柱建物址　　ＳＫ：土坑

ＳＤ：溝址　　ＳＸ：方形周溝址

目　　次

(頁)

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　位置と地形 …… 3

Ⅲ　遺　　構 …… 4

Ⅳ　遺　　物 ……21

Ⅴ　結　　語 ……49

　　補　　論 ……51

図　　版

1　永井遺跡位置図

2　永井遺跡地形図と発掘区

3　主要遺構配置図

4　東部遺構平面図と溝址断面図

5　中部遺構平面図

6　北部遺構平面図・方形周溝址断面図

7　住居址実測図

8　住居址・土壙実測図

9　(1)(2)遺跡遠景　(3)　遺跡近景

10　(1)(2)発掘区全景

11　(1)(2)発掘区東部

12　(1)(2)ＳＤ４，ＳＤ５，ＳＤ６溝址

13　(1)発掘区中部　(2)発掘区北部

14　(1)(2)ＳＸ74，ＳＸ75方形周溝址

15　(1)ＳＸ75方形周溝址

　　(2)ＳＸ74方形周溝内の土器

16　(1)ＳＢ38住居址

　　(2)ＳＢ58，ＳＢ62，ＳＢ63，ＳＢ64住居址

17　(1)ＳＢ72，ＳＢ73住居址

　　(2)ＳＢ73住居址

18　(1)ＳＢ79住居址

　　(2)ＳＢ78掘立柱建物址

19　石鏃，石斧，石包丁等

20　石斧，石剣，土錘等

21　ＳＤ１溝址・壺

22　ＳＤ１溝址・壺，蓋，高杯，鉢，甕

23　ＳＤ１溝址・甕

24　ＳＤ２溝址・壺，蓋，鉢，甕

25　ＳＤ３溝址・壺，蓋，鉢，甕　土器拓影

26　ＳＤ４溝址・壺，鉢，甕

27　ＳＤ５，ＳＤ６溝址・壺，鉢，甕

28　ＳＤ１溝址・土器拓影

29　ＳＤ２，ＳＤ４溝址・土器拓影
30　ＳＤ５，ＳＤ６溝址・土器拓影
31　ＳＤ６溝址・壺，甕
32　ＳＸ74方形周溝址・壺
33　ＳＸ74方形周溝址・壺
34　ＳＸ74方形周溝址・壺，高杯，鉢，甕
35　ＳＸ74方形周溝址・甕
36　ＳＸ75方形周溝址・壺，高杯，甕
37　その他出土地・土器，土器拓影
38　ＳＤ６溝址，ＳＸ75方形周溝址・土器拓影
39　ＳＸ74方形周溝址・土器拓影
40　弥生時代後期の土器
41　弥生時代後期の土器
42　土師器
43　土師器，須恵器
44　灰釉陶器，緑釉陶器，山茶椀，山皿
45　石鏃，石剣，石斧
46　(1)不定形刃器，独鈷石，石包丁
　　(2)土錘，紡錘車，勾玉，羽口，緑釉陶器
47　弥生時代前期・蓋，壺
48　弥生時代前期・甕，鉢，小型土器
50　弥生時代後期・壺，高杯
51　土師器，須恵器，灰釉陶器
52　山茶椀，山皿

表

第 1 表　弥生時代後期竪穴住居址の規模
第 2 表　古墳時代後期竪穴住居址の規模
第 3 表　奈良時代竪穴住居址の規模
第 4 表　掘立柱建物址の規模
第 5 表　遺構別実測石器，土製品等
第 6 表　壺形土器口頸部界文様頻度表
第 7 表　壺形土器頸胴部界文様頻度表
第 8 表　壺用蓋形土器の型式一覧表
第 9 表　甕形土器口縁部刻目の有無と頸部文様
第 10 表　甕形土器口縁部，頸部の文様
第 11 表　口縁部～胴部による壺，甕の比率
第 12 表　土器底部による壺，甕の比率
第 13 表　中ノ庄，上箕田，永井に於ける壺形土器口頸部界文様頻度表
第 14 表　中ノ庄，上箕田，永井に於ける壺形土器頸胴部文様頻度表
第 15 表　中ノ庄，上箕田，永井に於ける甕形土器の文様頻度表
第 16 表　甕形土器頸部の沈線条数
第 17 表　池上遺跡（L.058溝），永井遺跡に於ける壺形土器の文様
第 18 表　口縁部端面文様
第 19 表　口縁部内面文様
第 20 表　口縁部端面と内面の文様
第 21 表　甕形土器底部の形態
第 22 表　遺構別実測土器
第 23 表　遺構別実測土器

I　調査の経過

四日市市の中央部を西から東へ流れる三滝川の北岸、台地上の畑や雑種地は戦前から郷土史家たちによって、弥生時代中期の石器、土器片などの散布するところとして知られていた。ここが小字名どおりの永井遺跡である。

昭和39年、尾平町に県立四日市商業高校が移転するとともに、この辺一帯は、新都市計画法によって市街化区域に決定された。このころより、永井遺跡も都市化の波にさらされることになり、遺跡の一部にいつの間にか住宅が建ちはじめ問題化されてきた。

昭和41年になると、県立四日市商業高校のある通称永代寺山の南斜面下にある上畑地区一帯に耕地整理が行われることになり、上畑遺跡の緊急発掘調査が行われた。

それから5年後の昭和46年10月に地元、永井、石塚両地区内の遺跡である土地の所有者の間で、この場所は高低が甚だしく殆ど耕地としての利用度もなく、まして降雨時には東側斜面約20m下の住宅地帯に浸水禍をひきおこすことがしばしばとして、ここを区画整理しようとする計画がまとまった。

昭和47年2月に、四日市市教育委員会に対して、地元から事前調査の実施が要望された。そこで、市教育委員会では、三重県教育委員会と相談し、文化庁とも連絡をとって熟慮した結果、発掘調査も止むを得ないと判断してその準備を進めてきた。しかし地元では、この年の春から工事着手をめざして、再三にわたって市教育委員会への要望があり、市教育委員会としても地元民の利害を考えながら、三重県の重要遺跡50選の中にあるこの永井遺跡の発掘調査を如何にすべきかと度重なる協議を行なってきた結果、緊急発掘調査として、総額400万円にのぼる費用を、国庫補助200万円、県費補助66万、残額を市費負担で行うこととして、それぞれに対して申請書を提出し、5月8日から約3か月の予定で調査を開始する運びとなった。

しかし一方では、問題がもちあがってからあまりにも短時日の間のことであったので、調査員の問題が残されたままであった。市内の考古学研究家たちとの話しあいは数度にわたっても難行し、結局は、文化財保護と不時の傷害に対する医療保障との問

題から了解点に至らないまま、現地測量、試掘へと進んでいった。当初は地元の作業員約30名と県、市の職員のみであった。

調査はまず区画整理予定地16.000㎡のうち、事前に土器片等表面採集の行われていた4000㎡とその周辺あわせて25か所に16㎡の試掘坑を入れて、遺跡の状況と遺構の深さ、その広がりを把握することからはじまった。その結果浅いところでは現地表下、40㎝、深いところで70㎝に遺構があった。

ついで、茶の木や立木をブルトーザーで除去すると同時に、表土を約0.3ｍ排除し、斜面の下の方から発掘作業を開始した。

発掘作業は、例年になく雨天がつづき、台風に2度も見舞われ、その上遺構は試掘段階で確認されたよりも深く、8本の溝址、2基の方形周溝墓を検出、各時代にわたる住居址の重複、それに現地の傾斜があまりにも大きすぎたため、遺構の実測を2回にわけて行わなければならないなど、予定の日数を大きく上まわり、11月末になってようやく終了のはこびとなった。

なおこの調査についてはつぎの方々におねがいした。

調査主体　四日市市教育委員会

調査指導　服部貞蔵（三重大学教授）

調査担当者　小玉道明（三重県教育委員会文化課）

伊藤久嗣　同　上

調査員　片岡雅章（県立四日市南高校）浅生悦生（楠中学校）安田日出麿（港中学校）川井信吾（水沢小学校）森逸郎（三重小学校）花房哲也（下野小学校）高川晃（川越北小学校）伊藤洋（日本合成ゴムＫＫ）樋尾重雄（同上）早川裕己（皇学館大学学生）鈴木成諦（北勢教育事務所）

また、発掘調査後の出土品整理報告書作成は、小玉道明をはじめ、伊藤洋、早川裕己、森逸郎が主としてあたった。

（番条勇雄）

Ⅱ　位置と地形

永井遺跡は、四日市市街地の西方約3㎞の四日市市尾平町字永井、字石塚の台地上にある。この台地は、標高20m～30mで、北の海蔵川、南の三滝川にはさまれた標高60m内外の生桑丘陵地の南東麓にある。

台地の東麓には、四日市海岸平野がひろがり、南から西へは、三滝川による谷低平野が細長く入りこんでいる。麓の水田との比高は5m～10mあり、四日市の市街地ばかりでなく、伊勢湾をこえて対岸の知多半島まで遠望できる地となっている。

台地の各所には、弥生時代前期から各時代の遺跡、古墳が知られている。同じ生桑丘陵地の北東側の台地には、この永井遺跡と全く類似した生桑町・大谷遺跡があり、この四日市中央部の最初の開拓のはじめられたことがわかる。また、弥生時代後期の集落址としてよくしられている東日野町・東日野遺跡は、南方約2㎞の台地上にあり、古墳時代末期から奈良時代の大集落址である西坂部町・貝野遺跡は、北方約3㎞の海蔵川北岸の台地上にある。一方、古墳としては、生桑町・大谷遺跡の上につくられた大谷古墳群（全5基）以外は、単独でつくられたものがいくつかある。貝野遺跡に隣接した貝野古墳（方墳）、永井遺跡の北数100mの生桑町・庚申塚古墳、南方約1㎞の松本町・ひばり山古墳（円墳）などである。

また、東側の海岸平野にも、遺跡が知られている。三滝川南岸の平地には、伊倉町・浄祐遺跡（弥生時代後期）、大井手町・前山遺跡（弥生時代後期鎌倉時代）、中川原町・宮の西遺跡（弥生時代後期以降）、赤堀町・北中寺遺跡（弥生時代後期以降）など、各所にみられる。これらのほとんどは、水田下に深く埋没していて、台地上の遺跡とは対象的である。

永井遺跡のある台地上は、西から東へなだらかに傾斜をなし、中央には、巾5mほどの深く浸食された谷がある。遺跡は、この谷の南側一帯にひろがり、古く西端は宅地になっていて、その規模はあきらかでない。しかし、北側の県道尾平―垂坂―東富田線をはさんで西側にも、弥生時代後期にはじまる上畑遺跡があって、かなり広大な集落址の一部ともおもわれる。　　（森　逸郎）

Ⅲ　遺　　構

検出された遺構は、弥生時代前期の溝址、土坑、弥生時代中期の方形周溝址、土坑、弥生時代後期の竪穴住居址、溝址、土坑、古墳時代後期の竪穴住居址、土坑、平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物址、鎌倉時代の溝址、土坑など、各時代各種のものがある。

これらは、北一南一東にＬ字状の発掘区約2800㎡の範囲のなかで、比較的時代毎にまとまってみとめられた。弥生時代前期の遺構は、発掘区の東半に、弥生時代中期では、主として北東隅に、弥生時代後期では南西隅に、古墳時代後期以降では中央部に検出されている。

遺跡が台地上でも東端部のなだらかに傾斜地につくられたためか、発掘区の東部においては、現地表下30㎝～40㎝と比較的あさく埋もれていた。一方、中央から西部では、現地下50㎝～70㎝と比較的ふかくから検出されている。しかし地山面は一様でなく、東部では表土である耕作土直下が粘質の黄色土で遺構の掘り方も比較的易くみとめられたのに対し、中部から西部では、砂質土混りの暗褐色土の個所がおおく、検出も手間どった。

1．弥生時代前期の遺構

大形の溝址と土坑がある。この時代の土器だけが出土した小穴もいくつかあるが、建物址は確認できなかった。

溝址は発掘区の東部において、６条が南西から東方へつづいている。これらは中心を南東においた弧状に平行している。もっとも東端のＳＤ１溝址から、もっとも西のＳＤ６溝址までは50ｍほどある。ＳＤ１とＳＤ２とは中心距離で8.5ｍ、ＳＤ2、3、４はそれぞれ12ｍ前後はなれて、その間隔がひろく、ＳＤ4、5、6はそれぞれ6.5ｍ間隔でせまい。ＳＤ７溝址も同時代のものであるが、他のものより細く、浅い。いずれも埋土は黒色土で、多量の土器片がうまっていた。ＳＤ７溝址以外は、南西部が事業地外へつづいている。

(1) 溝　址

ＳＤ１　巾1*m*～3.3*m*、深さ15*cm*～35*cm*。中央部がもっとも広く、深い。断面は逆台形で、底面は平坦である。東端に向って傾斜しているが、細く浅くなっていく。溝内には、多数の円礫とともに、土器片、石器がうまっていた。

ＳＤ２　巾1.7*m*～2.0*m*、深さ20*cm*～45*cm*。掘り方の壁面は、北側が高く、南側が低い。東端は地山面が北東側の谷にむかって傾斜していて流出している。溝内のうちでもとくに西半の北壁寄りから、多数の石鏃、石器剝片が出土した。

ＳＤ３　巾1.4*m*～2.0*m*、深さ30*cm*～65*cm*。南西端は鎌倉時代のＳＤ15溝址と交叉している。他の溝址と同様、土器片がおおくうまっていたが、東端部ではとくに多く出土している。また中央部では弥生時代中期の土器片が出土し、溝外にも比較的多く土器片がみられた。

ＳＤ４　巾1.6*m*～2.2*m*、深さ40*cm*～60*cm*。南西寄りがもっとも広く深い。とくに南西端では、溝の上面が砂混りの黄色土でおおわれ、掘立柱建物の柱穴状の小穴がみとめられている。

ＳＤ５　巾1.8*m*～2.0*m*、深さ40*cm*～60*cm*。溝底は、巾１*m*ほどの平坦面をなす。東端では、平面がハの字状にひろがる。また、溝址に沿って南東側には、巾1.2*m*、深さ15*cm*～20*cm*ほどの他の浅い溝が重複してつづいている。この浅い溝址は、各時代の遺物が混在していて、時代は判別しがたい。

ＳＤ６　巾2.5*m*前後、深さ50*cm*。発掘区においてもっとも長く検出できたものである。この時代の弧状の大溝のうちではもっとも北側にあたる。溝内には、とくに中央部において弥生時代中期の土器片も多数混在していた。

ＳＤ７　巾90*cm*前後、深さ10*cm*前後。ＳＤ１溝址とＳＤ２溝址との間にある。少量の土器片がうまっていた。

(2) 土　坑

ＳＫ14　ＳＤ２溝址の北側にある径90*cm*×1.1*m*、深さ20*cm*。浅く小形のもので、この時代の土器片だけが出土している。ＳＤ１溝址の北側にも、こうした形状のものがいくつかある。

2. 弥生時代中期の遺構

この時代の土器片は、発掘区の中央から北部にかけてかなり出土しているが、遺構としては、方形周溝址2ヶ所と土坑数ヶ所がある。住居址は確認されていない。

方形周溝址は、発掘区の北東部において、その一辺を共用して東西に2基がつらなる。土坑は、中央部から北東部におおく点在している。平面は不整形なものがおおく、ほとんどが南北にながい。全く遺物の出土しなかったものもあるが、形状からこの時代のものとした。

(1) 方形周溝址

SX 74　西辺の一部と、北辺の大半が水田によって削平され、東辺と南辺とは全く不明で全体の形状は明らかでない。北西隅では、西辺と北辺が1 mほどはなれていて、つづかない。北辺は巾2.3 m、深さ60cmほどで、多量の土器片がうまっていた。西辺は巾2.5 m、深さ70cm。溝底には、多量の土器片とともに完形の壺がおかれていた。また小形の石斧も出土している。

SX 75　東西20m、南北20mの平面が方形の範囲のもの。四辺のうち、西辺と南辺はつづき、東辺と北辺はそれぞれ隅が広くあいている。西辺は巾2.5 m前後、深さ50cm。北端は鎌倉時時代のSD30溝址によりかなり上面が削平されていたが、壺がまとまっておかれていた。他の個所では、多数の土器片が出土している。

南辺は巾2 m前後、深さ50cm。この東端部は、すでに流出しているのか明確ではない。この西辺と南辺とがつづく南隅では、巾1.5m、深さ7.5cmで、ややせまくなっている。

北辺は、巾2 m、深さ60cm。西辺の北端までは6 m、東辺の北端まで5 mほどあり、それぞれ隅がかなり広くあいている。

(2) 土　坑

SK 19　巾1.1m、長さ3.1m、深さ46cm。北東一南西に長い。掘り方の壁面は、南西側がなだらかで、他は比較的急となっている。

SK 34　径1 m×1.9m、深さ50cm。北側の径1.1m、深さ15cmの浅い凹みと重複している。東西に長く、中央部がもっとも深い。溝内からは、凹線文をめぐらした壺の口縁部の破片が出土している。

SK 35　巾90cm、長さ2.2m、深さ50cm。SK34土坑の東側にある。平面は不整形で、西側に対してわずかに弧状をなす。溝内には、弥生時代前期の甕片とともに中期の壺の口縁部片がうまっていた。

SK 37　巾1.1m、長さ2.4m、深さ70cm。南北に長く、掘方壁面のうち、西壁はほとんど垂直になり、その他の壁面は急傾斜となっている。溝内からは、石鏃、石器剝片、土器片などが出土している。このSK37土坑に対し、西側1mには、巾60cm、長さ1.5m、深さ25cmの南北にながい小形の土坑がある。

SK 46　巾80cm、長さ1.8m、深さ50cm。平面は不整形ながら北東—南西にながい。東に対して弧状をなし、壁面は東側が比較的急となっている。遺物は出土していない。

SK 54　巾80cm、長さ1.8m、深さ56cm。北北東—南南西に長い。北端は鎌倉時代のSD65溝址により削平されている。掘り方の壁面は、東側が比較的急である。底面は船底状で南寄りがもっとも深い。土器片が少量出土している。

SK 60　巾1.1m、長さ2.8m、深さ60cm。北—東に弧状に長く、中央部がもっともふかい。

SK 72　巾1.2m、長さ2.0m、深さ50cm。北東—南西に半円状に長い。掘り方壁面は東側が急で他はなだらかになっている。

SK 76・77　SK76は巾60cm、長さ1.75m、深さ10cmであさいが、これと対する格好のSK77は巾80cm、長さ2m、深さ40cmである。それぞれ対応する側にわずかに平面が弧状をなす。

SK 81　巾90cm、長さ2.0m、深さ56cm。北北東—南南西に長く、平面は東に対しほぼ半円形をなす。北端上面は古墳時代後期のSB83住居址により削平されている。

SK 88　巾80cm、長さ2.4m、深さ50cm。鎌倉時代のSD60溝址の北端と全く重複して南北にながい。掘り方壁面は東側が急になつている。

SK 90　巾1.1m、長さ2.2m、深さ57cm。発掘区でももっとも北から検出された。南北に長く、南寄りがもっとも深い。掘り方壁面は東側が急になっている。

3. 弥生時代後期の遺構

発掘区の全域にわたってみられるが、竪穴住居址は大半が南西部に重複してあり、溝址は、東部に細いものがある。竪穴住居址は、いずれもあさく、周溝が方形にめぐるだけのものもおおい。主柱穴、炉址等も明確でなく、重複しているものも、前後関係の不明のものばかりである。住居内の出土遺物も少量の土器片だけの場合がおおく、しかも各時代のものが混在し、時期の確定しがたいものもある。

(1) 竪穴住居址

SB 18 もっとも発掘区の東から検出されたもので、床面の北辺は、弥生時代前期のSD4溝址の上につくられ、南隅は後世の畑区画溝で削平されている。周溝は、巾10cm、深さ5cmほどの細く、東辺と南辺には、径10cm、深さ15cmの小穴がいくつかみとめられる。床面には、径20cm前後、深さ10cmほどの小穴が不規則にあり、中央ちかくには、径60cm、深さ15cmの凹みがあって、少量の土器片が出土している。

SB 26 床面の大半が、古墳時代後期のSK25土坑などによって削平され、西角の周溝だけが検出されている。周溝は巾30cm、深さ10cm。周溝内とのこされた床面には、少量の土器片があった。

SB 33 鎌倉時代のSD31、32溝址と重複して、かなり掘りぬかれている。周溝は巾15cm、深さ20cmで、西辺だけのこっていた。北辺は東半だけに床面の掘り方がみられ、南辺は不明。主柱穴は明確でなく、このあたりの径50cm、深さ20cm前後の比較的大形の小穴からは、須恵器杯、甕片などが出土している。

SB 36 SB33と同様、鎌倉時代のSD31．32溝址に床面をほりぬかれている。また北東部では、弥生時代中期のSK35土坑とかさなっている。周溝は巾20cm、深さ5cmで、南角だけみとめられた。主柱穴は、四隅の径20cm、深さ25cm前後の小穴と思われる。

SB 38 東辺は鎌倉時代のSD32により削平されているが、全体として比較的よくみとめられた。北東角はSB36、南西部はSB39と重複している。周溝は巾20cm、深さ5cm。四隅の小穴のうち、径25cm、深さ25cmのものが主柱穴にあたろう。床面上から、丹彩の壺胴部、S字状の甕口縁部、深い杯部をそなえた高杯などの破片がある他、須恵器杯、土師器甑の把手、高杯片なども混在していた。

名称・SB	規模		主柱柱間		深さ	南北軸
	東西	南北	東西	南北		
	(m)	(m)	(m)	(m)	(cm)	
18	4.1	—	—	—	—	N27° W
26	—	—	—	—	10	N23° E
33	—	(4.4)	—	—	—	N 7° E
36	(4.8)	4.4	2.1	2.3	5	N27° W
38	(5.6)	5.4	3.2	2.9	15	N 7° E
39	(5.0)	(5.2)	2.2	2.4	—	N 3° W
40	—	—	—	—	25	N45° W
41	4.3	—	—	—	14	N30° E
42	5.5	5.1	—	—	8	N10° W
48	4.8	5.4	2.3	2.7	20	N38° E
49	—	6.1	—	—	10	N50° E
50	—	—	—	—	8	N 4° E
51	—	—	—	—	—	N23° E
52	—	—	—	—	—	N23° E
62	5.3	5.6	—	—	25	N16° E
64	5.4	4.1	—	—	18	N 6° E
70	4.0	—	—	—	5	N 6° E
85	—	—	—	—	5	N17° E
91	4.3	—	—	—	15	N 2° W

第1表　弥生時代後期竪穴住居址の規模（　）は推定

SB 39　SB38、41、42住居址と全く重複していて、南辺の周溝の検出により、一つの住居址としたもの。周溝は巾15cm、深さ5cm。床面の中央部にあたる所には、炉址とおもわれる径60cmの焼土面がある。主柱穴は、明確でないが、径30cm前後、深さ15cm前後のものがかんがえられる。

SB 40　大半が事業地外で全体の形状は不明。西側ではSB41住居址をほり下げている。周溝は巾30cm、深さ10cm。

SB 41　東側はSB40住居址によりほりさげられ、南側は事業地境界のため未掘。周溝は全体によくみとめられ、巾20cm、深さ5cm。主柱穴は不明で、北東隅と、南西寄りの径50cm×60cm前後、深さ30cm前後の小穴からは、弥生時代中期の甕口縁部片などが出土しているが、床面上では少量の後期の土器片が出土している。

SB 42　南辺中央はSB41竪穴住居址、東隅はSB39竪穴住居址、北半はSB44掘立柱建物址と重複していて、床面のほとんどが削平されたのか、周溝も部分的にしかのこっいてない。周溝は巾10cm～20cm、深さ5cm。床面には径20cm前後、深さ25cm前後の小穴がおおいが、主柱穴は不明。中央より西には、径30cmの範囲の焼土面がある。弥生時代中期の壺、甕の破片、後期の壺、高杯などの破片、灰釉陶器など、各時代の土器が出土している。

SB 48　北西側はSB49竪穴住居址とかさなっているが、それより床面がひくくつくられている。北東隅では、SB44、45、47掘立柱建物址がかさなっている。周溝は西辺にだけ巾20cm～25cm、深さ5cmのものがある。主柱穴は、四隅の径55cm、深さ40cmのものであろう。床面の各所に、弥生時代後期の土器片が少量うまっていた。

SB 49　南東側のSB48竪穴住居址により、大半が削平されている。周溝は北辺にだけ巾20cm、深さ5cmのものがある。床面の北東側には径30cm、中央より南には1m×2m、西隅に径70cmのそれぞれ表面だけがうすく赤い焼土面がある。径25cm前後の小穴が多数あるが、主柱穴は不明。床面上から、口縁部がS字状の台付甕片など多数の土器片が出土している。

SB 50　北半だけで、他は未掘。周溝は不明、主柱穴も不明。北隅には、床面より5cmほどたかく径70cmほどの焼土面がある。少量の土器片が出土している。

SB 51、52　発掘区のもっとも西端にあり、西半は事業地境界のため未掘。2基の住居址がほとんど重複している。周溝は、いずれも巾20cm～30cmで一定せず、深さは5cm前後である。床面の各所には、径20cm～40cmの大小の小穴がいくつかあるが、主柱穴は不明。床面の西側中央には、径70cm、厚さ2cmほどの焼土面がある。少量の土器片が出土。

SB 62　南東隅は鎌倉時代のSD31溝址により削平、大半はSB64竪穴住居址により掘り下げられている。また南半には古墳時代後期のSB63竪穴住居址、北東側には平安時代以降のSB61竪穴住居址がつくられている。周溝は北辺と西辺に巾20cm、深さ5cmのものがよくみられる。主柱穴、炉址は不明。弥生時代後期の各種の壺、甕、高杯などの破片が出土している。壺には丹彩のものがある。

SB 64　西隅は削平されたのか不明。平面は全体に東西に長く、他の住居址とは

やや異る。周溝は巾20cm、深さ5cmで、よく検出されている。床面には径90cm～1.5m、深さ5cmほどの凹みがあり、少量の土器片がうまっていた。主柱穴、炉址は不明。各所から各種の壺、甕、高杯などの破片が出土している。また、径5mm前後の円孔が多数あけられた甑の底部片もある。

SB 70　西辺は鎌倉時代のSD30溝址に、北端は古墳時代後期のあさい土坑により削平されている。周溝は、巾25cm、深さ5cmのものが南半だけにみとめられた。主柱穴、炉址は不明。少量の土器片が出土している。

SB 85　床面の大半が平安時代のSB86住居址により掘り下げられ、全体の形状は不明。南辺だけがのこり、周溝は巾20cm、深さ5cm。少量の土器片が出土している。

SB 91　もっとも発掘区の北端にある。床面の西辺と南辺のみがみとめられ、他は不明。周溝は巾20cm、深さ5cm。径30cm前後、深さ20cmほどの小穴が床面の各所にあるが、主柱穴は不明。床面の中央より南に径50cm×60cmの焼土面がある。各所から少量の土器片が出土している。

(2) 溝　址

SD 8　発掘区の東部において、弥生時代前期のSD1溝址と、SD2溝址の間の平坦部にある。巾80cm～1.2m、深さ5cm～10cmの深いもの。南南西から北北東につづき、末端は台地縁辺部で地山面の下降により消えている。溝内には少量の土器片が出土している。他に同時代の遺構は明確でないが、まわりから土器片が出土している。

SD 17　発掘区の中央において、弥生時代前期のSD4溝址の東側にある。巾50cm前後、深さ10cmほど、北東から南西につづき、東へまがっている。住居址の周溝風でもある。土器片が少量出土している。

4. 古墳時代後期の遺構

竪穴住居址と土坑がある。いずれも、発掘区の北半において、東部と西部にまとまっている。竪穴住居址は、床面の一端にかまどをそなえ、弥生時代のものより比較的ふかくつくられている。土坑は、平面が不整形で、それぞれ各種の須恵器、土師器の破片がうまっていた。弥生時代の土器の混在しているものがおおい。

(1) 竪穴住居址

SB 71　床面の中央には、南西から北東にかけて、弥生時代前期のＳＤ６溝址がつづく。竪穴住居址のなかでは、もっともおおきいが、残りとしてはよくない。かまどは不明である。周溝も巾10cm～20cm、深さ15cmで、南側だけにみとめられる。床面の北半では、径40cm～50cm、深さ30cmほどの比較的大形の小穴があるが、主柱穴は不明。須恵器の三方透しの高杯脚部片、甕片などがある。

SB 72　ＳＢ71の北側にあり、比較的、全体によくのこっていた。周溝は巾20cm、深さ５cmで、南東側は検出されない。主柱穴は径25cm～40cm、深さ40cm。かまどは北辺中央にある。径1.1 m×80cmの範囲に、焼土粒、炭片の混在したたかまりがあり、この中央の45cm×30cmほどが５cmほど厚く焼けている。かまどの前には、径1.2 m×1.5 m、深さ15cmほどの浅い土坑があり、多量の灰がふくまれていた。北東隅には、径70×90cm、深さ30cmの小形の土坑がある。貯蔵穴であろう。床面の各所から、須恵器の杯身、高杯、土師器の甕などの破片が出土している。

名称・ＳＢ	規模		主柱柱間		深さ	南北軸
	東西	南北	東西	南北		
	(m)	(m)	(m)	(m)	(cm)	
63	(4.0)	—	—	—	10	N16° E
71	5.5	5.8	—	—	25	N46° E
72	5.0	4.8	2.2	2.2	44	N35° E
73	5.2	4.7	2.2	—	25	N 5° E
83	(5.0)	4.7	(2.4)	1.9	15	N23° E
87	—	6.2	—	—	20	N 4° E

第２表　古墳時代後期竪穴住居址の規模

SB 73　床面の南半は、弥生時代前期のＳＤ６溝址の上にあたる。ＳＢ72と同様、比較的全体によくみとめられた。周溝は巾25cm、深さ５cm。主柱穴は径30cm、深さ30cm。かまどは他の住居址とは位置がことなり、北西側につくられている。径90cmの範囲に、焼土粒、炭などの混在したたかまりがあり、この下は、深さ20cmほどの凹みとなり、中央に径15cm、長さ20cmの角礫がたてられている。床面の北北西隅には、径70cm×90cm、深さ40cmの貯蔵穴とおもわれるものがある。

SB 63　弥生時代後期のＳＢ62、同ＳＢ64住居址の上につくられているが、ほとんど床面が同一面となっていて、全体の形状は確認できなかった。弥生時代後期の住居外にあたる西側において、わづかにこのＳＢ63の掘り方とおもわれるものがのこっているが、周溝はつくられていない。この西側の掘り方とかまどの位置とから、住居の北辺の長さを推測して、東西４ｍほどの小形のものとおもわれる。主柱穴も不明。かまどは、径１ｍ×1.6ｍの範囲に焼土粒をふくんだたかまりがあり、中央には径15㎝、長さ20㎝の角礫がたてられていた。

SB 83　東半だけ確認されたが、比較的残りはよい。西半は事業地境界に近く未掘。周溝は巾25㎝、深さ５㎝前後、主柱穴は径35㎝～40㎝、深さ20㎝でやや浅い。かまどは、径１ｍほどの範囲に焼土粒の散在するたかまりで、基底面は厚さ10㎝まで赤くかたくやけている。中央には径15㎝、長さ25㎝の角礫がたてられている。このまわりは、良質の黄色粘質土でおおわれているが、中央の支石のまわりは、空間となっていた。基底面と黄色粘質土との間には、黒褐色土がつまっていた。

かまどとは反対側の床面の南東隅には、径60㎝×75㎝、深さ30㎝の平面方形の貯蔵穴とおもわれるものがあり、なかに須恵器の杯、高杯などの破片がうまっていた。

SB 87　ＳＢ79と同様、東半だけが確認されたが、東辺は奈良時代のＳＢ86住居址および後世の坑によって掘りぬかれている。南辺もＳＢ79によって削平され、全体の形状は不明。周溝は巾25㎝、深さ10㎝。主柱穴、かまどとも不明。床面上には、土師器甕、高杯など完型のものが横転していた。

(2)　土　　坑

SK 25　弥生時代前期のＳＤ５溝址、同ＳＤ６溝址の間の平坦部の中央にあるが、平面がきわめて不整形な凹みである。径2ｍ×2.5ｍ、深さ40㎝ほどのもので、須恵器杯、甕、甕などの破片が多量にうまっていた。

SK 57　発掘区の西部で、ＳＢ56掘立柱建物に接したもの。径2.5ｍ×4ｍ、深さ20㎝のあさいが大きいもの。検出当初、住居址ともおもわれたが、東西に長い、平面不整形のものである。須恵器杯、高杯、甕、土師器甕などの破片が多量にうまっていた。

SK 68　同時代のＳＢ71住居址の北西側にある。径2.2ｍ×2.7ｍ、深さ30㎝の平

面が円形にちかいもの、底面はひろく平垣である。須恵器杯、甕、土師器甕などが出土している。

5. 奈良時代の遺構

竪穴住居址および掘立柱建物址がある。これらは、発掘区の中央部におおくみられる。竪穴住居址は平面が10㎡前後の小形のもので、掘り方もあさい。床面の一方にかまどをそなえているが、古墳時代後期のもののような支石をともなわない。掘立柱建物址のうち、2間四方、3間四方の倉庫風のものは、発掘区中央部でも南におおい。北部のものは柱穴の掘り方も小規模である。

(1) 竪穴住居址

SB 24 弥生時代前期のSD5溝址とSD6溝址の間にある。古墳時代後期のSK25土坑の上につくられ、全体の形状は検出できず、床面の北東隅と、かまど址だけである。かまどは炭まじりの黄色土で、80cm×1.0mほどの範囲が赤く焼けていた。主柱穴は不明。遺物も皆無にちかく、わずかに須恵器片が出土している。

SB 58 この時代のものの中では、もっとも大形で、しかも他のものとはことなり南北にながい。東辺は鎌倉時代のSD60溝址により、また北隅は一部、後世の掘り込みで削平されている。全体によく検出されている。周溝は巾15cm、深さ3cmで、浅く細い。かまどは北辺中央にあり、径80cmの範囲に焼土粒がみられた。小穴はいくつかあるが、主柱穴は不明。土師器の長甕の破片一個体分が出土している。

名称・SB	規模 東西 (m)	規模 南北 (m)	主柱柱間 東西 (m)	主柱柱間 南北 (m)	深さ (cm)	南北軸
24	(3.5)	—	—	—	5	N 8° E
58	3.2	4.1	—	—	10	N15° E
61	—	—	—	—	10	N 1° E
79	3.7	2.8	1.6	1.5	15	N 9° E
82	3.0	3.0	—	—	10	N 3° E
86	2.5	(3.0)	—	—	30	N14° E
SK 23	2.8	2.5	—	—	24	N 9° E

第3表 奈良時代竪穴住居址の規模（SK23は鎌倉時代）

SB 61　床面の西半は弥生時代後期のＳＢ62竪穴住居址の上につくられ、東半は鎌倉時代のＳＤ30、31溝址により削平されるなど、全体の形状は不明。かまどと、北辺の一部とがのこっているだけ。周溝は巾15㎝、深さ３㎝で浅く細い。かまどは北辺にあり、径50㎝×70㎝の範囲が赤く焼けている。主柱穴は不明。

SB 79　南隅が後世の掘り込みにより一部削平されているだけで、全体によく検出されている。周溝は巾20㎝、深さ３㎝。主柱穴は四隅の径30㎝前後、深さ20㎝ほどのものとおもわれる。かまどは径70㎝×80㎝ほどの範囲が10㎝ほどがたかまり、中央部の径20㎝、厚さ５㎝ほどがよく焼けている。床面上には比較的多くの須恵器・高台付杯、土師器・甕などがある。

SB 82　平面が方形の小形のもので、発掘区でも北にある。かまどにあたる個所が、鎌倉時代のＳＤ60溝址の延長部分に削平され不明。周溝は巾20㎝、深さ５㎝のものが西辺にだけみとめられ、他はみられなかった。小穴がいくつかあるが、主柱穴としては不明。

SB 86　この時代の竪穴住居址としてはもっとも北に検出されたもの。北側は後世の掘り込みにより削平され、全体の形状は不明だが、ＳＢ82竪穴住居址と同様、平面方形にちかいものであろう。周構はみとめられず、主柱穴、かまど址ともに不明。北東外側には、屋外かまど址であろうか、径１ｍほどの範囲の焼土面が、南北に接して２ヶ所ある。床面上では、少量の土師器片が出土している。

(2)　掘立柱建物址

SB 22　検出された掘立柱建物址のうちでは、もっとも東にある。南隅は弥生時代前期のＳＤ４溝址と重複している。２間四方のもので、中央には床束がある。柱穴掘り方は方50㎝、深さ50㎝前後である。掘り方内には、弥生時代後期、古墳時代後期奈良時代など各時代の土器片がうまっており、周囲の小穴内にもそうした土器片が多く出土している。

SB 27　発掘区の南側で、弥生時代前期のＳＤ５溝址の上につくられている。３間四方のもので、床束をもつ。柱穴掘り方は方60㎝、深さ45㎝前後で検出された掘立柱建物址のなかでも、もっともよく整っている。柱穴掘り方内には、弥生時代前期以降の各時代の土器片がうまっていた。建物の形状からこの時代のものとした。

SB 28　SB27掘立柱建物址の西側の2間×4間の身舎だけの東西棟。弥生時代前期のSD6溝址の上につくられ、柱穴の一部は鎌倉時代のSD29溝址などにより削平されている。柱穴掘り方は方50cm前後、深さ25cm前後で浅い。掘り方内には、弥生時代後期、古墳時代後の各種の土器片をはじめ、須恵器、灰釉陶器が埋まっていた。

名称・SB	規模	桁行	梁行	棟方向	柱間寸法	
					桁行	梁行
	(間)	(m)	(m)		(m)	(m)
22	2×2	3.5	3.3	N44° E	1.75	1.65
27	3×3	4.5	4.2	N42° W	1.5	1.4
28	4×2	6.2	3.0	N65° W	1.55	1.5
44	3×3	5.6	4.7	N86° E	1.86	1.56
45	3×3	5.5	5.4	N23° E	1.83	1.8
47	3×3	5.6	4.9	N 9° E	1.86	1.63
56	4以上×2	6.7以上	4.0	N 4° W	1.67	2.0
66	2×2	3.4	3.1	N73° E	1.7	1.55
69	3×2	5.5	3.5	N10° W	1.83	1.75
78	3×2	4.0	3.3	N15° E	1.33	1.65
89	3×2	4.2	2.7	N47° W	1.4	1.35

第4表　掘立柱建物址の規模

SB 44　発掘区の西寄りで、北東側ではSB45掘立柱建物址と重複している。3間四方の倉庫風のもので、床束をもつ。柱穴掘り方は方50cm前後、深さ40cm前後。掘り方内には、弥生時代中期、同後期の土器片、須恵器片がうまっていた。

SB 45　南側がSB44掘立柱建物址、北隅はSB47掘立柱建物址と重複している。3間四方のもので床束をもつ。柱穴掘り方は方40cm前後、深さ30cm前後、掘り方内には、弥生時代後期、古墳時代後期の各種の土器片がうまっていた。

SB 47　東半がSB45掘立柱建物址と重複している。3間四方のものであるが、SB45と同様、比較的南北にながく、南北棟とおもわれる。柱穴掘り方は径50cm前後、深さ30cm前後、柱通りはわるく、北側柱列は、鎌倉時代のSD32溝址によりかなり削平されている。

SB 56　北半が事業地境界のため未掘で全体の形状は不明。2間×4間以上の南北棟。柱穴は径50cm前後、深さ35cm前後。この掘立柱建物址の周囲にも、径50cm前後の

小穴が多く数検出されていて、なお数棟のものがかんがえられるが、建物としてまとまらない。

SB 59　発掘区の西部の中央において、SB58、62竪穴住居址と重複している。2間×3間の北東一南西棟。柱穴掘り方は径30cm～50cm、深さ20cm～30cmで、柱通りはわるい。建物址と推定したが、明確でない。

SB 66　2間四面の倉庫風のもので、床束をもつ。柱穴掘り方は径40cm前後、深さ20cm前後。

SB 69　SB66掘立柱建物址の南側にある。2間×3間の南北棟。柱穴掘り方は径30cm～45cm、深さ30cm前後で、柱通りとも不揃いである。

SB 78　2間×3間の北東一南西棟。柱穴掘り方は径30cm前後、深さ35cm前後で細いものが多い。

SB 89　発掘区のもっとも北にある。北隅が弥生時代後期のSB91竪穴住居址に重複し、北東隅の柱穴は鎌倉時代のSD30溝址の北端により削平されている。2間×3間の北西一南東棟。柱穴掘り方は径30cm前後で、SB78掘立柱建物址と同様、比較的細い。また北側柱列は、柱通りも不揃い。

6. 鎌倉時代の遺構

発掘区の全域から、山茶椀、常滑焼の甕片などが多量に出土しているが、遺構等としては、大小の溝址を主とする。溝址は北部、中部において、北から南へ、または西から東へ直線的につづくものがおおい。遺物としては、この時代のものに限定されず、弥生時代前期以降、各時代のものが混在している。埋土は砂質の茶褐色土がおおい。

(1) 溝　　址

SD 15　弥生時代前期のSD4溝址の南端寄りから、同SD3溝址を掘りぬいて、事業地外へとつづいている。巾70cm前後、深さ20cm前後の断面逆台形のもの。

SD 29　弥生時代前期のSD6溝址の南端寄りから、同SD5溝址の南端を掘りぬいて東端はきえる。巾は80cm前後、深さ20cmほどで、SD15溝址と同様のもの。南西側1mにも、同様のものが南北につづいている。

SD 30　発掘区の北部中央から南部につづくもの。北側では、弥生時代中期のS

X75方形周溝址の西側を掘りぬき、北端は西壁だけが段状にのこり、東壁はみとめられない。南端は弥生時代前期のＳＤ６溝址の南端寄りできえる。巾２m前後、深さ40cm前後で、この時代ではもっとも広い。溝底の高さは一様でなく、溝全体からみて中央では深さ20cmと浅くなるが、北から南へとわずかに傾斜している。

ＳＤ 31　ＳＤ30溝址の西側に沿って北から南につづく。北端における、ＳＤ30溝址との切り合いでは、ＳＤ30溝址がうまってから、このＳＤ31溝址がつくられていたことがみとめられる。巾80cm前後、深さ30cm前後。

ＳＤ 32　発掘区の西端から東へつづき、「 字状に南にまがっている。西半では、溝址の中心距離で2.8m～3.4mほど北にＳＤ65溝址、南半では同じく 2.5 m前後ほど東にＳＤ31溝址がつづくなど、古道の側溝をおもわせるものである。巾は70cm前後、深さ30cm前後。

ＳＤ 59　ＳＤ31溝址の西側へ溝の中心距離で３mはなれて、南北につづく。南半では弥生時代後期のＳＢ62、64竪穴住居址の埋土上につくられ、北端では同じくＳＢ91竪穴住居址とかさなっている。巾80cm前後、深さ20cm前後であさい。

ＳＤ 65　ＳＤ32溝址の北側に沿って、東西につづく。東端はＳＤ31溝址まで２m の個所でとまっている。巾90cm前後、深さ30cm前後で、壁面は鋭く掘りこまれている。

(2)　土　　拡

ＳＫ 23　径2.8m×3.0m、深さ30cm。平面が不整形ながらも方形にちかい。北辺中央に径60cm×75cm、高さ10cmほどのかまど址状のものもあって、建物址とかんがえられる。拡内から、山茶椀、山皿片が多く出土している。

（小玉道明）

7. 小　結

永井遺跡を特徴づけるものの一つとして、弥生時代前期につくられた6条の溝がある。これは、遺跡のある台地上を平行して弧状に掘られたものである。しかも、それは弧の中心を台地でも高い所に置かず、低い尖端部にとっている。これは、同じ台地の北方にある生桑町・大谷遺跡の同時期の溝址と全く同じものでもある。(1) 溝内には多量の土器などが埋まっていて、その形態の差からは同じ前期でも台地東端のＳＤ１溝址のものがもっとも古く、順次、台地の高い部分にあたるＳＤ６溝址へと、新しくなっていることがみとめられる。とくにＳＤ６溝址では、次期の弥生時代中期の土器もかなり混在していて、その時期においても全く埋まりきっていなかったことが知られるものである。

弥生時代中期としては、２基の方形周溝址が注目される。そのうちＳＸ74方形周溝は大半が後世の開田によって削平されているが、ＳＸ75方形周溝は、一辺20mというかなり規模の大きいものである。盛土および埋葬主体ともすでに削平されたのか、認められていない。またこの時期の遺構としたものに、平面が弧状をなす多数の土坑がある。そのうちのＳＫ34，35，54土坑から少量ではあるがこの時期の土器片が出土しているが、他の大半のものには遺物も埋まっていなかった。形状からこの時期のものとしたわけである。こうしたものは、鈴鹿市・東庄内Ｂ遺跡においても、多数検出されている。(2)

弥生時代後期としては、19基の竪穴住居址がある。同時期のもの、他の時期のものとの重複がひどく、全体の形状の明らかになったものは少ないが、平面方形のもので、竪穴の平面積が25㎡前後のものである。しかし、竪穴としての掘り下げも浅く、また、柱穴の配置、炉址など明確なものは少なく、大谷遺跡、西ヶ広遺跡等の規格性の強いものとは対象的である。(3)

これに対し、古墳時代後期の竪穴住居址はかなり規格性に富んでいる。６基が確認されているが、ＳＢ72，73，83竪穴住居では、床面の四隅に主柱穴を配置し、一方にかまど、一隅に貯蔵穴がつくられている。しかも、かまどには、小形のＳＢ63竪穴住居もそうであるが、細長い支石を埋めこんでいて、きわめて共通している。また竪穴としての掘りこみも、弥生時代後期のものに比べ平面積24㎡前後で大差はないが、深

くなっている。建物の方向としては、まちまちである。

奈良時代では、竪穴住居址と掘立柱建物址がある。竪穴住居では、同時代前後の東員町・西山遺跡、同・新野遺跡[4]、四日市市・智積遺跡などで検出されたものと同様、平面積10㎡前後と小形で、しかも柱穴の配置にまとまりがない。かまどは、それぞれ床面の隅につくられている。掘立柱建物址は、11棟が検出されている。しかし、時期はきめがたく、一応この時代のものとしたが、SB66，69，78，89建物は、柱穴も小さく、柱通りも悪く、形状が東員町・新野遺跡C地区のものと類似していて、平安時代に建てられたものとも思われる。平安時代、鎌倉時代とも遺物はかなり出土しているが、遺構は明らかでない。ただ発掘区を縦横断するように2条一組のあまり大きくない溝址があって、小路の側溝を思わせるものが注目される。

（小玉道明）

註

(1) 小玉道明ら『大谷遺跡発掘調査報告—A．B地区』四日市市教育委員会 1966

(2) 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会『東名阪道路埋蔵文化財発掘調査報告』 1970

(3) 小玉道明『西ケ広遺跡発掘調査報告—D地区』四日市市教育委員会 1972

(4) 小玉道明『新野遺跡発掘調査報告—C地区』三重県教育委員会 1972

Ⅳ 遺　　物

出土した遺物は、弥生時代前期から鎌倉、室町時代までの各時代の土器を主として、石製品、土製品などがある。完型のものは少なく、ほとんどが破片である。とくに土器は遺存状態も悪く、器表が全く剝離し、脆弱になっているものが多い。

これらのうち、弥生時代前期、同中期のものは、それぞれの時代の遺構内に埋まっていたものが多いが、他の時代のものは、発掘区の各所において、それぞれ混在して埋まっていたものがほとんどである。

1．石器，石製品，土製品（図版19，20）

石鏃、石剣、石斧、石包丁、石匙、不定形刃器、と石、土錘、紡錘車、羽口など各種のものがある。石器の大半は、弥生時代前期の各溝址から出土している。しかしその他は遺構の外において出土したものもあり、時期のきめがたいものも多い。

(1) 石　　鏃（1—11）

長さ3㎝以下の小形の打製石鏃で、11個出土している。無柄のもので、凹基、平基、円基の各種がある。2、8では剝離面をのこしているが、他は全面に調整されている。石材は黒雲母安山岩が大部分をしめる。

(2) 石　　剣（30）

磨製のもので、尖端が欠けていて現長は12㎝、最大巾は3㎝。中央に稜を示し断面菱形で鋭い。石材は黒色頁岩。

(3) 石　　斧

太型蛤刃石斧（12—17）完形のものはなく折損したものばかりである。断面は楕円形で全面がこまかく敲打調整され、刃部だけが磨かれている。15が石英斑岩で、その他は閃緑玢岩。

扁平石斧（18—21．32．34—39）刃部が扁平片刃石斧のように稜を示さないもの。長さ10㎝以上の大形のもの（18—21）、8㎝～9㎝の中形のもの（32．34．38．39）、5㎝以下の小形のもの（35—37）に大別される。38．39は全面打製であるが、他は、半磨製のもの。18は閃緑玢岩、19は硬砂岩で黒雲母を多く含む。20は緑色片岩、21は黒

色頁岩、32・34—39は閃緑玲岩製。

扁平片刃石斧（33）刃部が明瞭に稜をなしてつけられているもの。全面磨製である。閃緑玲岩製。

柱状片刃石斧（31）長さ13.5㎝、厚さ3㎝の断面が方形に近い磨製のもの。閃緑玢岩製。

種別 / 遺構	石鏃	石斧	不定形刃器	石剣	と石	石包丁	独鈷石	土錘	紡錘車	その他
SD 1		15	22.23.46					52.60		41
SD 2		14.21	45			27		59		40
SD 3	1.2.4.6 7.8.10.11	34				28	29	58		
SD 4		18								
SD 5	9	19.32	24.44		51			53.54		62
SD 6		13.17.33	43.48	30				55.56		61
SX74		20.36								
SX75		39	25						63	
SB38	5									
SB48	3									
その他		12.16.31 35.38	26.49					57	64	37.42.47 50.65.66

第5表　遺構別出土石器、土製品等

(4) 石包丁（27、28）

打製の大形のもので、両端には紐掛のえぐりをつけている。27は長さ10㎝、巾9.5㎝、28は長さ18㎝、巾9㎝。刃部をはじめ縁部は調整されているが、他は剝離面をのこす。2個とも黒色頁岩製。風化した表面には石英の斑点がみられる。

(5) 石　　匙（48）

1点だけ出土。刃部だけ調製され、他は剝離面のまま。サヌカイト製。

(6) 不定形刃器（22—26、43—47）

断面が扁平の横長のものである。母岩およびその剝離面を広くのこし、縁部だけあらく調製したものが多い。砂岩あるいは頁岩製。

なお40、41は刃器でなく石錘状のものであるが明らかでない。40は緑色片岩、41は閃緑玢岩。また42は（緑色片岩）、49（閃緑玢岩）も不定形のもの。それぞれ縁部が

調製される。

(7) 独 鈷 石 (29)

半分のもので、全長が約18cmほどのものと思われる。石英斑岩製。

(8) 石錘型石製品 (50)

7cm×7.5cm厚さ4.5cmほどのもの。中央部には凹みがめぐり、さらに四方が径2.5cmほど凹んでいる。石英斑れい岩製。

(9) と　　石 (51)

6cm×8.5cm、厚さ2.5ほどの小形のもの。2面がよく摩滅している。砂岩製。

(10) 土　　錘 (52—60)

円孔を貫通させたもの (52—58) と、凹線をめぐらした (60) とがある。円孔をうがったもののうちとくに53・54は胎土にあらい砂粒を多くふくんでいて、弥生時代前期の土器の胎土とよく似ている。60の胎土も同様である。他のものは胎土もこまかく砂粒をほとんどふくまない。

(11) 紡錘車 (63—64)

63は土製のもので、径4cm、厚さ7mm前後。中央の孔は径6mm。64は泥岩製で径3.3cm、厚さ3mm。風化がはげしい。

(12) 円板形土製品 (62)

土器片を円形に仕上げたもの。径4.5cm×5cm、厚さ1cmほどで、わずかに彎曲している。胎土には粗い砂粒をふくんだ弥生時代前期の土器片である。

(13) 投弾型土製品 (61)

径2.5cm、長さ4.7cmの小形のもの。胎土には砂粒を多くふくんでいる。

(14) 羽　　口 (65)

径6cmほどのものの断片、孔は径2cm。なお、発掘区の数ケ所から鉄滓も出土している。ある時期に野鍛冶の行なわれていたことがわかる。

(15) 滑石製勾玉 (66)

長さ3.8cm、厚さ4mmの扁平なもの。整形はあまりよくない。

(森　逸郎)

2, 弥生時代前期の土器

ＳＤ１溝址～ＳＤ６溝址を中心とし遺跡の各所で、前期土器が認められ、出土遺物中の約６割を占める。壺形土器の色調は黄褐色、茶褐色、黒褐色及び赤褐色等種々あるが、黄褐色のものがほとんどであり、胎土中に多くの砂粒を含み、器内外面をヘラ磨きしている。しかし、脆弱な為に剝離しているものも多い。甕形土器は壺形土器同様各色調のものがある。器面は細い、あるいは太い刷毛目で仕上げるもの、刷毛目を持たないもの等があり、これにＳＤ３溝址及びＳＤ５溝址に於いては条痕文系の深鉢形土器が極く少量伴出している。

大部分は壺形土器、甕形土器であるが、高杯形土器、鉢形土器、蓋形土器等が少量検出された。又、ＳＤ２溝址からは大洞系の鉢形土器が出土している。

(1) ＳＤ１溝址出土土器（図版21－23．28）

壺形土器（101～124、図版28; 1－11） 口縁部はあまり開かないものと大きく広がるものがあり、内外面はヘラ磨きを施し滑らかに仕上げている。口径は15㎝～20㎝のものがほとんどであるが、中には40㎝以上のものもある（123）。口唇部はほとんど無文であるが、沈線を１条施すものもある（117）。

口頸区分文様は口縁部側を高くした段を有するもの（101）、上下を巾広く削り出し凸帯としたもの（102）、同様の削り出し凸帯中に１条の沈線を有するもの（105･106）上下をわずかに削り出し、凸帯としたもの（図版28; 2）、同様の凸帯中に1条（104）、又は3条（107）の沈線を有するもの等がある。ヘラ描き沈線を施すものの中には口縁部の広がりが小さく、2条の沈線を有するもの（113）、その沈線間に刺突竹管文を施すもの（109）等がある。数条のヘラ描き沈線の上端と下端を削り取り凸帯状にしたものもある（103･108）。103、106のように紐孔を1孔有するものもあるが破片の為、対孔があるのか、否かは不明。これらの土器は佐原真氏の分類によれば「中」段階に属する。これらの土器とは別に「新」段階に属する壺形土器もある。口縁部が大きく広がり、頸部に２条（112）、3条（114）、又は４条（116）のヘラ描き沈線を有するもの、無文のものもある（110）。前記した117も「新」段階のものであり、赤褐色を呈する。貼り付け凸帯を有するものも多く、118のように断面三角形の凸帯を貼り付け、体外面に丹彩したもの、凸帯上にヘラ先きにより刻目を付けるもの（121･122）、

大きく削り取り乳首状貼り付け突帯としたもの（120）、大きな圧痕を有し（119）、畿内中心部に多い布目痕を残すものもある。これらの貼り付け凸帯を有するものの中には凸帯を貼り付ける位置に接着を良くする為沈線を施したものもある。

赤褐色を呈した土器の中には123のような小さな貼り付けを行ったものや、図版28;3のように摘み上げたようなものがある。いずれも大型の壺形土器である。「中」段階と同様、紐孔を有するものもある（118.119.121）が、形態の明瞭なものはすべて1孔を穿つのみで相対する位置にはない。

頸胴区分文様は削り出し凸帯、ヘラ描き沈線、貼り付け凸帯等口頸区分文様と同様に飾る。大きな圧痕をもつ貼り付け凸帯の下方に、半載竹管により弧文を描くもの（図版28; 11）もある。又形態は小破片の為不明であるが、中心線を描く木葉文を有するものである（同;9）。

壺用蓋形土器（136—142）径10～15㎝の土器で、A;皿形に近い扁平なもの（136.137）、B;やや持ち上げ笠形を呈するもの（140.141）、C;中央部のみ若干高くし摘み状にしたもの（138）、D;図示しなかったが鈕が、中凹みの環口状を呈するものがある。紐孔のわかるものはすべて中央に一孔を穿っており、周縁に穿った確実な例はない。142は無孔のものか、周縁に穿つのか不明。内外面をていねいにヘラ磨きしたものが多く、砂粒をほとんど含まない精製土である。

高杯形土器（134） 県内に於ける前期の高杯形土器出土例は現在のところなく、本遺跡に於いても、ただ一例のみである。わずかに開く脚部に、直口の鉢状を呈する杯部を付した土器で、杯内外面及び脚部をヘラ磨きしている。赤褐色を呈し、非常に光沢があり他の土器とは異なる。高杯形土器なるが故にだろうか。

同様の形態のものは唐古遺跡から出土しているが[1]、貝殻山貝塚出土のものとは若干形態を異にしている[2]。

鉢形土器（135） 口径が器高を上まわる土器である。口径13㎝弱の小型の鉢で茶褐色を呈し、やや歪なつくりである。この他にＳＤ4出土の206に類似したものもある。

ミニチュアの土器（126—133）小形の土器を一括し、ミニチュアの土器とした。壺（126－128.131）、甕（133）、鉢（129.130）がある。壺形のものは小形ながらよくその特徴を示し、126は口頸部に1条、頸胴部に3条のヘラ描き沈線を施す。他のものに

比べると、やや大きい土器で用途の違いを考えるべきかも知れない。口頸部と胴下半の対称する位置に黒斑が認められる。127はやや丈高な土器で、口頸部、頸胴部ともに2条の沈線を施し、口縁下の片側に1孔紐孔を穿つ。内外面ともに丹彩が認められる。131は2条ずつの沈線を、128は口頸部を無文とするが頸胴部は1条の沈線で飾る。133はその形態から甕形と考えられる。

鉢形のものは2種の形態があり、129は口縁下で若干細くなり、ここに1孔ずつ相対する位置に紐孔を持つ。130は単純に広がるものである。これらのミニチュアの土器は、巾のせまい粘土帯を積み上げた後、手指にて接着しているものと、最初から手づくねによるものとがある。用途については明らかでないが、127の丹彩等から祭祀用[3]とも考えられる。溝址中央部から比較的まとまって出土している。

甕用蓋形土器（143） 上げ底風の鈕に、大きく広がる口縁部を有する土器で、推定口径20㎝前後であろう。器外面が火によるものか剝離が激しい。他に平底状のものもある。

甕形土器（144－168、図版28; 12—24）ゆるく外反する口縁部に、直線状あるいはややふくらむ胴部を有する土器である。体外面は刷毛目で斜位又は縦位に調整するものが多いが、持たないものもある。口径10～35㎝を計り、口縁端はやや大きい刻目をもつもの、ヘラを押しつけただけのもの、全く無文のものがある。刻目をもつものの中には4～5本の細い線を有するものが少数認められるが、刻目を施す際の工具の痕跡と考えられる[4]。又、口縁下端にヘラ状工具を押しつけ波状を呈するもの（167）もある。

頸部の文様には段を有するもの（145.図版28; 12）、ヘラ描き沈線を1条（147.151.152.同28; 14）2条（153－159. 同28; 15. 16. 19）、3条（160—162. 同28; 17.20）、4条（163—165. 同28; 18. 21）施すものがある。無文のものもある。

図版28; 13は口縁部と頸部の接着面をそのまま残し、丸味をもつ段にしている。又3条の沈線間に刺突竹管文を有するものも認められる（160）。半載竹管により1帯の（159）、あるいは2帯（163—165.同28; 18.21）沈線を描くものがあるが、これらのほとんどは口縁部を肥厚させ、直角近くに折りまげた端部には細い刻目を有している。赤褐色を呈する特徴的な土器である。

これらの甕形土器とはやや形態を異にする土器が少量ある。口縁部外端に凸帯を貼り付けた逆L字形を呈し、口縁端には刻目を有するが、頸部はすべて無文である。口縁上面は刷毛目で仕上げている（166．同28;23．24）。

底部片の中には焼成後、一孔を穿ったもの（168）が認められる。

甕形土器にも壺形土器同様、古い要素をもつものがあるが、その区別は困難であり羅列だけに留めておく。

(2) ＳＤ2溝址出土土器（図版24，同29;1—15）

壺形土器（169－175．図版29;1—9）ＳＤ1出土土器と同様、口縁の広がりが小さいものと大きいものがある。口頸区分文様として巾広く削り出した凸帯上に2条の沈線をもつものヘラ描き沈線を1条（170）、又は3条（171）もつもの等、古い要素を示す土器と1条（173）あるいは2条（図版29; 7）の貼り付け凸帯を有するもの、口縁端に連続刻目を有し、赤褐色を呈する新しい要素を示す土器がある。

頸胴区分文様には、削り出し凸帯上に沈線を2条施すもの（175）、上方のみ巾広く削り出したもの(同29;3)、ヘラ描き沈線の上端（同29;5）又は上下端を削り取り凸帯状にしたもの、ヘラ描き沈線を2～4条施すもの(174.同29;4)、刻目を有する貼り付け凸帯を1条（同29; 6）又は2条有するもの等口頸区分文様と同様である。ヘラ描き沈線間に棒状刺突文を加えるものもある（同29;9）。175は底部に焼成後、一孔を穿っている、これらの土器はＳＤ1溝址出土のものと同様、「中」段階に属するものと「新」段階に属するものがある。

壺用蓋形土器（177．178）177は口縁部径13.9㎝、器高3.7㎝を計り、中央部を全体的に持ち上げ笠形にした完形に近い土器である。黄橙色を呈するが調整については剝落が激しく不明。中央に1孔を有する。178は器内外面をヘラでよく磨き、中央に1孔を穿つ笠形のものである。

ミニチュアの土器（188）直線状に開く鉢形のもの（188）で口縁近辺を薄く仕上げている。体内面は全面に丹彩を施し、体外面はヘラで丁寧に磨いている。

甕形土器（180－187．同29;10—15）ＳＤ1溝址のものと同様、口縁端に刻目をもつものと、もたないもの、頸部にヘラ描き沈線を1～4条施すもの、半載竹管で飾るもの等がある。

180は全形がわかる土器で小さく外反する口縁部に、ややふくらみのある胴部を有する。体外面は剝離が激しく小砂が器表に突出し黄橙色を呈する。ＳＤ１溝址には見られなかったものとして、頸部の上下端を削り、細い凸帯としたもの(同29; 12)がある。ヘラ描き沈線間に刺突文をもつもの（同29; 10.11）もある。187は沈線3条であるが、2条目を重複させた半載竹管で施文している。

鉢形土器（176）他の土器とは胎土、色調、文様等を全く異にする大洞A′類似の土器である。口径25.5㎝、推定高21㎝を計り、器壁は７㎜前後で頸部～底部にかけ殆んど同じ厚さである。胎土中には小砂を含み、内外面ともに灰黒色をなし、外面は丹彩を施している。文様は彫刻的に深く施され、口縁内面には、断続する２本の沈線を弧状につなぎ隅円長方形文とし、口縁端内外面より棒状工具を押しつけ波状にしている。外面の文様は胴上半と下半を５条の沈線で画し、上半には頸部近辺に２条の沈線を巡らしその間を途中で切れる渦巻状沈線文を1条づつ描き、それを２個１単位として4箇所に配する。渦巻状沈線文の間は沈線を山形に描き、胴中央の沈線に続けるらしいが欠失しており不明。

胴下半は横位又は斜位に沈線で羽状に描き、その間を数条の沈線で埋める。これらを一単位とし胴上半の渦巻状線と相応させていらしい。

底部近辺の沈線は周回せず、数カ所（恐らく上半の文様と相応させているのであろう）で切れている。

同様の土器は県内に出土例がないが、九合洞窟、西志賀遺跡、元屋敷遺跡、馬見塚遺跡、二反地貝塚で検出されている。

(3) ＳＤ３溝址出土土器（図版25)

壺形土器（189—191．198.図版25; 1—3） この溝址から出土した壺形土器は口縁部が大きく開き、胴部もふくらみの大きい扁球形を呈するものが多い。189は口縁部から頸部にかけ、刷毛目で調整後、圧痕をもつ凸帯を１条貼り付け、それに接し５条のヘラ描き沈線を描いている。口縁内面には断面三角形の凸帯を１条貼り付けるが、１周せず一方をあけ、渦状におさめている[5]。内面上部はヘラ磨きがよくなされている。

190は189とともに溝址南端の最下部から検出されたものである。赤褐色を呈し、胴部最大径の位置に刻目を有する凸帯を１条貼り付け、その上下にヘラ描き沈線を描き、

上方の沈線3条目と4条目の間には斜位又は縦位に沈線を入れ、巾広い文様帯にしている。

191も同様の土器で胴部最大径位置に刻目を有する貼り付け凸帯を1条付し、その上方には4条の沈線を描く。

甕形土器（193－197）個体数は少ないが口縁部に刻目を持つものは一点しかなく、他は無刻である。頸部も無文のものが多いが1条の沈線を有するもの(195・196)もある。197は口縁部を直角近くに曲げ内外面をヘラ磨きし他の甕形土器とは趣きをやや異にする大形のものである。口縁曲折部より上平坦面にかけ1孔と頸部に1孔を穿ち1対とした紐孔を有する。

深鉢形土器（192,図版25;4）条痕文系の土器で口縁部から頸部にかけ、やや器壁を厚くし、ゆるやかに外反する。二点同様のものが認められるがいずれも貝殻腹縁により、口縁近辺は水平に近く、頸部以下は斜位に荒い条痕文を描く。

口縁端面は押引文を施すもの（192）と丸味を帯びたもの(同25;4)とがある。色調は赤褐色をなす。

(4) ＳＤ4溝址出土土器（図版26，同29;16－24)

壺形土器（199－204・同29;16—20）ＳＤ3溝址のものと同様、口縁部を大きく広げ、胴部は1～2条の貼り付け凸帯と数条のヘラ描き沈線を組み合せ巾広い文様帯を形成するものが多い。

199は頸部に6条のヘラ描き沈線を施した後に上下端を浅く削り取り、凸帯状にしている。口縁を大きく広げ水平近くに曲げる。

半載竹管により2帯沈線を施すもの(200)もある。201は口縁部を肥厚させ、内面に3条の凹線をもつ赤褐色の土器で、口縁端上方より大きな圧痕文をつけ波形にしている。190又は202の如き胴部を有するのであろう。202は201同様、赤褐色を呈し扁球形の器体を有する大形の土器で胴部に3条の沈線を描きその上端を削り取り、段とし、内外面をヘラ磨きしている。

鉢形土器（206・同29;24）器高に対し口縁部の方が大きく、口縁を外方に広げた土器である。206は内外面ともに研磨した口径の大きいものである。瘤状把手を持つもの（同29;24)もある。

甕形土器（207—219・同29;21—24） 口縁端に刻目を有するものと有しないものがあり、頸部には沈線を1条施すもの(209・210)、2条のもの(211・同29;21)、3条のもの（212—214・同29;22）等がある。3条の沈線を頸部に2帯施し、その間を平行斜線文で飾るもの（同29; 23）や体内面に指頭圧痕をもつもの(208)もある。底部の中には焼成後1孔を穿つもの（219）もある。

205は立ち上がりにより甕形土器の底部としたが、蓋形土器とも考えられる。上げ底状の底部に1孔ずつ相対する位置に小孔を穿ち、凹線状の沈線を底部近くに5条施している。

(5) ＳＤ5溝址出土土器（図版27;220—228，同30;1—14）

壺形土器（図版27;220—223・同30;1—9）口頸区分文様としては上下を巾広く断面三角状に削り取り、一見貼り付け凸帯風にしたもの(220)、細い刷毛目で調整後、3条のヘラ描き沈線を施すもの(221)、9条以上の沈線を施し、巾広い文様帯を構成するもの（図版30;3)、貼り付け凸帯を1条又は2条（同30;6)施すもの等がある。頸胴区分文様には、黒褐色を呈し内外面ともにヘラ研磨した器体に2条の沈線を描くもの(同30;1)多条沈線で飾るもの(同30;4・5)、貼り付け凸帯をもつもの等がある。貼り付け凸帯をもつものの中には、接着をよくする為1条の沈線を描いた後に凸帯を貼り付けるもの(同30;7)がある。

ミニチュアの土器（224—226）口径8㎝、高さ5.2㎝のもの(225)と、口径6.2㎝高さ3.1㎝(226)の斜に開く土器で口縁端は丸味をもつ。淡黄色を呈する。

甕形土器（227・228・図版30;10—12）わずかに外反する口縁部に胴張りの強い無文のもの（227)、赤褐色を呈する特徴的な土器で、口縁部が肥厚し端面には細い刻目を有する半載竹管施文のもの（228)、1条の沈線をもつもの（図版30;10）がある。

この他に、条痕を斜位に描く深鉢形の土器（同30; 11—12)、ＳＤ2溝址出土の鉢形土器と類似する文様をもつ小破片がある（同30;13—14)。

(6) ＳＤ6溝址出土土器（図版27;229—232，同30;15—30）

壺形土器（229—233・図版30;15—25・30）ほぼ全形がわかる231は若干張る胴部に彎曲しながら細長い頸部をつけ、水平近くに広がる口縁部をもつ土器で口頸部界、頸胴部界、胴部に断面三角状のヘラ描き沈線をそれぞれ13条、9条、13条施す。全面に

ヘラ磨きを行っているが沈線近辺では一部、刷毛目が残る。黄褐色を呈し焼成は良好である。

削り出し凸帯をもつものもある（229・230．図版30;16．24)。229は巾広く削り出し、凸帯上に3条の沈線を施す。230はヘラ描き沈線の上、下端を削り取り、凸帯としている。231同様黄褐色を呈する焼成良好な土器である。

ヘラ描き沈線を1条(232)あるいは2条（同30; 15）もつものもある。

貼り付け凸帯をもつものの中には間隔を置いて2帯付するもの（同30;25）や沈線と組み合せたもの（同30;21)もある。又、胴部片の中に半載竹管により波状文を描くものがある（同30;30)。

甕形土器（234—239・同30;27—29） すべて口縁端に刻目を有し、口縁下から胴部に至る全面を斜位又は縦位の刷毛目で調整し、頸部に3条の沈線を施すもの（234～236）や半載竹管で2帯4条、描き継ぎしながら周回させるものもある。図版30;29は口縁下端に刻目を施し、荒い刷毛目で仕上げている。

註

(1) 〔末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎 1943〕記載の第25図150

(2) 〔紫垣勇夫・伊藤稔・榊原芳久・井上光夫 1972〕第7図16.17

(3) 勝部遺跡では「祭祀的なものか、玩具的試作品」と考えている。〔藤井直正ら 1972〕

(4) 櫛歯状工具で削り取ったようにも考えられるが不明。類例を待ちたい。

(5) 勝部遺跡の報告〔藤井ら、1972〕では「壺に満した水を外部に注ぐとき、水を口縁端に導く役割と装飾を兼ねたものであろう」と述べている。同様の土器はＳＤ1溝址からも1点出土している。唐古遺跡〔末永・小林・藤岡、1943〕、馬見塚遺跡〔澄田・大参・岩野、1967〕にも類例がある。

3. 弥生時代中期中葉の土器

ＳＤ６溝址面から出土した土器を一括資料とし、一時期を設定した。壺形土器、細頸壺形土器、甕形土器のセットが認められるが、量的には多くない。他地区からも微量検出されている。壺形土器、細頸壺形土器は黄褐色のものが多く、砂粒を若干含む。細頸壺形土器は縦位に細い刷毛目で調整後、施文している。これに対し甕形土器は、他地点出土の前期土器や中期後葉の土器とは全く色調、胎土を異にし、多くが茶褐色、又は黒褐色を呈し、その差は明瞭である。胎土も、ち密でほとんど砂粒を含まず、焼成も良好である、これらの甕形土器の中には、煤を留めるものもある。

壺形土器（301．302，図版38;1—4） 漏斗状に大きく広がる口縁部をもち、その端面近くを水平近く折りまげた土器である。口縁部破片が大部分であり、全体が窺えるものはない。口縁部径が20～30㎝の大型品で、内面上方には断面三角形の瘤状突起を3個1組付着させたもの（301．図版38;2.3）と、ないものがある。口縁端はヘラ状工具を押しつけただけのもの（301.同38;1.2)、貝殻の腹縁を用い押しつけたもの(302.同38; 3)、櫛歯を斜めに押しつけたもの（同38; 4）等、各種の文様で飾る。又端面を上方と下方に拡張させたもの（同38;4）もある(1)。図版38;1はヘラ状工具を用い、１条沈線を横方向に施した後、縦位に強く押しつけている為、口縁部下端及び横方向の沈線が波状を呈する(2)。同様のものは東庄内Ｂ遺跡から出土している。対象的に301、図版38;2は軽く押しつけた為、端面中央の凹んだ部分には施文が認められず、上下方より楔状の文様が向きあっているように見える。図版38;9はこの種の壺形土器の胴部と考えられるが、2本1組の施文具を用い、間隔の広い斜格子文を施している。底部下端近くに扇形文を施すものもある(308)。

細頸壺形土器（303－307．38;5－11）無花果状の胴部に細長い頸部、やや内傾する口縁部をつけた土器である。内傾する口縁端は無文のものが多いが、９本１組の櫛描波状文を施すもの(305)、荒い刷毛目で仕上げるもの（図版39;6）もある。

細長い頸部から胴部にかけては各種の文様で飾り、305は口縁部と同一の工具を用い、起伏の激しい櫛描波状文を二帯接して施す。更に間隔をおいて部分的に波状を呈する直線文を描く。これらの文様を施した施文具は、上端と下端がやや太いもののようで、文様はやや太く、且つ深い(3)。

施文具の異なる2種の直線文と列点文を組み併せたもの（304）、ヘラ描き沈線を施すもの（303．306．307．同 39;11）、及び縦位に刷毛目で調整した後、櫛描直線文を間隔をおいて数帯施すもの（同39;7．8．10）等がある。又、小円板を貼り付けその上に竹管を押しつけたものと併用しているものもある（305．306）。

306は頸部から胴部にかけての破片であるが、赤褐色を呈し特に注意を引く。文様は櫛描直線文を施した後、小円板を貼り付け竹管を押しつけている。更にヘラ描き直線文を4条以上配し、その間を竹管による爪形文を施す。

307は頸部から胴上半にかけ全面に刷毛目で調整を行った後、頸部に3条、胴部に間隔をおいて2条ヘラ描き沈線を描き、頸部の沈線上には棒状浮文を1本ずつ4箇所、相対する位置に貼り付けている。

胴部内面には、約2㎝毎に粘土帯を積み上げた痕が残っており、その技法は粘土帯上方を薄く、下方を厚く作り、接着に際しては体外面側を高く、内面側を低くした所謂内傾により製作されている。(4)

図版39; 11はヘラによる区画文を2帯配するが、剝落している為、区画内の文様は不明。ＳＤ6溝址近辺でこの時期に属すると考えられる細頸壺形土器の胴部が検出されている（同37;1）。頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け、頸部から胴部にかけ刷毛で調整後、凸帯直下と胴部中位に棒状工具を刺突帯文とし、その間を7本歯の櫛描直線文を4帯施す。胴部中位下には二又の施文具で斜格文を描く。

甕形土器 A（310—312．図版38;12．13．17）強く張り出した胴部に、弧状に開く口縁部を有し、口縁端に刻目をもつ土器で体外面には荒い刷毛目を全面に施す。

口縁部内面には例外なく、横位の刷毛目(5)を有するが波状文と組み合せたものはない。口縁端の刻目は、前期の甕に比べれば削り取ると言うべき状態で、その下端に連続的に施す。又例外的に併せて上端に2〜3個入れるものもある（図版 38;13）。頸部は刷毛目を施した施文具と類似の施文具により直線文を描いている。底部は上げ底状のもの（311．316．同38;17）がほとんどであり、中には木葉痕をもつものがある。（311.同38;17）。

311は頸部の直線文を波状に、4条ずつ2帯描き、最上端の直線の上方を削り取り巾広くしている。器壁は全般的に薄く、5㎜内外である。体内面はよく磨かれており、

明るい黄褐色を呈し体外面の茶褐色とは異なる。

甕形土器B（313．314．図版38;14.15）弧状に広がる口縁部端を持ち上げた特徴的な土器である。立ち上がる口縁端面には斜位、又は横位の刷毛目をのこし、頸部以下は甕形土器A同様縦位の荒い刷毛目、数条1組の直線文を用いる。又、口縁内面のそれも同様である。

313、図版38;14は口縁部を肥厚させた純重な感のする土器で別形態とすべきかも知れない。口縁立ち上がり部分に圧痕を有するもの(313．同38;14)と無いもの(314)があり、上端面を棒状工具で押しつけたもの（313）もある。

甕形土器C（315）前記甕形土器A．Bとは全く形態を異にする土器が若干存する。直線状の頸胴部にゆるく外反する口縁部をもつ土器である。口唇部には単独的に、あるいは連続的に刻目を施す。器内外面は刷毛目調整しているらしいが剝離が激しくはっきりしない。

その他に309のような筒形のものがある。焼成は良好で非常に硬く、黒褐色を呈する。高杯形土器の脚部とも考えられるが、それにしては細すぎる。類例を待ちたい。

註

(1) 将来、口縁部の形態、文様の手法等により細分出来る可能性がある。

(2) 〔小玉・下村・山沢・谷本・井上1970〕のP.67 第15図 6.7

(3) この時期に特徴的なヘラ区画文のような状態を呈する。しかし櫛描波状文の状況より同一に施文された文様と考えた方が妥当である。

(4) 〔佐原真1967〕に従った。正確には円頭内傾とすべきである。

(5) 他遺跡の報告では櫛描文とか、腰の弱い櫛状工具とか、刷毛目の語が用いられている。同一施文具を用いているのであろう。ここでは刷毛目の語を使用した。

4. 弥生時代中期後葉の土器

ＳＸ74及びＳＸ75方形周溝址から出土した土器を標式として一時期を設定した。(1)

この時期の土器は発掘区域の各所で散見され、ＳＤ３溝址近辺では比較的まとまって出土した。ＳＸ74方形周溝址は遺構残存部が極めて少ないにもかかわらず、非常に多くの出土を見、その状態は西辺及び北辺ともに土器の堆積とも言える程であった。ＳＸ75は方形周溝址として完全に近い状態であったが出土遺物はＳＸ74方形周溝址に比べれば少ない。壺形土器、無頸壺形土器、小型壺形土器、高杯形土器は比較的精製土を用いており、ヘラ磨きされている。これに対し鉢形土器、甕形土器には小砂を混えたものが多く、特に大型品に至っては径5～10㎜の小石を混入しているものもある。前者には口縁部、胴部上半に櫛描文及び凹線文を多用し、前段階のものより機械的な且つ繊細なものになる。後者には刷毛目をほとんどの土器に有し、胴下半はヘラ削りを行うものもある。

(1) ＳＸ74方形周溝址出土土器（図版32－35・39）

壺形土器Ａ（401－406・図版39;1－3）漏斗状に広がる口縁部端を下方に拡張した土器である。口縁端面は櫛描波状文を施すもの（401・図版39;3）、下端を削り取り刻目としたもの(402)、上下端を削り取るもの(同39;2)、貝殻腹縁を押しつけた前段階のものと同様のもの(405)、列点文を施すもの(同39;1)等がある。無文のもの(404・406)も多い。口縁内面は三角形の瘤留突起を列点文と併用するもの（401・406）が多いが、竹管文を５個一組で押しつけたもの（404）、扇形文を施すもの（同39;3）もある。

403は口縁端面に櫛描直線文を施した後に棒状工具を端面下方より押しつけ波状口縁を呈する。その影響により直線文は一部波状になっている。

図版39;1は口縁内面に列点文を山形に描き小円板を貼り付け竹管を押しつけている。胴部の窺える土器は少ないが、401はほぼ球形に近い器体を有し、頸胴部に櫛描簾状文を５帯、その下方に櫛描直線文と波状文を交互に配する。胴下半及び体内面は細い刷毛目で仕上げている。口縁下及び文様間はヘラ研磨が丁寧になされており、繊細な文様とともに特徴的である。この土器は後述する411とともに西辺の溝底にて出土した。文様は右から左に施され、文様の種類、器形とともに畿内の土器と酷似している。しかし、口縁内面の瘤状突起、列点文等はこの地方独特のものである。

壺形土器B　(407) 大きく開く胴部に漏斗状の口縁部をつけ、端面をわずかに持ち上げ受口状にした土器である。ＳＸ74、ＳＸ75方形周溝址からそれぞれ1個体出土しているだけであるが、他の土器とは胎土、施文法が全く異なり、その区別は容易である。持ち上げた口縁上面に貝殻腹縁を押しつけ、頸部上半より口縁部には撥上げ文を施しているらしいが剝離が激しく不明。

頸部下半より胴部は、ヘラ描直線で区画した中に細いヘラ先で細かく斜格子文を描いている。このような文様が3帯以上（4帯存したものと思われる）あり、最下帯とその上帯の間に細い棒状工具を押しつけ、山形文を形成している。最下帯より胴部中位には等間隔に4箇所、刷毛で波状文を縦位に描いている。

胴下半は欠失しているが、急激にせばまり小さな底部に至るらしい。茶褐色を呈し、焼成も比較的良好で、非常に個性的な土器である。三河に多く出土しているもので持ち運ばれたものであろう。

壺形土器CⅠ（411—416）算盤玉型の胴部に、漏斗状の口縁部を有し更に上方に曲折し受口状となる口径20～30㎝の大型の土器である。(3)

口縁外面は2条（411.416）、あるいは3条（412－415）の凹線文を施すだけのものがほとんどであるが稀に3条の櫛歯で縦位に描く沈線を併用するものがある（414）。同様のものはＳＤ3付近で検出されている（473）。

口縁の曲折部には、体内外面ともに横ナデの技法が認められ、この時期の特徴をよく示している。

頸胴部は櫛描きによる直線文、簾状文、斜格文、波状文等を組み合せて飾る。これらの施文具には通常の6～10本歯の櫛歯と2本歯又は3本歯の櫛歯を数帯たばねたものがあり(4)、前者は直線文、簾状文、波状文に用いられるが斜格文は描かない。他方、後者は直線文、斜格文、波状文に用いられるが簾状文には用いないという差が認められる。

この時期に於ける伊勢湾沿岸では後者の施文具を多用し施文するのに対し、畿内では斜格文を除き、前者しか用いない。畿内に発生が認められる簾状文が前者の施文具しか用いない点を考慮に入れるならば、この時期の畿内文化との関係（受入れ方）が明瞭なものとなるであろう。

又、文様の方向は、ほとんど右回り（右から左へ）に施文されるが、図版39; 16のように幾度も描き継ぎをしながら左回りに、且つ数帯、間をおかずに描く複帯構成をとるものもある。

胴下半は斜位（411.同39; 18）に荒い刷毛目で調整するが、底部付近ではそれが縦位になる。

壺形土器CⅡ（417—420.図版39; 4.5）形態上からは壺形土器CⅠと同じであるが口頸15㎝以下の小型品である。

壺形土器CⅠ同様、口縁部の凹線文は2条（418.419）及び3条（417.420）の両者がある。口縁部付近に横ナデ調整が認められる。頸部に巾のせまい簾状文をもつもの（417）もあるが、大部分は細いあるいは太い刷毛目を斜位又は縦位にのこすだけである。(5) 壺形土器CⅠが各種の文様で飾るのに対し、壺形土器CⅡがほとんど飾らないのは対照的である。用途上の差があるのだろうか。

細頸壺形土器（図版39; 11）算盤玉状の器体に細長い頸部を付け、口縁部は内彎し端面を凹線文で飾る土器である。この形態の土器は非常に少なく、SX74から1〜2点SX75方形周溝址から1点出土しているにすぎない。口縁部より凹線文、列点文を2帯、櫛描直線文、やや間隔の広い3本歯の櫛状工具による波状文、同一工具による斜格文を施す。茶褐色を呈する比較的焼成の良好な硬い土器である。図版39; 10も同種のものだろう。

無頸壺形土器 A（421.422）胴部が稜をなす扁平な器体を有し、口縁下に凹線文を施す土器である。口縁端は水平なもの（421）と内傾するもの（422）があり、端面には凹線文を4条（422）又は5条（421）施し、この部分の器壁を厚くしている。421の胴上半は列点文を羽状に施すが、422は斜位に列点文を3帯配し、その間を沈線2条で画する。胴下半は無文になる。この種の土器は通常口縁部に2孔一対の紐孔を相対する位置に穿つが、破片の為、不明。他に口径20㎝以上に達するものもある。

無頸壺形土器 B（423）丸味を帯びた胴部に、垂直に近い口縁部を有する土器である。図示した1例だけであるが、篦研磨がよくなされており焼成も良好である。口縁上端は水平をなし、口縁下には2孔一対の紐孔を相対する位置に2箇所穿っている。

無頸壺形土器 C（424）丸味を帯びた胴部を急激に水平近く外方へ折り曲げ、小さ

な上方に立つ口縁部をつけた土器である。全体の器形を窺えるものはないが、同様の土器が摂津・勝部遺跡から出土している。口縁部外面及び胴上半は6本一組の櫛状工具により直線文、波状文で飾る。口縁内面立ち上がり部分には横ナデ調整が、胴部から口縁付近の内面は細い刷毛目で調整している。

小型壺形土器（433—435）最大胴径が10～15cmの球形に近い器体を有する壺形土器である。この種の土器は後期に多く見られるもので、中期に属する例は知らない。しかし、他の土器と伴出しておりこの時期に入れた。胴上半は刷毛目で仕上げ、下半は底部側よりヘラ磨きが施されている。胴径に対し底径が4cm程しかない為不安定である。

口縁部の形態は全く不明であるが上箕田遺跡の例より、やや外方に広がる短かい口縁部を付けたのであろう。

高杯形土器　杯部の形態より2種に分類した。完形のものは無く、従って高杯形土器Aとしたものの中には鉢形土器が含まれているかも知れない。

高杯形土器A（427.図版39;12·13）脚部からなだらかなカーブを描き垂直に近い杯部をもつ土器である。(6) 口縁端上面は水平をなし、口縁下に一条（同39;13）又は2条（同39;12）凹線文を施すもの、杯曲折部に1条の凹線文を施すもの（427）がある。SD4溝址付近からは3条の櫛描波状文を施すもの（475）が検出されている。

高杯形土器B（425）斜に広がる杯部に水平に近い口縁部をつけ、口縁内端に小さな凸帯を廻らせた土器である。口縁端面はわずかに下方へ突出させ巾広くし、ここを凹線文で飾るものと無文のもの（425）がある。畿内中心部に多い巾広く下垂させたものはない。

脚部はA、Bいずれに属するか不明であるので一括して述べる。すべて円板充填により製作されており、これらの高杯形土器が畿内の影響下に存在する器形である事を証明している，なかには円板部分がはがれているものもある。脚内面には絞り目を有し、ヘラにて削り取ったものはない。従って円板にヘラ痕が残されたものはない。

SD3溝址付近から出土した476は脚外面を縦位にヘラ削りしているが、426·429は剝離していて不明。

裾部は凹線状にしたもの（476）と無文のもの（426·429）があるが、透し孔はない。

脚部が中実のもの（430）もある。(7)

鉢形土器（434） 弯曲しながら開く口縁部を上方に持ち上げた土器である。この形態の土器は、やや後出的な要素があるが小型壺形土器同様この時期とした。

立ち上がる口縁下端に三角形の刻目を連続的に配し、頸部には5条の櫛描直線文を施す。図示しなかったが直線文と列点文を交互に施すものもある。扁球形の胴部に小さな底部をもつものと考えられる。明るい褐色をなし、S字状口縁土器の祖型と言われるものであろう。

N14地区からは別形態の鉢形土器が検出されている（481）。口径と腹径がほぼ等しく、頸部を「く」の字形にゆるく折り曲げた土器である。口縁端を若干拡張し、凹線文を1条施している。頸胴部は刷毛目で斜格子状に仕上げている。

甕形土器 A（434）「く」の字形に折り曲げ、口縁端部を上方につまみ上げた口径30㎝前後の土器である。つまみ上げた口縁内外面には横ナデが認められる。体外面は斜格子状に、体内面は細い斜方向に刷毛目で仕上げている。この形態の甕形土器は畿内地方に広く分布しているが本遺跡の出土例は多くない。

甕形土器 B（440—442）口径15～30㎝を計り、口縁部を肥厚させた土器である。甕形土器A同様、量的には多くない。口縁端は丸くおわるもの（440）と、面をなすもの（441．442）がある。体外面は斜位、縦位又は斜格子状の刷毛目で、口縁部内面は横位に太い刷毛目調整を行っている。

440は肥厚させた部分にヘラ先で浅い刻目を施し、口縁部と頸部の接着面には指頭圧痕が残る。

甕形土器 C（443—446）本遺跡出土甕形土器の大部分はこの形態に属し、単純に「く」の字形に開く土器で、口径10～20㎝のものである。口縁端面は丸くおわるもの（438·445）と稜をなし面をなすもの（443·444·446）がある。口縁内面にも稜をもつもの（438）がある。胴部の張りはあまり強くなく、体内外面は斜方向の刷毛目で仕上げている。刷毛目調整の中には整然と羽状に仕上げるもの（図版39; 21）もある。胴下半は縦位あるいは斜位の荒い刷毛目で仕上げるもの（440, 447—452·同39; 22）が大部分であるが、ヘラ削りを行ったもの（同39; 23）もある。これらの他に、口径36㎝に達する大型の甕形土器もある（438）。口縁端を上方に持ち上げた厚手のもので

端面には楔状の浅い刻目を斜に施し胴部は刷毛目で仕上げる。口縁を水平近くに折り曲げたもの（435.436）もある。435は焼成の良好な硬い土器で口縁下端に大きな刻目を連続的に旋している。

この時期の甕形土器底部は脚台を有するもの（449．450．452）の方が多く、平底（448）のものは少ない。上げ底状のもの（451）も少数ながらある。

平底の中央に焼成前一孔を穿ち甑としたものが数例あるが台部を有するものの中にも焼成後一孔を穿ったものがある。どのような目的の為に作ったのであろうか。

⑵ＳＸ75方形周溝址出土土器（図版36．同38；18—26）

壺形土器 A（図版38；18）すべて小破片であり全形を窺えるものはない。口縁端面は櫛描波状文、直線文、列点文等で飾るが無文のものも多い。口縁下端に刻目をもつものもある。

口縁内面には瘤状突起をもつもの、列点文をもつもの及びその両者を併用するもの等があり、量は少ないが扇形文をもつものもある。口縁端との組み合せが種々見られる。

壺形土器 B（図版38；19）ＳＸ74方形周溝址のものと全く同一の手法により作られた土器であるが小破片の為、全形は不明。ＳＸ74方形周溝址から検出されたものに比べると頸部がやや長く、明瞭な撥上げ文が認められる。又胴部の棒状工具による山形文は有せず、丸い突起を数カ所に貼り付けている。

その他、ヘラ描沈線、その内部の斜格文、胴部の刷毛状工具による縦位の波状文については全く同じである。制約の強い土器である。

壺形土器 CⅠ（460.図版38；20）立ち上がる口縁部を欠く土器であるが、漏斗状の口頸部の一部には横ナデの技法が認められる。頸胴部は各種の文様で飾り、７本一組の櫛歯により４帯の簾状文、１帯の直線文を右から左へ（右回り）施文する。簾状文の２帯目と３帯目の間には刺突竹管文を施す。各文様帯間はヘラ磨きがよくなされており、光沢を帯びる。直線文下はＳＸ74方形周溝址のものと同様、直線文、波状文、斜格文等で飾る例があり、施文具にも通常の６～10本歯のもの（同38；20）と2本歯又は３本歯のものを数帯たばねた二者が見られる。

壺形土器 CⅡ（453—455）口縁外面は2条（453—455）あるいは３条の凹線文を施

し、頸部は無文（454·455）のものがほとんどである。稀に8条の櫛描直線文で飾るもの（453）も見うけられる。口縁曲折部の内外面には横ナデ技法を用いており、この形態の土器には通例な事を示している。算盤玉状の胴部にはやはり刷毛目で調整するだけで文様はもたない（455）。

この他に受口状の口縁を有するが壺形土器ＣⅠ、ＣⅡとは若干異るものがある。457は弧状の口縁端を立ち上がらせた特徴的な土器である。口縁端面は３条一組の沈線を山形文状に施し、端下方をヘラにて削り取り、刻目としている。

この種の土器は伊賀、伊勢地方特有のもので他地域では現在まで例を見ない。三田遺跡・東庄内Ｂ遺跡・野々田遺跡に類例がある。(8) 458は立ちあがる口縁外面に列点文を羽状に施すものである。459は彎曲しながら立ち上がる小型の土器である。内外面を細い刷毛目で調製する。

又、ＳＸ75方形周溝址出土ではないが、この時期に属する図版37;2は頸部に板状工具端を押しつけた圧痕文凸帯を施している。このような手法を有する土器は畿内に多く見られ、卵形の胴部に漏斗状にひろがる頸部をつけ、口縁部を上方に立ち上がらせたものと考えられる。茶褐色を呈し、他の土器とは若干異なる。

細頸壺形土器（456）ほぼ完形に近い456の１個体のみであるが、文様はＳＸ74方形周溝址のものとは異る。

ゆるく内彎する口縁部は4～5条の凹線文で飾り、頸胴部は６本歯の櫛状工具により直線文、列点文、波状文、扇形文を施し、胴部の最大径位置には太い凹線文を施した後、小円板を５箇所に貼り付けている。胴下部には半截竹管による直線文を左から右へ旋回させている。底部は高杯形土器と同様、円板充填により製作されており、低い脚台を有していたものと思われる。

４本歯の櫛状工具により１帯の直線文と4帯の列点文を配するもの（474）もＳＸ75方形周溝址の近くで検出されている。

無頸壺形土器（461）上方に立ちあがる口縁端面に巾の狭い凹線文を1条施し、胴部は上半と下半で方向を異にする刷毛目で仕上げている。体内面はヘラで削り取ったような状態であるが剝落が激しく不明。

高杯形土器 A（462·463）立ちあがる口縁端面を3条（463）あるいは4条（462）の

凹線文で飾り、杯下半は斜位の刷毛目で調整している。櫛状工具で6条一組の直線文を縦位に施すもの（462）もある。

高杯形土器 B（465・466）口縁端面を拡張し、3条の凹線文を施したもの（465）と無文のものがある。内外面ともにヘラ研磨がなされている。

脚部はすべてＳＸ74方形周溝址のものと同様、円板充填で製作されており、脚内面に絞り目が認められる。464は4条一組の櫛描直線文を3ケ所に配し、裾部近くに2孔一対の小孔を5箇所に穿孔している。

467は脚外面をヘラ削りし、裾部近くに透かし孔を5ケ所に配する。丁寧なつくりで脚外面及び杯部内面を朱彩している。高杯形土器Aに伴なうものだろう。11ケ所に小円孔を穿つ小型の脚部もある（468）。裾部に1条沈線を施す。

甕形土器（469—472）ＳＸ75方形周溝址出土の甕形土器は、ＳＸ74に比べれば甚だ少なく、その形態も甕形土器Cに限られる。口縁端面は稜をもち面をなすもの（469・470）丸いものがあり、下端に刻目を施すもの（469）もある。口縁内面は横位に、体外面は斜位に刷毛目が認められる。底部は平底のもの（471）と脚台をもつもの（472）がある。471は焼成前に1孔を穿ち、甑としており、平行線の痕跡が認められる。ＳＤ4溝址付近から出土した図版37;9は、小さく口縁部に刻目を施し、胴部をヘラ削りしている。

蓋形土器（477）ＳＸ74.ＳＸ75方形周溝址から蓋形土器は出土していないが、便宜上、ここで取り扱った。C—2地区の小ピットから検出されたもの（477）である。鈕をもつ笠形を呈し、上底面は上げ底状に仕上げ、鈕下部付近にヘラ磨きが加えられている。口縁部を厚く作りあげ、端面に列点文を施す。媒が認められるところから甕用と考えられる。

（伊藤洋）

註

(1) 尾張に於いては、この時期の土器を「土器型制の変化」〔紅村1963〕等から後期初頭として取り扱っている。畿内では「遺跡の立地」「土器の器種の消長」「製作技術」〔佐原1968〕等の差から第Ⅳ様式と第Ⅴ様式の間に中期と後期の境をおいている。県内に於いては上箕田遺跡第一次調査報告では後期初頭〔仲見1961〕とされたが近頃は中期後半とする意見が多い。〔吉村1972〕

最近、紅村氏は「今後なお検討されなければならないが」と述べながらも ①石器の消長、②高杯形土器の急増に伴なう社会の質的変化、③瑞穂期に於ける尾張と三河の土器型式統一等より、高蔵期と瑞穂期の間に中、後

期の境をおく事を提唱されている。〔紅村1966〕

(2) 口縁部の形態、文様等により更に細分出来るが、量的に少ないので一括して取り挙げた。

(3) 従来、この形態の土器は受口状口縁土器、受口凹線文壺と呼ばれていたものである。畿内にも同様の口縁を有する土器があるが、系統的には中期中葉の細頸壺形土器と考える方が妥当である。その意味では中期中葉の細頸壺形土器は、細頸壺とせず壺形土器Cとすべきかも知れない。

(4) 411 は頸部に7本歯の櫛描直線文を2帯施し、その上下をヘラ描直線で区画している。胴部上半は3本歯の櫛状工具を3帯たばね（3帯のうち最下帯のものは1本目と2本目の間隔が狭く、それが規則的にあらわれるところより3帯たばねた事がわかる）直線文と波状文を描いている（波状文の最下帯はヘラ磨き又は刷毛目により消されている。しかし痕跡が一部に残る）。同様の事は〔澄田・大参・岩野、1967P94〕で「……胴部文様は2本歯の櫛を3個結び合せたような器具で平行線波線文を描く……」と指摘されている。

これらの結果から411の土器は3種（ヘラ状工具、通常の7本歯の櫛状工具、3本歯を3帯たばねた櫛状工具）の工具により8回、右回りに施文している。

更に体面の刷毛目の状況を述べておこう。それによれば、刷毛目が粘土帯毎にわずかずつ方向を異にし、胴上半と下半の接着部では粘土を付着させたらしく 刷毛目の一部は粘土の下方に入り消えており、その部分の凹凸が激しくなる。等々製作技術上興味をひく。

(5) 四日市市立郷土資料室展示の壺形土器CⅡ（四日市市山之一色町荒井田出土）及び上村遺跡〔吉村1972〕の例はいずれも刷毛目を残すのみである。

(6) 瓜生堂遺跡・資料編〔曽我恭子ら1972〕ではこの形態の土器を台付鉢として取り扱っている。

(7) 畿内第Ⅱ様式及び朝日式〔柴垣ら1972〕に中実の例があるが、この時期の例は知らない。

(8) 詳細について述べるならば、東庄内B遺跡では口縁端の山形文は櫛状工具で刺いて（刺突文—筆者注）施しているのに対し、本遺跡及び野々田遺跡の例は沈線で山形文又は斜格文を描き、微妙な差がある。

5 弥生時代後期の土器（図版40—41）

壺、台付壺、甕、高杯などがある。そのほとんどが、発掘区の南西隅において、ＳＤ５溝址上の埋土および、ＳＤ６溝址の東側からまとまって出土したものである。竪穴住居内から出土したものもあるが、細片にとどまる。これらは装飾も簡素なものが多く、形態は、鈴鹿市・上箕田遺跡出土のものとはよく似ていて、後期でも初頭に位置づけられよう。

壺（501—507）よく外反した比較的短い口縁部のもので、端面に沈線をめぐらしたもの（501—503）と、頸部に凸帯を付けたもの（504—506）とに大別される。501は口縁部径16.8㎝、高さ27.5㎝で、中程でよくはった胴部に平底のもの。口縁部端面と胴部下半は丹彩されている。口縁端の内面には羽状文、肩部には平行沈線文とヘラ描の斜線を交互にめぐらす。502のように肩部に櫛描の沈線と波状文をつけるものもある。507は壺の脚台である。

小形壺（508）直口状の口縁部に、上底のもの。器表はヘラでよく調整されている。径8㎝、高さ11.5㎝。

台付長頸壺（509）やや外反した直口状の口縁部と、よく張った胴部に、3方に円形の透孔をつけた脚台をそなえる。器表は剝落しているが胴部内面の下半はかきとられてうすく仕上げられる。

台付椀（510）口縁部が内彎した椀形の体部によく下方でひろがった脚台をもつ。器表は剝落していて調整不明。径9.5㎝、高さ10.5㎝。

甕A（517—523）口縁部がくの字に外反したもので、端部に刻目をつけた517，518とつけないものがある。器表はハケ目調整。519では、頸部にヘラで刻目がつけられている。

甕B（511－516）口縁部がS字状をなしているもの。肩部から胴部がハケ目調整された511と、端面と肩部に櫛歯の刺突文をつけた512，514などがある。脚台524は、この形態のものにつくものであろう。

高杯（525—528）よく外反した口縁部の比較的浅い杯部に、長い脚部をそなえたもの。杯部外面には525，526のように櫛描波状文をつけたものと、つけない527がある。また脚部は3方に円孔をつけ、平行沈線文を数段めぐらす526，527と、つけない528とがある。いずれも器表はていねいにヘラ研磨されている。完形の526は、径28㎝、高さ24.5㎝。529は台付椀形土器の脚台であろう。

6. 古墳時代前期の土器（図版42）

少量の土師器・壺、甕の破片がある。これらは主として発掘区でも南西寄りの大区画「M区」から出土している。他の時代の遺物と混在していて遺構は明らかでない。古式土師器と呼ばれているもので、壺・甕ともに複合口縁をなしているのが特徴である。

壺（551）口縁部の断片で全体の器形は不明。複合口縁のもので、器表は内外ともよくヘラ研磨され、丹彩されている。

甕（552—555）S字状の口縁部。555のような脚台をそなえるものであろう。552は肩部から胴部へこまかいハケ目で調整され、553－554はあらいハケ目で調整されている。

7. 古墳時代後期の土器（図版43）

土師器・壺，台付甕，高杯，須恵器・杯，高杯，壺，甕などがある。これらはこの時代の竪穴住居址の他、古墳時代前期の土器と同様、発掘区の南西部から主として出土している。須恵器の形態からは、古い時期の一群と新しい時期のものとに大別される。古い時期のものは、久居古窯の製品に形が近く、5世紀後半にあたる。新しいものは、「浅井形式」に似ていて、6世紀末に位置づけられよう。

(1) 土 師 器

壺（522）台付甕（559－560）、高杯（570—571）、須恵器・杯（577）などとともにＳＢ87竪穴住居址から出土したもの。口縁端には沈線をめぐらし、たてに4本一組の小さな凸帯をつける。器表はハケ目調整されている。

甕A（559—561）くの字の口縁部で、台付のもの。口縁部はナデ調整されているが、肩部から底部にかけて全面があらいハケ目で調整されている。561の口縁端は、ひき出されて、わずかにたちあがっている。560は完形で、口径19㎝、高さ31㎝。

甕B（557—558）短い口縁部で、端部が上方で面をなして、わずかに肥厚しているもの。558は肩部があらいハケ目で調整されている。脚台をそなえるものであろう。

甕C（502—565）くの字に強く外反する口縁部のもので、端部がひきだされて、わずかにたちあがる。564—565は、肩部がハケ目調整され、胴長の丸底のものであろう。

甕D（567—568）外反した短い口縁部に肩張りの強い胴部で平底のもの。肩部から胴部はハケ目調整されている。567は口縁部内側も横にハケ目調整されている。径13㎝、高さ16㎝のものである。

椀（569）口縁端が小さく外反するもので、器表はよくナデで仕上げされている。径13㎝、高さ10.5㎝。

高杯（570—574）椀・569とほぼ同巧の杯部に、下方で屈曲してひろがる脚部のもの。杯部はナデで仕上げられ、脚柱部はヘラでタテに研磨されて面をなす。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。570は径14㎝、高さ11㎝、571は径13㎝、高さ10.5㎝。

(2) 須 恵 器

杯（575－580，585—590）576－580は蓋受けの立ち上りが長いもので、直線的にひき出されている。底部下面もていねいにヘラ削りで仕上げられた古い様相を示すもの。

578は櫛描の波状文でかざられている。蓋・575は肩部に段をめぐらす。585～590は新しい形態のもので、蓋、身とも天井部、底部下面がヘラ切り不調整のもの。

高杯（584．591—593）584は三方に長方形の透孔をつけた無蓋の高杯の脚部であろう。透孔の切口はヘラで面取りされている。591—593は有蓋高杯で、新しい杯・588～590に比較的太く短い脚をつけたもの。

壺（581.595）581は胴部の断片で、全体の器形は不明。広口のものであろうとも思われる。肩部は上方に櫛描刺突文をつけ、平行沈線文と波状文を交互に飾っている。595は短頸壺で、底部下面はヘラ削りされている。

甕（582）径19㎝の口縁部。肩部は平行のタタキ目で調整されている。内面はナデで仕上げられている。

8. 奈良時代の土器（図版43—44）

土師器・皿，甕，須恵器・杯などがある。竪穴住居址出土のものもあるが、大半は発掘区の中央部から出土している。しかし全体の量としては少ない。須恵器の形態は「高蔵寺２号窯式」に近く８世紀代にあたるものである。

(1) 土　師　器

皿（601—605）広い口径に比べ浅いもので、各種のものがある。601は底部がヘラ削りされ、内面には暗文がみられ、古い様相を示す。602—603は器壁の厚いもので、器表の調整はあまりよくない。

甕（606—609）胴長の606、小形の609—610などがある。いずれも丸底と思われる。606は端部がひき出されてわずかに立ちあがっているが、他は丸くおさめられている。全体に口縁部は横ナデ、体部は内外ともハケ目調整されている。

(2) 須　恵　器

杯A（615—618）高台付のものである。底部下面はヘラ削りで仕上げられ、口縁部と底部上面は水引きされている，615—616は古い様相を示し、奈良時代にさかのぼるものとも思われる。

杯B（611—612）ヘラ切り不調整底のもので、直口状の口縁部である。612の底部下面には十印の記標がある。

蓋（613—614）扁平な鈕をもつもので、天井部はヘラ削りで仕上げられている。全

体に調整はよい。

9. 平安時代の土器(図版44)

土師器・皿，灰釉陶器・椀，皿，瓶，鉢，緑釉陶器などがある。いずれも遺構に埋まっていたものでなく、発掘区の中央部の各所から出土したものである。このうち灰釉陶器は「黒笹78号窯式」のものに似ていて、10世紀代のものと思われる。

(1) 土 師 器

皿（604） 口縁部が外反した器壁のうすいものである。器表が剝落していて調整手法は不明。全体に丸味の605もこの時期のものであろう。

甕（610） 小形のもので、端部はひき出されて立ち上っている。頸部から肩部へはたてにあらいハケ目調整され、内面は横にハケ目調整されている。

(2) 灰 釉 陶 器

椀（619—621）うすくひきだされた口縁部のもので、底部の高台もていねいに付けられているが、下面には糸切り痕を残す。ツケ掛けにより施釉される。とくに619は厚く施釉されている。

皿（623—624）椀と同様、うすくひき出されたもの。617の底部下面はヘラ削りで仕上げられている。

輪花皿（625） 直線的に外傾した口縁部のもので、口縁端に痕跡程度の輪花を四方につけている。底部下面の糸切り痕はていねいに消されている。

鉢（626） 口縁部から底部の破片であるが、片口のつくものと思われる。比較的高い高台がていねいに付けられている。体部下半はヘラ削りによりていねいに仕上げられている。

双耳瓶（627） 肩部に扁平な把手を二方につけた平底のもの。口頸部は欠損。体部下半はヘラ削り仕上げられている。全体に厚く施釉されている。

(3) 緑 釉 陶 器

椀（628—629）いずれも底部だけである。胎土は灰白色の須恵質のもので、高台端面以外が施釉されている。622の底部下面はヘラ削りで仕上げられているが、623には糸切り痕がわずかに残る。高台断面は逆台形にちかい。他に口縁部の小片が少量出土

している。

10. 鎌倉、室町時代の土器（図版44）

土師器の皿，鍋，山茶椀，山皿，常滑焼の甕などがある。これらは発掘区の各所から破片として出土しているが、この時代の竪穴、溝址においても、各時代の土器と混在していた場合が多い。時期としては山茶椀、山皿の形態が「松淵2号窯式」に似ているものと、「天神4号窯式」に近いものとがあり、平安時代末期から鎌倉時代前期のものと、鎌倉時代後期から室町時代初期のものとに大別される。

(1) 土 師 器

皿（727—728）糸切りによる平底で、ほとんど直線的な体部のもの。器表はナデによりよく仕上げられている。

鍋A（729—730）口縁部の破片。端部が丸く肥厚し、内側に段を示しているのが特徴である。650の肩部にはススが付着している。口縁部はナデ仕上げによるが、体部の調整は悪く器表に凸凹をのこす。

鍋B（731）器壁の薄いもので、端部が巾広くわずかに肥厚し、内側に段を示している。肩部はこまかいハケ目で調整されている。頸部にはススが付着している。

(2) 山茶椀，山皿

山茶椀Ⅰ（711—712）径17cm前後、高さ6.5cmの比較大形のもの。粗雑に付けられた高台で、ヒビ割れが多く、端面にはモミ痕がみられる。

山茶椀Ⅱ（713—717）径14cm～15cm、高さ5cm前後のもので、体部が直線的なものと、丸味をもったものとがある。Ⅰと同様、高台は粗雑に付けられている。

山皿Ⅰ（718—722）718—721は径11cm、高さ3.5cmで小さな高台をそなえ、形、調整とも全く同巧のもので、同一古窯の製品と思われる。

山皿Ⅱ（723—725）径7.5cm～8.5cm、高さ1.7cm～2cmの小形の浅いもの。高台を付けないが、底部は厚く、平底をなす。

(3) 天 目 茶 椀（726）

底部を欠く。径9cmほどのもので、内外とも厚く鉄釉がかけられている。胎土は白色に近いもの。

（小玉道明）

V　結　　語

永井遺跡は四日市海岸平野でも中央部にあたる西側の台地上において、初期水稲耕作を開始した遺跡の一つで、以後、断続的に鎌倉、室町時代に至るまで集落が形成されていたものである。この地域は、北側の大谷遺跡、南側の東日野遺跡など、初期稲作農業に適した条件をそなえていたのであろうか。

今回の調査では遺構として溝址だけで、住居址はみとめられなかったが、なお、未調査地区に居住地が求められるのであろう。土器の出土量は、他の時期のものと比較すると、全く大量で、全出土土器の50%から70%を占めているほどであり、かなりの集落が考えられる。しかし、北側の大谷遺跡においても、溝址は数条の規模の大きいものがあり大量の土器が出土しているが、住居址としては、2基だけにとどまっていて、それが全てでないにしても、大集落が形成したとは考えられない。

また一方、出土土器の中には、数点ではあるが、伊勢湾の対岸にあたる尾張、三河地方に多い水神平式系土器が混在していて、その地方との何らかの交流が考えられる。とくに、大洞式系のものと思われるものも1点あって、共にもたらされたことが考えられる。

弥生時代中期では、2基の方形周溝址がある。これまでの県内の調査によれば、方形周溝址は、北側の大谷遺跡をはじめ、5ヶ所の遺跡で知られている。そのうちでもこの永井遺跡のものは初期に属し、一辺20m前後という規模の大きいものである。これまで永井遺跡は、県下でも弥生時代前期の遺跡とともに数少ない弥生時代中期の遺跡として知られてきたのである。　この大形の方形周溝を営んだ優れた遺跡といえる。土器はかなりの量があるが、住居址は明らかにされていない。また、石器の使用の少ないことも注目される。これは、鈴鹿市・東庄内B遺跡とも共通していて、その生産基盤に狩猟より農耕に比重が高かったものとも考えられる。

弥生時代後期から古墳時代後期の住居址がもっとも多く検出されているが、西側の上畑遺跡もふくんだ、大規模な集落の一角にあたるものであろうか。

掘立柱建物も多数あきらかにされているが、とくに、3間4方の倉庫と考えられる

ものが、大半を占め、居住用の長方形のものは、これも未調査地区に中心が考えられる。これは西ケ広遺跡、あるいは、南勢地方の多気郡明和町古里遺跡でもみとめられているように、「倉庫」用建物が、一定地区でも北西側にまとまってみとめられていることからもいえよう。

また、小片ではあるが、平安時代の緑釉陶器の出土は注目される。云うまでもなくこの陶器は古代寺院、官衙あるいは祭祀遺跡において主として用いられ、儀式用の陶器と考えられているものである。時期については決めがたいが、滑石の扁平な勾玉の出土とともに、この遺跡において何らかの祭祀、儀式の行なわれたことが知られる。

これまでこの遺跡のつくられた台地は、弥生時代前期以降、断絶的に各時代において集落として利用されて来た所である。今また、新しく住宅用地として利用されることになった。これまでは、ほとんど土地の形質を変えることなく利用されてきたのであるが、今回は全く異る。それぞれの時代において、この地が選ばれた契機は明らかにすることはできないが、今後さらに、この遺跡の歴史的な検討は必要であろう。

（小玉道明）

（付記）　出土遺物の復元には、樋尾重雄、吉田義隆が参加し
遺物写真は、三重県教育委員会文化課技師谷本鋭次による。

補　論

1．弥生時代前期の土器について

永井遺跡出土土器の大部分は破片であり、完形のものは極めて少ない。このような状況の下で土器の性格を知るにはある程度の限界があり、それを補う為、各破片を計数的に処理し、性格を知る一助とした。

(1)　壺形土器の文様

第6表及び第7表は壺形土器の口頸部界、頸胴部界の文様を溝址毎に分け、頻度数をあらわしたものである。

集計の方法は口頸部と頸胴部につき，それぞれの文様毎に数量を調査したもので、明らかに同一個体と考えられるものは省き1個体とした。口頸部総数に対し頸胴部総数が少ないのは、文様の途上で破損し沈線なり、凸帯の条数が不明であるものを省いた結果である。又、小破片であるがゆえに口頸部であるのか、頸胴部であるのか判別のつかないものについては調査対象から除外した。

このような方法には、いくつかの問題があり、又ＳＤ2～ＳＤ6溝址は出土量も少なく厳密さを欠くが、あくまで傾向を知る為に用いた。集計の結果は、

① いずれの溝址も貼り付け凸帯を主とするが、削り出し凸帯、ヘラ描き沈線に差が認められる。すなわち、ＳＤ1及びＳＤ2溝址では、削り出し凸帯＋沈線少条、ヘラ描き沈線少条を混えるのに対しＳＤ3～5溝址が削り出し凸帯＋沈線多条、ヘラ描き沈線多条のものを含めるのと対象的である。(1)

② ヘラ描き沈線は大部分が1～4条であり、10条近くに及ぶものは極めて稀である。

このように永井遺跡溝址出土の前期壺形土器は、「新」段階を中心としながらもＳＤ1、ＳＤ2溝址出土土器は、やや古い要素をもち、また、口縁部の開き、胴部の張り等をも考慮に入れれば、「中」段階の終末から「新」段階の初頭に比定される。(2)

他方ＳＤ3～ＳＤ5溝址出土土器は口縁部が大きく広がり、胴部が扁平なまでに張る器形が中心となり、貼り付け凸帯を主とする事から「新」段階前半〔佐原真1968〕に比定される。

ＳＤ６溝址出土土器は個体数が少ない割に、各手法のものを含み、確実ではないが、その手法から「中」段階終末より「新」段階後半までと考えられる。

溝址 / 口頸部界文様	ＳＤ１	ＳＤ２	ＳＤ３	ＳＤ４	ＳＤ５	ＳＤ６	計
段	1	0	0	0	0	0	1
削り出し凸帯	10	0	0	0	1	0	11
削り出し凸帯＋沈線少条	19	1	0	1	0	1	22
削り出し凸帯＋沈線多条	5	0	0	2	0	1	8
ヘラ描き沈線少条	33	4	0	0	1	2	40
ヘラ描き沈線多条	9	0	1	2	1	2	15
貼り付け凸帯	87	7	1	4	3	1	103
無　文	39	2	0	0	0	0	41
計	203	14	2	9	6	7	241

第６表　壺形土器口頸部界文様頻度表

溝址 / 頸胴部界文様	ＳＤ１	ＳＤ２	ＳＤ３	ＳＤ４	ＳＤ５	ＳＤ６	計
削出し凸帯＋沈線少条	16	5	0	0	0	1	22
削出し凸帯＋沈線多条	3	1	0	0	0	1	5
ヘラ描き沈線少条	20	6	1	1	2	1	31
ヘラ描き沈線多条	13	1	1	1	3	3	22
貼り付け凸帯	13	23	2	4	4	2	48
無　文	11	2	0	0	1	0	14
計	76	38	4	6	10	8	142

第７表　壺形土器頸胴部界文様頻度表

なお表中の用語は次のように区分したものである。

段；口縁部を高く、頸部側を低くしたものである。

削り出し凸帯；上方と下方を削り取り、作り出したもので、この中には巾広く削り出すもの（a種）と、わずかに削り出すもの（b種）が含まれる。

削り出し凸帯＋沈線少条；削り出し凸帯上に１～２条のヘラ描き沈線を施すもの。頸胴部に施すこの種の文様の中には、上方のみ削り出したものを含む。

削り出し凸帯＋沈線多条；削り出し凸帯上に３条以上[3]の沈線を施すもの。

ヘラ描き沈線少条；１～３条のヘラ描き沈線を施すもの。

ヘラ描き沈線多条；４条以上のもの。半載竹管にて施文するものも含む。

貼り付け凸帯；貼り付け凸帯を付するもので、沈線と貼り付け凸帯を併用するものもこの類に入れた[4]。

無文；無文の土器の場合、大きな破片でない限りその判定は難しい[5]。

(2) 壺用蓋形土器の形態

壺用蓋形土器はＳＤ１溝址から18個体、ＳＤ２溝址から２個体、ＳＤ４溝址から１個体出土しているそれらについて形態、紐孔により分類した[6]。

21個体のうち紐孔の不明なものが約半数あり厳密さを欠くが、紐孔のわかる土器のすべてが中央に一孔を有し[7]、その断面も笠形を呈するものが多い。

この状況は勝部遺跡の中央に１孔を有するものと、２孔一対と１孔一対を有するものが相半ばする特徴より、唐古遺跡の方に近さを感じさせる。

県内の他遺跡では、中ノ庄遺跡に扁平な円板状のものと笠形を呈し、鈕をもつものともたないものがあり、紐孔は２孔ずつ相対する位置に穿孔するものと中央に穿孔するものがある。上箕田遺跡

断面／平面	A	B	C	D	計
中央孔	・ ・	・ ・ ・ ◎ ◎	・ ・ ▲	・	11
不明	・	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・			10
計	3	14	3	1	21

第８表　壺用蓋形土器の型式一覧表（・ＳＤ１出土　◎ＳＤ２出土　▲ＳＤ４出土）

口縁部刻目	頸部文様 \ 溝址	SD1 点数(%)	SD2 点数(%)	SD3 点数(%)	SD4 点数(%)	SD5 点数(%)	SD6 点数(%)	計 点数(%)
無	無	71	12	6	8	3	0	100
	有	26	8	2	0	0	0	36
	小計	97(34.6)	20(45.3)	8(88.9)	8(42.1)	3(60.0)	0 (0)	136(37.5)
有	無	54	6	0	2	0	1	63
	有	129	18	1	9	2	5	164
	小計	183(65.3)	24(54.6)	1(11.1)	11(57.8)	2(40.0)	6(10.0)	227(62.5)
計		280	44	9	19	5	6	363

第9表　甕形土器口縁部刻目の有無と頸部文様

文様 \ 溝址		SD1	SD2	SD3	SD4	SD5	SD6	計
口縁端刻目	無	97	20	8	8	3	0	136
	有	182	34	1	11	2	6	227
頸部文様	無	125	18	6	10	3	1	163
	有	157	29	3	10	2	5	206
頸部文様	段	4	0	0	0	0	0	4
	削り出し凸帯	0	1	0	0	0	0	1
	沈線1条	15	2	2	2	1	0	22
	沈線2条	70	9	0	1	0	1	81
	沈線3条	46	10	0	5	0	3	64
	沈線4条	19	3	1	1	1	1	26
	沈線＋刺突文	3	4	0	0	0	0	7
	沈線＋平行斜線文	0	0	0	1	0	0	1
	計	157	29	3	10	2	5	206

第10表　甕形土器、口縁部、頸部の文様（口縁端刻目の個体数と頸部文様の個体数に異なるのは、頸部文様が特種なもの6点が加わっているからである。）

では鈕を有し、中央が凹む環口状の形態を有し、そこに1孔を穿つもの（第2次調査）と扁平な円板状のものに2ずつ相対する位置に紐孔を有するもの（第1次調査）があり、県内に於いても各種のものが認められる。

壺用蓋形土器の紐孔と関係の深い壺形土器の紐孔は、形態のわかるすべてが1孔又は2孔を片側に穿つだけである。どのような結合が行われたのであろうか。

(3) 甕形土器の文様

ＳＤ1～ＳＤ6溝址出土、遠賀川系甕形土器[8] 369個体について、口縁端刻目の有無と頸部文様を調査した。その集計の方法は口縁端刻目と頸部文様がわかる土器について取り扱った。しかし、頸部に特殊文様を有するものは、口縁端刻目の有無がわからないものも集計の中に入れた。このような方法では、例えば口縁部と頸部が別々になっていた場合、集計の中に入らない。が、壺形土器同様、傾向を知る事は出来るだろう。第9表、第10表の集計の結果から

① ＳＤ1、ＳＤ2、ＳＤ4、ＳＤ6溝址では口縁端に刻目を有するものが多いが、ＳＤ4溝址は口縁端刻目、頸部文様を欠くものも多く、ＳＤ3、ＳＤ5同様無文化傾向が認められる。

② ＳＤ3、ＳＤ5溝址は口縁端刻目、頸部文様を欠くものが多数を占める。

③ ＳＤ1溝址の頸部文様中には、段を有するものが2.5%ある。

④ 沈線文間に刺突文をもつものがＳＤ1、ＳＤ2溝址に認められる。

⑤ ＳＤ3～ＳＤ5溝址の頸部文様中に沈線1条を施すものがあるが口縁端刻目を欠くものが多く、口縁部の外反度も大きい。

⑥ 沈線文は4条が限度でそれ以上のものはない。

これらの結果からＳＤ1、ＳＤ2、ＳＤ6溝址は口縁端刻目を有し、頸部有文のものが多く、ＳＤ3～ＳＤ5溝址が無文の傾向を示すのと対象的である。この結果は壺形土器文様の検討結果とほぼ同様の傾向を示している。

(4) 所謂、亜流の遠賀川式土器

昭和33年、紅村氏は「名古屋市西志賀貝塚」〔紅村1958〕の報文中で遠賀川式土器を第1類、第2類に分け、第1類を正統的な遠賀川式土器、第2類を亜流の遠賀川式土器とされた。この第2類が今、取りあげようとする土器であり、伊勢国（三重県）に主体があり、尾張国及び三河国にもたらされたと述べられている。同遺跡に於ける亜流の遠賀川式土器は貝殻山式及び西志賀式に認められ単に赤褐色土器＝亜流の遠賀川式土器でない事は、「伊勢国での遠賀川式土器は正統的遠賀川式土

器の型をとるものと類型的にみて別の型のもの（これが主体となる）が復合して存するが、いずれも赤褐色の焼成をなす事が目を引く」（・・・筆者記）と述べられている事からも明らかである。

紅村氏の指摘以降、三重県では多くの弥生式前期土器が発見され、調査もされて来たが、この問題に関しての発言は必ずしも充分とは言えない。

真田氏は「赤褐色の土器は少なく」「これが主体だという紅村弘氏の説は正しくない」〔真田・大場・仲見・1970〕とされ、谷本氏は金剛坂遺跡の調査により、比較的多くの赤褐色土器を検出したが遺跡立地の相違による土器の差も考えられた。〔谷本鋭次ら、1971〕

本遺跡では出土量の最も多いＳＤ１溝址の甕形土器について、所謂亜式土器の検討を行った。(10)

その結果、280個体の甕形土器のうち、わずか17個体しか含まれておらず決して「主体」と言える状態ではなく、むしろ過少というべきであった。ＳＤ３～ＳＤ５溝址では若干、その比率が増すようであるが、やはり「主体」とは言えない。これで中ノ庄遺跡、上箕田遺跡、永井遺跡では所謂亜式土器が「主体」とは成り得ず、過少と言う状態である事が判明した。

(5) 逆Ｌ字形口縁の甕形土器

逆Ｌ字形口縁を呈する甕形土器がＳＤ１からのみ出土したが、これらの土器は一様に、口縁部外端面に凸帯を貼り付けめぐらし、口縁部上面を平坦にした特徴的なものである。

出土量は280個体中、７個体で３％にも満たない。これらの土器は、この地方では例を見ないものであるが、瀬戸内地方に多く見られるものと同系統のものなのかは詳らかでない。ただ頸部に沈線をもつものが１点もない事は重要視せねばならない。詳細は今後の調査例を待ちたい。

(6) 条痕文系の深鉢形土器

伊勢湾沿岸地方の弥生前期土器に条痕文系の土器を含む事は早くから指摘され〔吉田富夫1933〕、その融合関係が多々論じられてきた〔紅村1963・久永1966等〕。

県内に於いても中ノ庄遺跡、上箕田遺跡、大谷遺跡〔小玉道明1967〕等に出土例がある。しかし同じ伊勢湾沿岸にありながら、尾張、三河とは異なり、条痕文系の土器が極めて少ない。本遺跡に於いても極少の条痕文系深鉢形土器が検出されているが、それらは水神平式と呼ばれているものでＳＤ３溝址から２個体、ＳＤ５溝址から３個体出土したのみでＳＤ１、ＳＤ２溝址等の古い要素をもつ溝址からは検出されず、「新」段階の前半に属する溝址から出土している点には留意すべきである。

(7)壺形土器と甕形土器の比率

口縁部～胴部に至る部分及び土器底部による壺形土器と甕形土器の比率について調査した。その集計の方法は

器形＼溝址	SD1 点数(%)	SD2 点数(%)	SD3 点数(%)	SD4 点数(%)	SD5 点数(%)	SD6 点数(%)	計 点数(%)
壺	203(41.8)	38(44.7)	4(30.8)	9(31.0)	10(66.7)	8(57.1)	272(42.4)
甕	282(58.2)	47(55.3	9(69.2)	20(69.0)	5(33.3)	6(42.9)	369(57.6)
計	48.5(100)	85(100)	13(100)	29(100)	15(100)	14(100)	641(100)

第11表　口縁部～胴部による壺、甕の比率

器形＼溝址	SD1 点数(%)	SD2 点数(%)	SD3 点数(%)	SD4 点数(%)	SD5 点数(%)	SD6 点数(%)	計 点数(%)
壺	90(49.5)	10(45.5)	6(50)	10(47.6)	10(58.8	9(52.9)	135(48.7)
甕	92(50.5)	12(54.5)	6(50)	11(52.4)	7(41.1)	8(47.1)	136(51.3)
計	182(100)	22(100)	12(100)	21(100)	17(100)	17(100)	271(100)
不明	340	16	0	13	0	2	371
総計	522	38	12	34	17	19	642

第12表　土器底部による壺、甕の比率

① 壺形土器の場合、口頸部個体数と頸胴部個体数が同一ではない。従って、その両者のうち多い方を用いた。甕形土器についても同様である。

② 土器底部はＳＤ１～ＳＤ６溝址から600個体以上出土しているが、それらの多くは破片であり、壺、甕の区別がつかない。よって壺、甕の区別がつくもののみについて検討した。壺と甕の区別は、底部から下胴部への立ち上がり、調整の方法、媒の付着等により行った。(11)

第11表及び第12表から壺形土器と甕形土器の比率は総出土量の少ないＳＤ３～ＳＤ６溝址の場合誤差が大きく、傾向的にとらえる事が出来ない。従って、ＳＤ１～ＳＤ２溝址の結果からすれば、壺形土器と甕形土器がほぼ等しい比率を示す。この傾向が他の遺跡にも認められるか、否かは今後の検討に待ちたい。(12)

(8) 他遺跡との比較

県内に於いては、これまで壺形土器、甕形土器についての、各文様頻度の調査例はない。従ってここで用いる他遺跡の数値は、すべて報告書から集計したものである。(13) このような方法には矛盾

が多い。が、少なくとも傾向を知る事は出来ると考える。文様区分の方法は、「壺形土器の文様について」「甕形土器の文様について」と同様にし、永井遺跡の比較にはＳＤ１出土土器を用いた。第13表～第16表により主な違いをあげると次のとおりである。

① 中ノ庄遺跡の壺の口頸区分文様には、段の使用、ヘラ描き沈線少条を主体とし、頸胴区分文様にはこれに削り出し突帯、削り出し凸帯＋沈線少条を混える。貼り付け凸帯及びヘラ描き沈線多条が少ないのが特徴である。他方甕は口縁部刻目の有無が相半ばする。又頸部文様を有するものが７割に達し、その文様も沈線１～２条が多い。

② 上箕田遺跡の壺の口頸区分文様にはヘラ描き沈線を主体とし削り出し凸帯を混じえ、頸胴区分文様は削り出し凸帯＋沈線少条、ヘラ描き沈線少条に若干の貼り付け凸帯を混じえる。甕は刻目をもつものが７割を占め、頸部文様には沈線２～３条もつものが多い。又表中にはないが貼り付け凸帯をもつものがある。

③ 永井遺跡では、貼り付け凸帯を主とし、削り出し凸帯＋沈線少条、ヘラ描き沈線少条を若干混じえる。中ノ庄遺跡、上箕田遺跡に見られなかった文様として、削り出し凸帯＋沈線多条が出現している。甕形土器は刻目をもつものが上箕田遺跡よりわずかに減り、頸部文様は２～３条の沈線を主体とする。

遺跡名（時期）／口頸部界文様	中ノ庄（中）	上箕田（中～新）	永井（中～新）
段	8 (27.6%)	0 (0)	1 (0.5)
削り出し凸帯	1 (3.4)	3 (11.5)	10 (4 9)
削り出し凸帯＋沈線少条	2 (24.1)	1 (3.9)	19 (9.4)
削り出し凸帯＋沈線多条	0 (0)	0 (0)	5 (2.5)
ヘラ描き沈線少条	8 (27.6)	6 (23.1)	33 (16.3)
ヘラ描き沈線多条	3 (10.3)	9 (34.6)	9 (4.4)
貼り付け凸帯	0 (0)	4 (15.4)	87 (42.8)
無　文	7 (24.0)	3 (11.5)	39 (19.2)
計	29 (100·0)	26(100.0)	203(100.0)

第13表　中ノ庄、上箕田、永井各遺跡に於ける壺形土器口頸部界文様頻度表

遺跡名（時期） 類胴部界文様	中ノ庄 （中）	上箕田 （中～新）	永井 （中～新）
段	2（8.3）%	0（ 0）	0（ 0）
削り出し凸帯	6（25.0）	2（8.7）	0（ 0）
削り出し凸帯＋沈線少条	5（20.8）	6（26.1）	16（16.5）
削り出し凸帯＋沈線多条	0（ 0）	0（ 0）	3（3.1）
ヘラ描き沈線少条	7（29.2）	9（39.1）	20（20.6）
ヘラ描き沈線多条	4（16.7）	2（8.7）	23（23.7）
貼り付け凸帯	0（ 0）	4（17.4）	35（36.1）
計	24（100.0）	23（100.0）	97（100.0）

第14表　中ノ庄、上箕田、永井各遺跡に於ける壺形土器類胴部界文様頻度表

		中ノ庄 （中）	上箕田 （中～新）	永井 （中～新）
口縁部刻目	無	19（42.2）%	10（29.4）	97（34.6）
	有	26（57.8）	24（70.6）	183（65.4）
類部文様	無	12（23.5）	14（35.9）	125（44.3）
	有	39（76.5）	25（64.1）	157（55.7）
	段	1（2.0）	0（ 0）	4（1.4）
	沈線＋刺突文	6（11.8）	0（ 0）	3（1.1）
計		51（100.0）	39（100.0）	282（100.0）

第15表　中ノ庄、上箕田、永井各遺跡に於ける甕形土器の文様頻度表

	中ノ庄 (中)	上箕田 (中～新)	永井 (中～新)
沈線1条	8 (30.8)%	2 (8.3)	15 (10.0)
2条	8 (30.8)	13 (54.2)	70 (46.7)
3条	7 (26.9)	6 (25.0)	46 (30.7)
4条	3 (11.5)	3 (12.5)	19 (12.6)
計	26 (100.0)	24 (100.0)	150 (100.0)

第16表　甕形土器頸部の沈線条数

(9) 綜　括

ＳＤ1～ＳＤ6溝址出土の前期土器は、佐原真氏の分類によれば、削り出し凸帯をもつもの、木葉文、2条1組の弧線文、沈線間刺突文等の「中」段階に属するものと貼り付け凸帯を有し、a 種に属する「新」段階前半のものに分けられ、

前者はＳＤ1、ＳＤ2溝址にて検出され、特にＳＤ2溝址では大洞A′類似鉢形土器が伴出している。後者はＳＤ1～ＳＤ6の各溝址から検出されている。ＳＤ3及びＳＤ5溝址から出土した条痕文系の水神平式土器はこの時期に伴出するものと考えられる。

県内に於ける前期土器の編年は、既に述べられて来ているが、本遺跡の資料を加え、中ノ庄→上箕田→永井→金剛坂といった変遷が考えられる。(14)

次に紅村弘氏が三重県に主体をもつとされた所謂、遠賀川亜式土器は中ノ庄遺跡、上箕田遺跡同様、本遺跡でも主体とはなりえない。

この他にも口縁内面に周回しない突帯を有するもの、逆Ｌ字形の甕、えぐりを有する打製石包丁等、瀬戸内～摂津方面の特徴に類似する遺物等がある。その意味は今後の研究に譲ろう。

註

(1) ＳＤ5溝址出土の削り出し凸帯は220の土器で断面三角状に削り出し、一見貼り付け凸帯風にする特殊なものである。

(2) 池上遺跡Ｌ地区O58区画の溝出土第Ⅰ様式土器は本遺跡ＳＤ1及び2と、ほぼ同様の傾向を示している。比較の意味で引用させていただく。〔第2阪和国道内遺跡調査会、1971〕なお、表中の区分は1部変更させていただき、付加条沈線1個体はヘラ描き沈線文・4条以上に入れた。

遺跡名及び出土地 / 文様		池上 LO58溝	永井 SD1	永井 SD2
段		0 (0 %)	1 (0.6)	0 (0)
削り出し凸帯	帯上無文	1 (0.3)	10 (6.1)	0 (0)
	帯上沈線	84 (24.1)	24 (14.6)	1 (8.3)
ヘラ描き沈線	1～3条	76 (21.8)	33 (20.1)	4 (33.3)
	4条以上	123 (35.4)	9 (5.5)	0 (0)
貼り付け凸帯		64 (18.4)	87 (53.1)	7 (58.4)
計		348 (100.)	164 (100.)	12 (100.)

第17表　池上遺跡、永井遺跡に於ける壺形土器の文様

上表の如く、両遺跡の文様手法頻度はよく近似している。差をあげるならば、永井遺跡ではヘラ描き沈線文4条以上が少なく、貼り付け凸帯が多い。池上遺跡L地区O58の溝出土物は、全くその反対になり、両手法の土器を加えるとその割合はほぼ等しくなる。この差が、より細かい時間的な差か、それとも地域的な差なのかは現段階では不明。今後の調査に期待したい。

(3) ヘラ描き沈線2条と3条に界をなし少条、多条としたが、後述する中ノ庄遺跡、上箕田遺跡の例が最高2条であるところから、ここで画した。佐原真氏は「中段階の壺」の「沈線文の数は単独に用いるばあい、段と組み合わせて用いるばあい、削り出し凸帯の上下の段の間に用いるばあいの区別なく、なお3条をこえることはすくない。4条以上の沈線をともなう削り出し凸帯は、口頸部間、頸胴部間を区分する役割をはたすというよりは、むしろそれ自身が幅広い文様帯をなしている」とされ、4条以上の沈線をもつ削り出し凸帯を有する土器は「形態の上でも新段階の壺に近い」〔佐原真1968〕と述べられている。

ちなみに、本遺跡出土の削り出し凸帯上の沈線は大部分3条であり、稀に4条のものがある。

(4) 貼り付け凸帯の条数、凸帯上の刻目の有無、沈線との併用等区別すべきであったかも知れない。

(5) 小破片の多いSD3～6溝址については皆無に近いとせざるを得なかった。

(6) 唐古遺跡、勝部遺跡の調査例を参考にした。

(7) 中央に紐孔をもたないものがあるが（142）、口縁部を欠いている為、口縁付辺に紐孔を有するか否かについては不明。

(8) 条痕文系に対する遠賀川系という意味である。

(9) 池上遺跡G溝では、第Ⅰ様式新段階に属する甕形土器を層位毎に5層に分け、口縁端刻目有無の変遷が知られた。それによると、上層のもの程、刻目を欠くものが多数を占める。同様の結果は同遺跡LO58溝、LO54溝黒色土の比較からも窺える。〔第2阪和国道内遺跡調査会1970〕〔同1971〕

(10) 他の溝址の甕及び壺についても計数的にあらわすべきであったが、都合により出来なかった。いずれ機会があれば、はっきりさせたい。整理時の状況から見れば、恐らく5％以下の比率であろう。

(11) 第11表及び第12表を作成し、まず驚いたのは、偶然にも壺形土器と甕形土器の統計がほぼ同数になった事で

ある。

(12) 四ッ池遺跡、池上遺跡でも壺、甕がほぼ相半ばしている。〔第2阪和国道内遺跡調査会1971〕西志賀遺跡では壺51個（36.7%）に対し、鉢又は甕88個（63.3%）である。〔杉原・岡本1961〕。永井遺跡より甕の比率が高い。

(13) 各文様の区分は報告書記載に従ったが、記載がないものはその状況で判断した。

なお上箕田遺跡については、第2次調査報告のみについて集計した。

(14) 中ノ庄→上箕田については従来から推移が知られており、今回の結果は、それを裏付けしたに留まる。

2. 弥生時代中期中葉の土器について

中期中葉の土器は、出土量が少なく、完全に把握できた状態とは言えない。しかし、その器種構成は一応壺形土器、細頸壺形土器、甕形土器のセットをなしている。

これらの土器群は、東海地方の編年によれば、尾張の貝田町式併行期[1]に相当する。しかし、その内容は尾張の土器様相と同一ではない。壺形土器は近江から伊賀、伊勢に特徴的な瘤状突起を有し細頸壺形土器は尾張で主体を占めるヘラ区画文、竹管を押しつけた浮文等を用い、甕形土器に至ってはさらに複雑な様相を呈している。甕形土器Aは近江、山城、伊賀、伊勢[2]、尾張、三河等広い分布を示し、甕形土器Bは甕形土器Aより分布は狭いが、近江、山城、伊賀に及び本遺跡の出土から伊勢にも存する事が明らかになった。他方、甕形土器Cは尾張に通例のものであり、県内にも上箕田遺跡〔仲見ら1961　真田・大場・仲見1970〕東庄内B遺跡〔小玉ら・1970〕、上村遺跡〔吉村・1972〕金剛坂遺跡〔山沢・谷本・1971〕等で散見される。

このように甕形土器は3種がそれぞれ、その分布、系統を異にし、本遺跡では甕形土器Aが主体を占め、尾張との違いを明瞭にしている。これらの諸要素は畿内東接地域の状況とよく似ており、この時期に於ける両地域の関係が浅からぬ事を示している。

註

(1) 〔紅村・1963〕による。外土居式併行期〔久永・1966〕とする意見もあるが、分離が充分でない現在、一応貝田町式併行期としておく。

又、土器組成の異なる地域に対し同一型式名を用いるのは望ましくない。従って何々式併行期とした。

(2) 谷本鋭次氏は、三重県に一般である事を既に述べられている。〔小玉・下村・山沢・谷本・井上・1970〕

3. 弥生時代中期後葉の土器について

(1) 口縁部端面及び内面の文様

口縁部端面及び内面の文様については文様構成を知る手段として、畿内地方でよく用いられており地域差を知る一助となっている。それらの方法は多数の土器の特徴を数量的に取り扱い、比率、構成を把握するのに有効な方法である事は明らかである。しかし、伊勢湾沿岸に於いては、土器の形態及び組み合せが異なる事等から、これまで用いられていなかった。本遺跡の中期後葉の土器はその多くが破片であり、形態を知りうるものは数える程度にしか過ぎない。従って、その内容も充分とは言えない状況にある。これらの不備をいくらかでも補えればと考え、出土土器の数量化を計った。出土量も多くなく、又時期的にも狭い範囲にとどまり、決して充分とは言えないが、どのような文様がどのような形態の土器に多く用いられているか、又伊勢湾西岸の特徴は何かを知るように勉めた。調査の対象はSX74、SX75方形周溝址出土の壺形土器、無頸壺形土器、細頸壺形土器

文様の種類＼出土地		SX74・SX75 点数 (%)
櫛描文	波状文	6 (5.8)
	直線文	2 (1.9)
	列点文	11 (10.6)
凹線文		66 (63.4)
貝殻腹縁文		1 (1.0)
刻目		3 (2.9)
無文		15 (14.4)
計		104 (100.0)

第18表　口縁部端面文様

文様の種類＼出土地		SX74・SX75 点数 (%)
櫛描文	列点文	5 (4.8)
	列点文＋他の文様	1 (1.0)
	扇形文	2 (1.9)
貝殻腹縁文		2 (1.9)
竹管文		3 (2.9)
無文		91 (87.5)
計		104 (100.0)

第19表　口縁部内面文様

口縁部端面＼口縁部内面		無文	櫛描列点文	櫛描列点文＋他の文様	櫛描扇形文	竹管文	貝殻腹縁文	計
櫛描文	波状文	2	2		2			6
	直線文	2						2
	列点文	7	2	1		1		11
凹線文		66						66
貝殻腹縁文		1				1		2
刻目		2						2
無文		11	1			1	2	15
計		91	5	1	2	3	2	104

第20表　口縁部端面と内面の文様

に限り、その口縁部片104点（完形に近い土器も含む）を用い、口縁部端面及び内面の文様構成を検討した。第18表～第20表に示すように、

口縁部端面

① 凹線文を施す土器が圧倒的に多く約6割に及び、その器形は壺形土器ＣⅠ、ＣⅡ等の受口状の壺形土器と無頸壺形土器Ａ、細頸壺形土器である。言いかえれば壺形土器の大部分は受口状のＣⅠ、ＣⅡであり、通常の壺形土器Ａは甚だ少ないと言える。

このように凹線文が多いのは、畿内第Ⅳ様式に併行する土器に限られるからである。しかしその形態が畿内のものとは異る事に注意せねばならない。

② 無文のものが約1割あるが、これは唐古遺跡〔末永、小林、藤岡1943〕の北方砂層（第Ⅲ、Ⅳ様式を主とする）出土と、ほぼ同比率である。

③ 櫛描文様が2割以下で極めて少ない。しかも、そのうち畿内でも稀な列点文（櫛目文）が半数以上を占める。

④ 畿内では全く認められず、伊勢湾沿岸に多い貝殻腹縁を押しつけた文様が1例ある。

⑤ 刻目をもつものの中に入れた457は伊賀、伊勢にのみ認められる土器である。

口縁部内面

① 9割近くが無文である。

② 櫛描列点文が約5％ある。その中には、山形に施す特殊な例も含まれている。

③ 瘤状突起をつけたものが7例あり、前段階からの特徴が受けつがれている。

端面、内面文様組合せ

① 両者とも無文のものが約1割ある。

② 畿内によく見られる端面波状文、内面扇形文のものが2例ある。

③ 端面凹線文、内面無文の大部分は前記の壺形土器ＣⅠ、ＣⅡに属する。

(2) 甕形土器の底部

本遺跡に於ける中期後葉の甕形土器に平底のものと台部を有するものが存する事は既に述べたが尾張及び三河に於いても同様である〔久永・1966〕。しかし、畿内に於いては鉢形土器等に脚台部を有するものがあっても甕形土器に脚台部を有するものは皆無と言ってもよい。これらの差は、甕形土器に移動性が少なく、在地的な要素を持っている事を考える場合、非常に重要である。従って伊勢湾西岸に於ける甕形土器底部がどのような関係にあったかを検討する為ＳＸ74及びＳＸ75出土

の甕形土器についてその比率を求めた。集計の方法は、

① ＳＸ74方形周溝址出土のものについては、ほとんど同一時期と考えられるので底部すべてを取り扱い、形態、胎土、焼成、文様等より甕、壺の区別を行い、比率を求めた。

② ＳＸ75方形周溝址のものについては、確実に中期後葉の土器と伴出しているもののみについて、ＳＸ74方形溝址と同様の方法で比率を求めた。

第21表のように、底部のうち脚台を有するものは半数以上に達し、その特異性をよく物語っている。これらの脚台部は後期や土師器のそれのように下方程うすく仕上げ端面を丸くしたものは少なく、ほとんどは脚台部上半及び下半がほぼ同じ厚さを有し、端面は平らな面をもっている。脚台部と胴部の接着は高杯形土器のように、一見、円板充填によると見られるもの[1]もあるが稀である。ほとんどは脚台部を別に作っておき、その上に筒状の胴部をのせ、接着面に粘土を貼り付け補強している[2]。

			ＳＸ74	ＳＸ75	計
			点数 (%)	点数 (%)	点数 (%)
甕形土器底部	平底系	平底	27 (30.3)	5 (38.5)	32 (31.4)
		上げ底	6 (6.7)	1 (7.6)	7 (6.8)
	脚台を有するもの		56 (63.0)	7 (53.9)	63 (61.8)
計			89 (100.0)	13 (100.0)	102 (100.0)

第21表　甕形土器底部の形態

(3) 綜　　括

ＳＸ74、ＳＸ75方形周溝址出土土器は、尾張地方の編年によれば高蔵期に相当（三河では長床期）し、畿内の第Ⅳ様式に併行する。

これらの土器群は、非常に畿内の影響が強く、円板充填により製作された高杯形土器、凹線文、櫛描文で飾る無頸壺形土器が登場し、文様に於いても櫛描による簾状文、扇形文[3]、回転台使用による凹線文、横ナデ調整及び右から左へ文様を描く畿内型の施文法を採用している。

このように畿内的な色彩がつよい反面、尾張、三河地方の影響も見のがせない。壺形土器Ｂは従来伊勢湾西岸では類例のない土器で胎土、色調、施文等全くことなり三河地方よりもたらされたも

のであろう。壺形土器Cは畿内には認められない形態で口縁端には凹線文を採用するが、胴部の文様は伊勢湾西岸に特有な2～3条一組の櫛歯を数帯たばね施文し、又波状文も波下部で巻き込むように描く。口縁端、内面に於ける列点文の多用も畿内地方とは異なる。更に甕形土器に脚台部を有するものが多く畿内との差を明らかにしている。

伊勢湾西岸に於けるこの時期の特徴は401、456が、端的に物語り、言いかえれば畿内的な影響を受けながらも、その本質は伊勢湾沿岸の文化圏に属している、と言えよう。

（伊藤　洋）

註

(1) 資料的に少なく確実に言えない。今后良好な資料について確認したい。

(2) この点については土器製作上、又地域色を把握する上でも重要であり、今後の研究課題としておきたい。

(3) 簾状文は河内で見られるような「施文原体が長く、巾の狭い文様」〔曽我ら1971〕は認められず、1.0～1.5㎝の施文原体を用いほぼ1㎝間隔に文様を描いている。

参 考 文 献

谷本鋭次『一志郡三雲村中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会 1972

仲見ら『上箕田弥生式遺跡第一次調査報告』県立神戸高校郷土研究クラブ 1961

小玉道明ら『大谷遺跡発掘調査報告』四日市教育委員会 1966

小玉道明『四日市市生桑町大谷遺跡調査概要－C地区－』四日市市教育委員会 1967

真田幸成・大場範久・仲見秀雄『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』鈴鹿市教育委員会 1970

山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会 1971

吉村利男『津市半田上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会 1972

小玉・下村・山沢・谷本・井上『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1970

澄田・大参・岩野『新編一宮市史資料編二 弥生時代』一宮市教育委員会 1967

澄田・大参『九合洞窟』名古屋大学 1956

田中稔「尾張国における中期弥生式土器の研究2－貝田町土器について－」『古代学研究51』1968

柴垣・伊藤・榊原・井上『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会 1972

久永春男「4.中部－東海－」『日本の考古学－弥生時代』和島誠一編 1966

瓜郷遺跡調査会『瓜郷』1963

杉原・岡本「愛知県西志賀貝塚」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961

大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集ＸＬⅦ』1968

吉田富夫「尾張西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学 第五巻第一号』1933

紅村弘『名古屋市西志賀貝塚』1958

紅村弘『東海の先史遺跡・綜括編』東海叢書13 1963

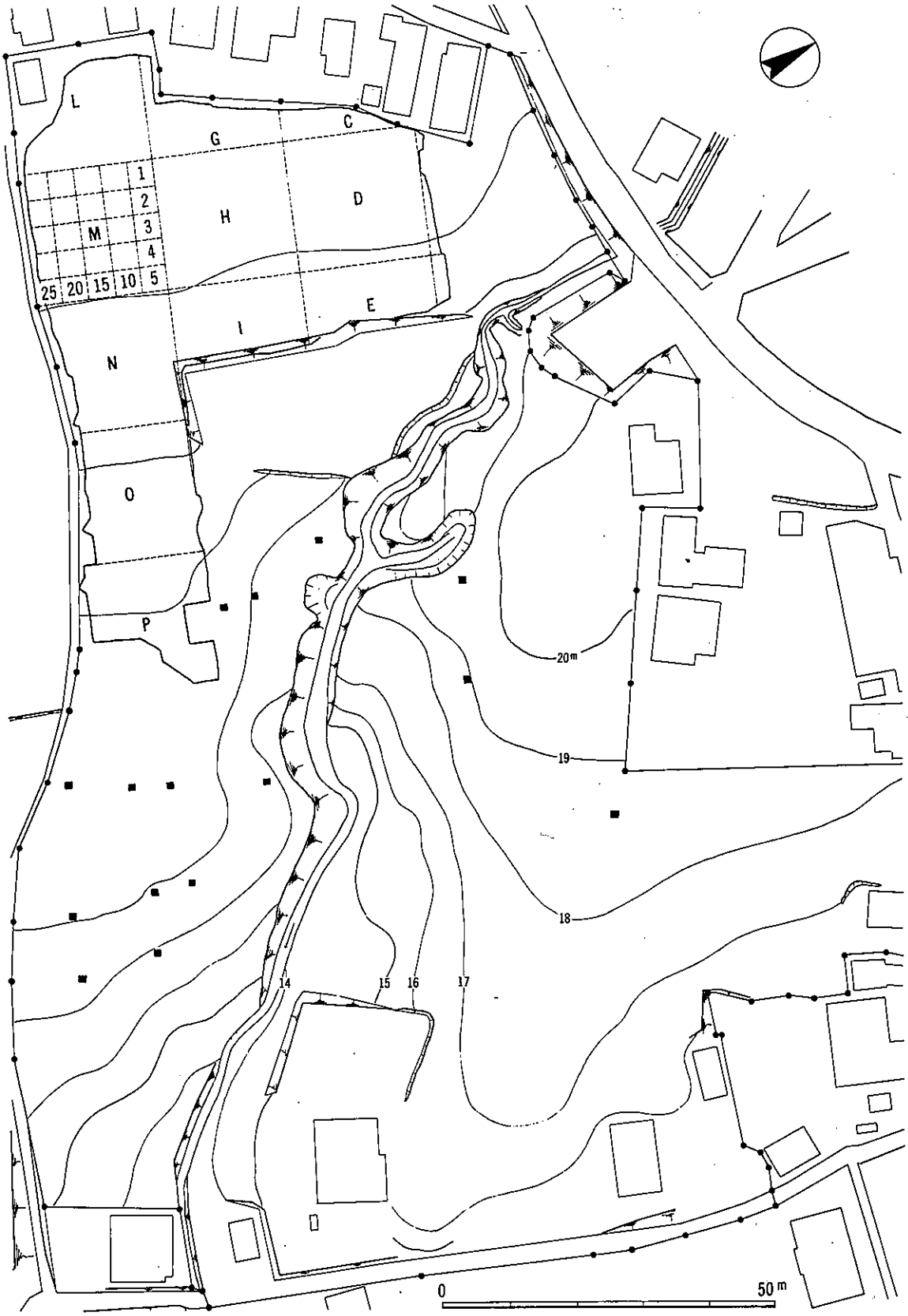
紅村弘ら『見晴台遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次発掘調査概報』名古屋市教育委員会 1966

宇佐・小林・星野「深草遺跡」『古代学研究39』1964

杉原・大塚「京都府深草遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会 1961
末永・小林・藤岡『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告一第十六冊
小林・佐原『紫雲出一香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』1964
佐原真「弥生式土器製作技術に関する二、三の考察」『私たちの考古学 第五巻第四号』1959
佐原真「先史時代」『彦根市史』彦根市教育委員会 1960
佐原真「山城における弥生式文化の成立一畿内第Ⅰ様式の細別と雲の宮遺跡出土土器の占める位置一」『史林 第50巻第5号』1967
佐原真「琵琶湖地方」「畿内地方」『弥生式土器集成.本編2』小林行雄・杉原荘介編 1968
藤井直正ら『勝部遺跡』豊中市教育委員会 1972
第2阪和国道内遺跡調査会「池上・四ツ池遺跡14』 1970
第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池1970』1970
第2阪和国道内遺跡調査会『昭和46年度第2阪和国道内遺跡発掘調査報告4』1971
中央南幹線内東岩田瓜生堂遺跡調査会（本文中は曽我ら1971とした）『瓜生堂遺跡』1971
瓜生堂遺跡調査会（本文中曽我ら1972とした）『瓜生堂遺跡資料編』1972

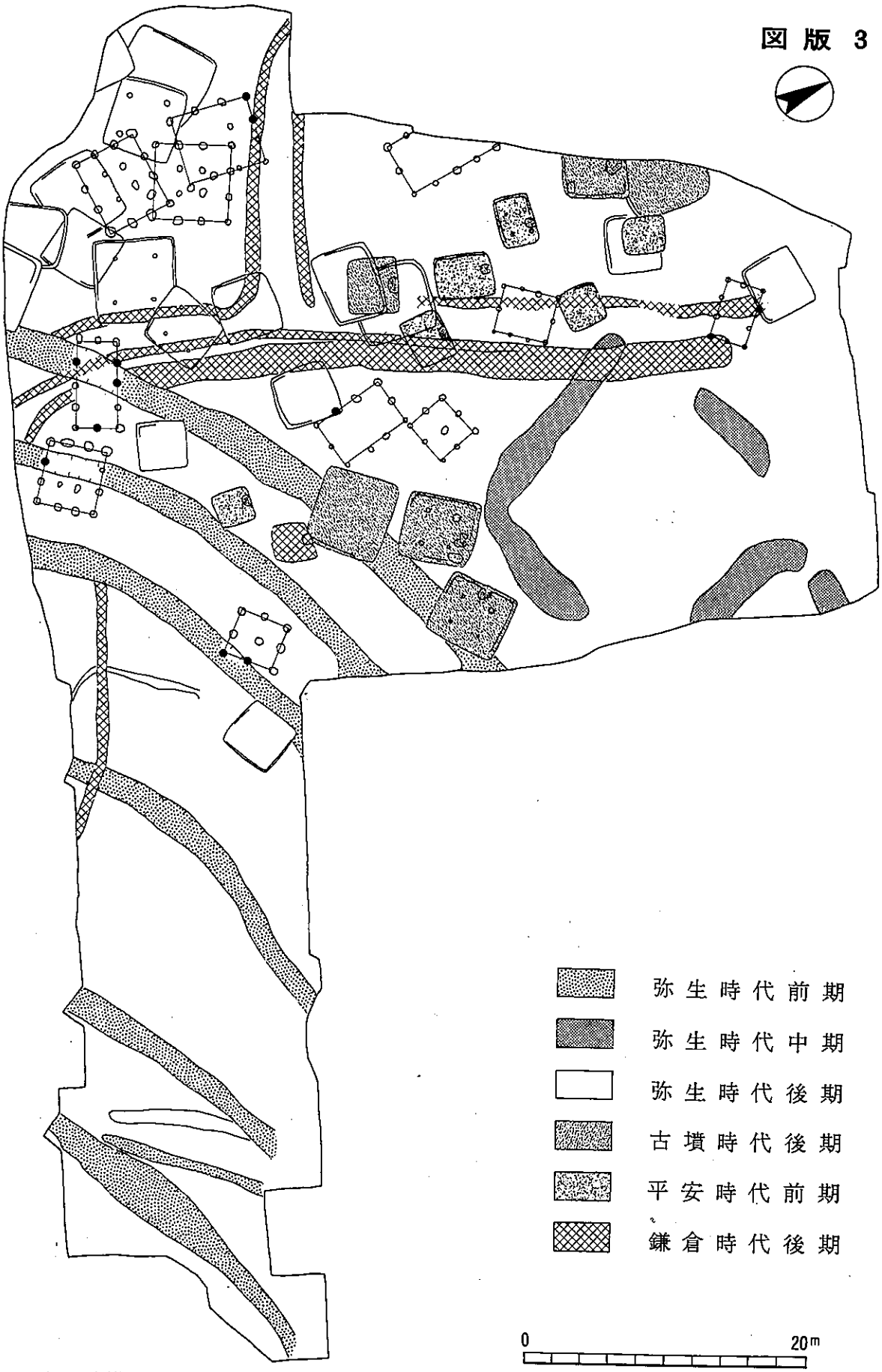
図版 1

永井遺跡位置図　1.貝野遺跡　2.貝野古墳　3.西ヶ谷古窯　4.平池古窯　5.垂坂山古窯
6.大谷遺跡　7.坂部城址　8.上畑遺跡　9.永井遺跡　10.前山遺跡
11.浄祐遺跡　12.宮ノ西遺跡　13.ひばり山古墳　14.東日野遺跡
15.北中寺遺跡　16.妥女城址

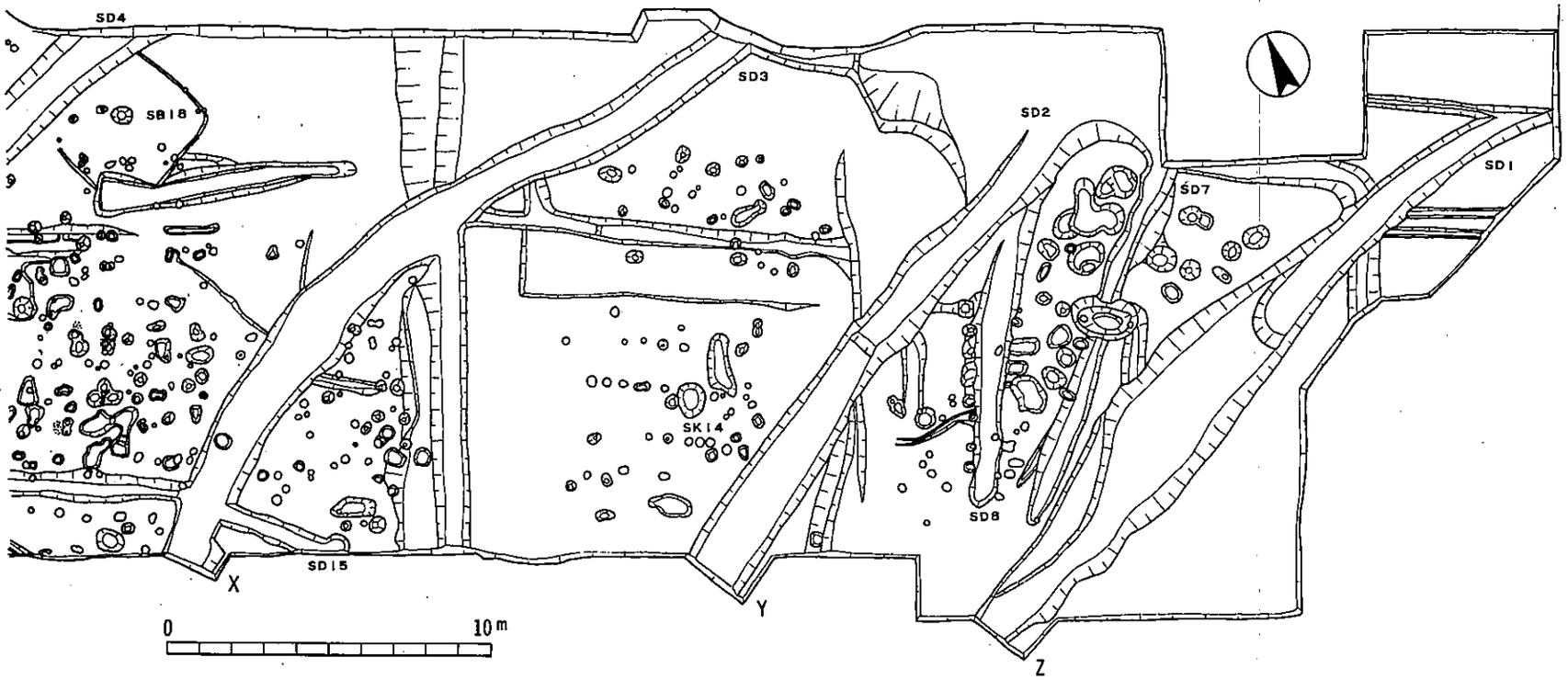


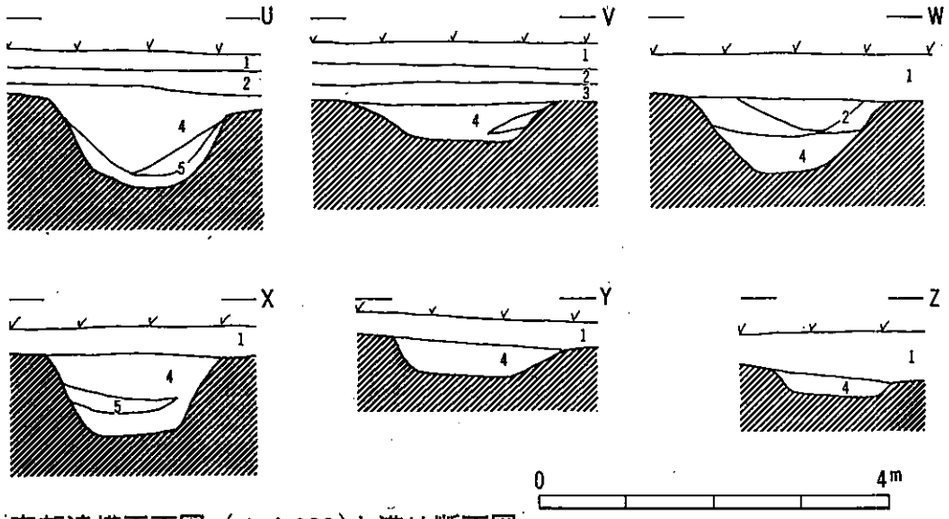
永井遺跡地形図と発掘区（1：900）■は試掘坑

図版 3



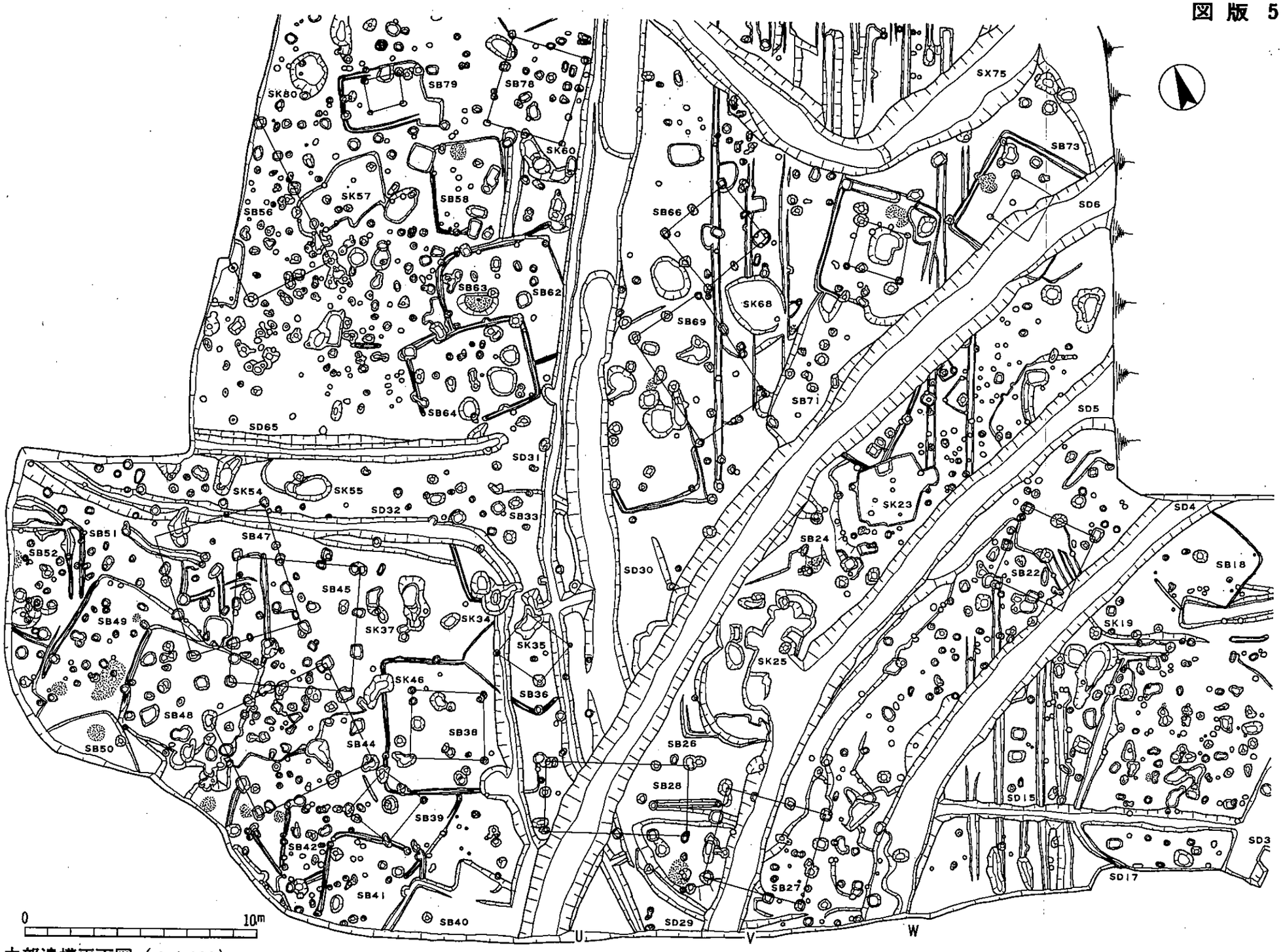
主要遺構配置図（1：400）



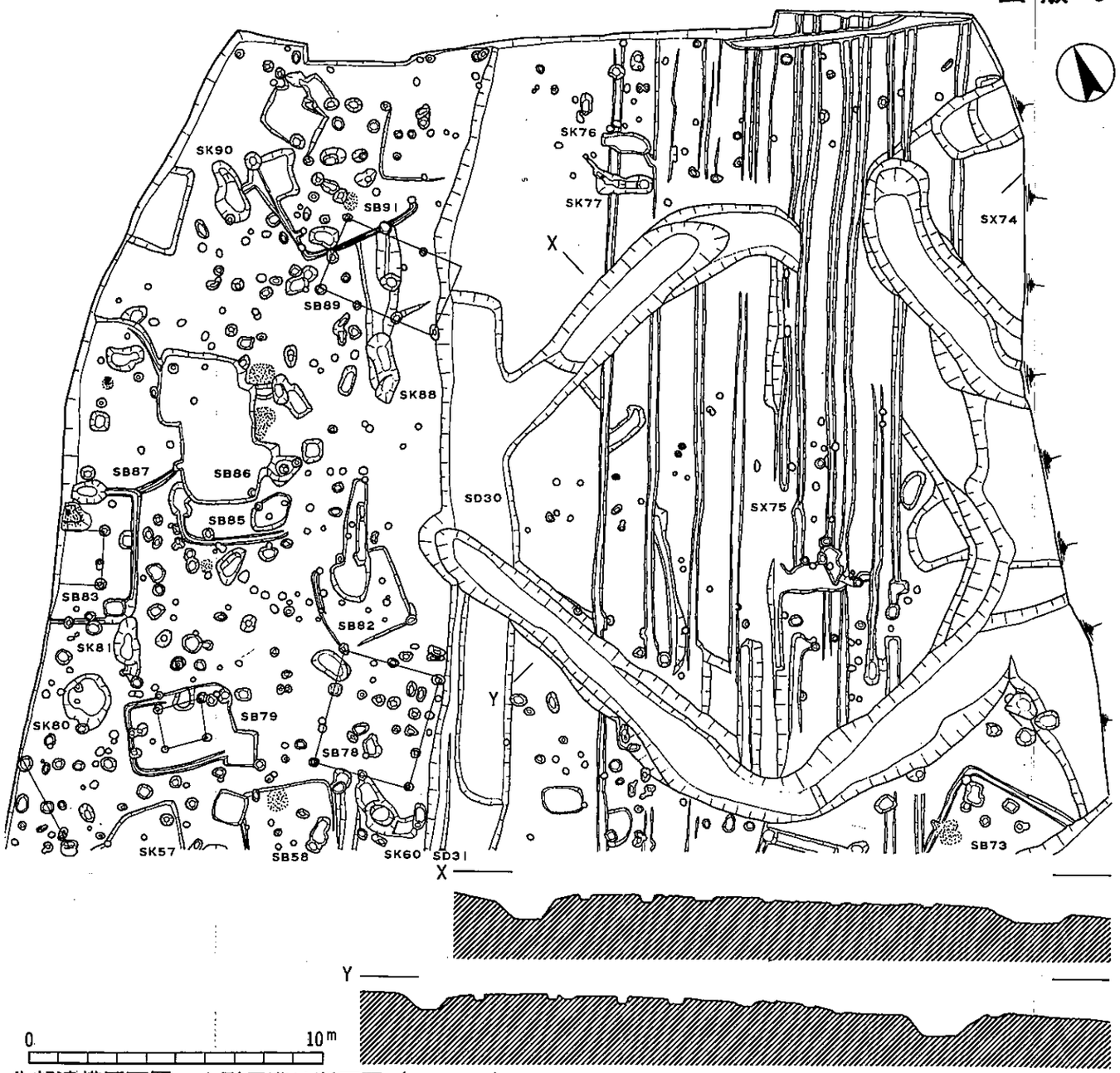


東部遺構平面図（1：200）と溝址断面図

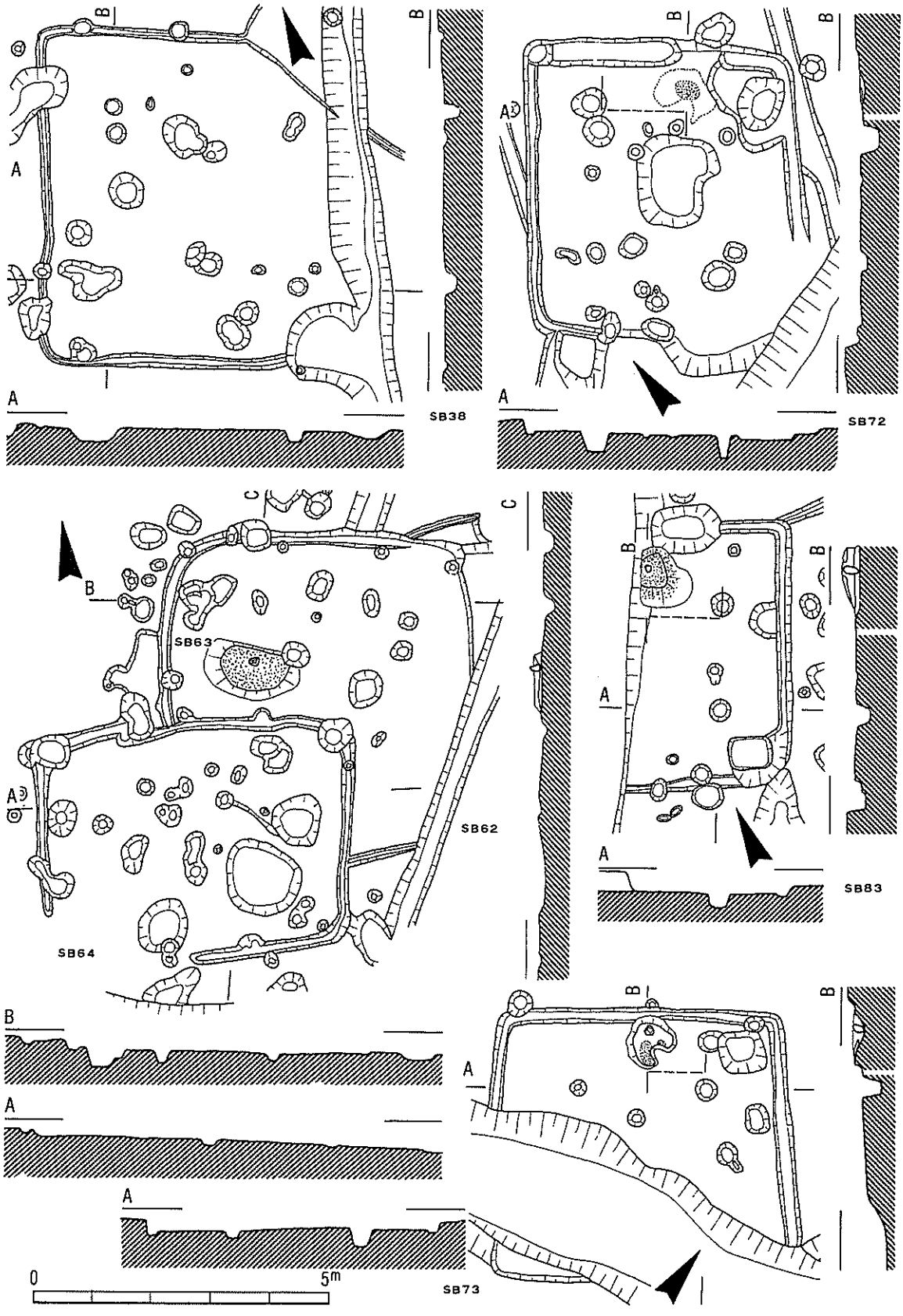
1.表土　2.砂質褐色土　3.粘質黒褐色土　4.粘質黒色土
5.砂質暗黄色土（1：80）



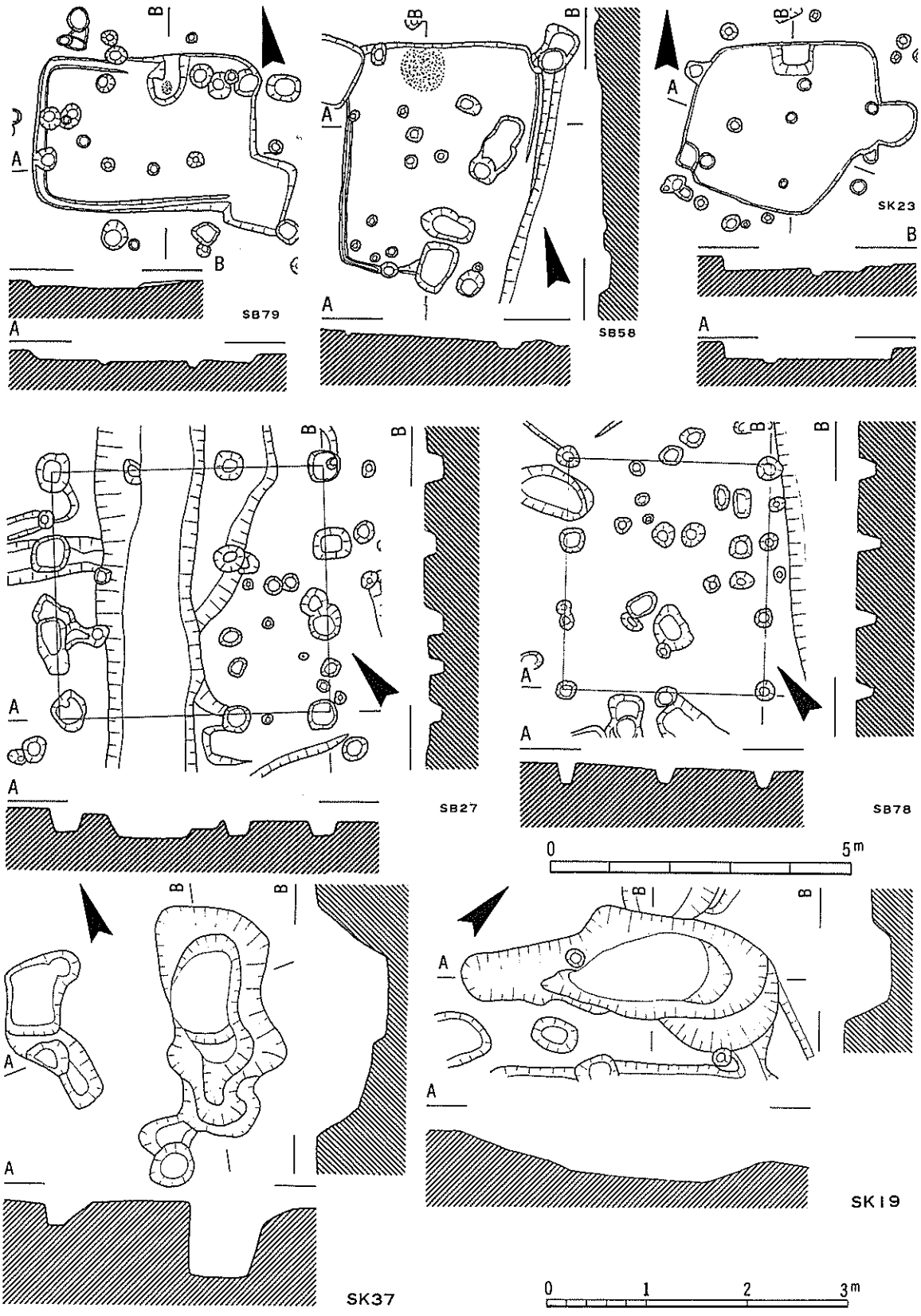
中部遺構平面図（１：200）



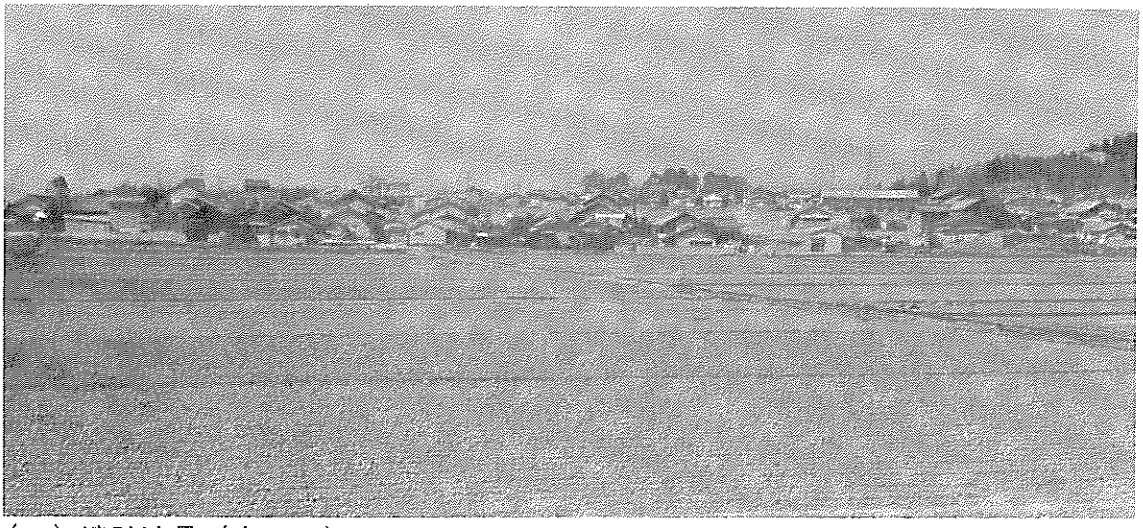
北部遺構平面図・方形周溝址断面図（１：200）



住居址実測図（１：100）



住居址（1：100）土坑（1：60）実測図



（１）遺跡遠景（東から）

（２）遺跡遠景（南から）

（３）遺跡近景（南東から）

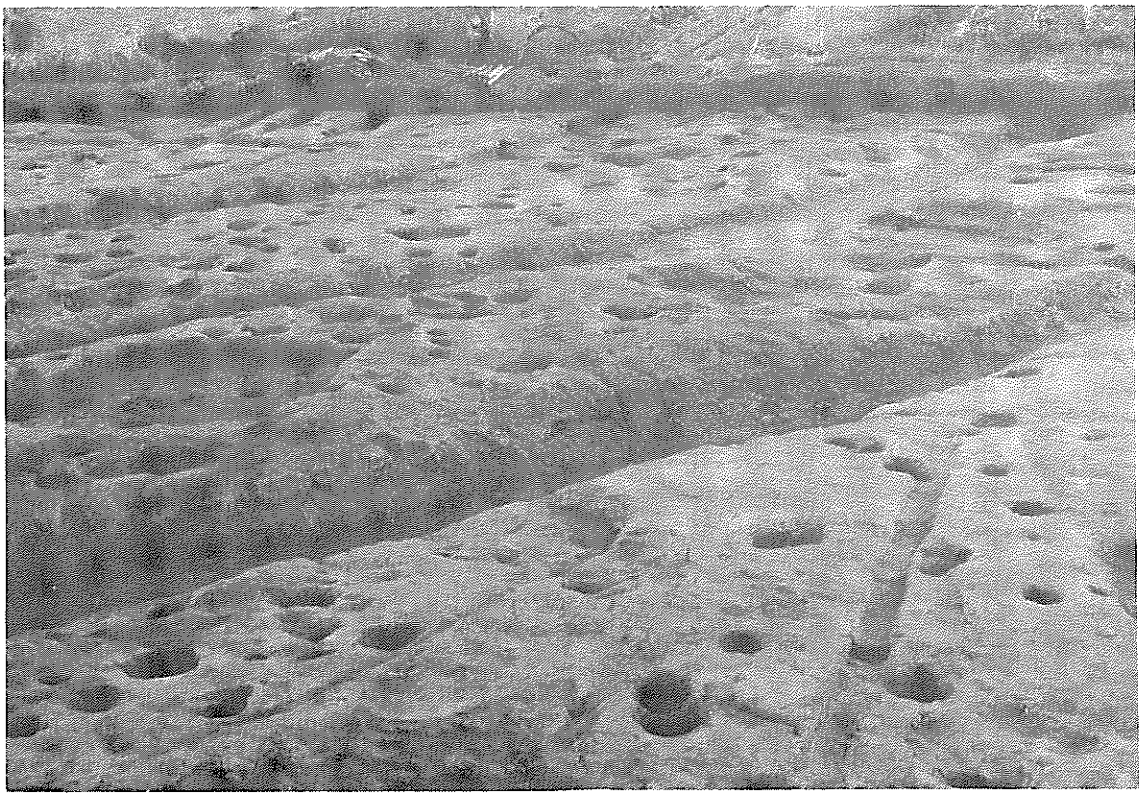
（１）発掘区全景（南から）

（２）発掘区全景（東から）

（１）発掘区東部（北西から）

（２）発掘区東部（南東から）

（１）SD４，SD５，SD６溝址（東から）



（２）SD４，SD５，SD６溝址（北から）

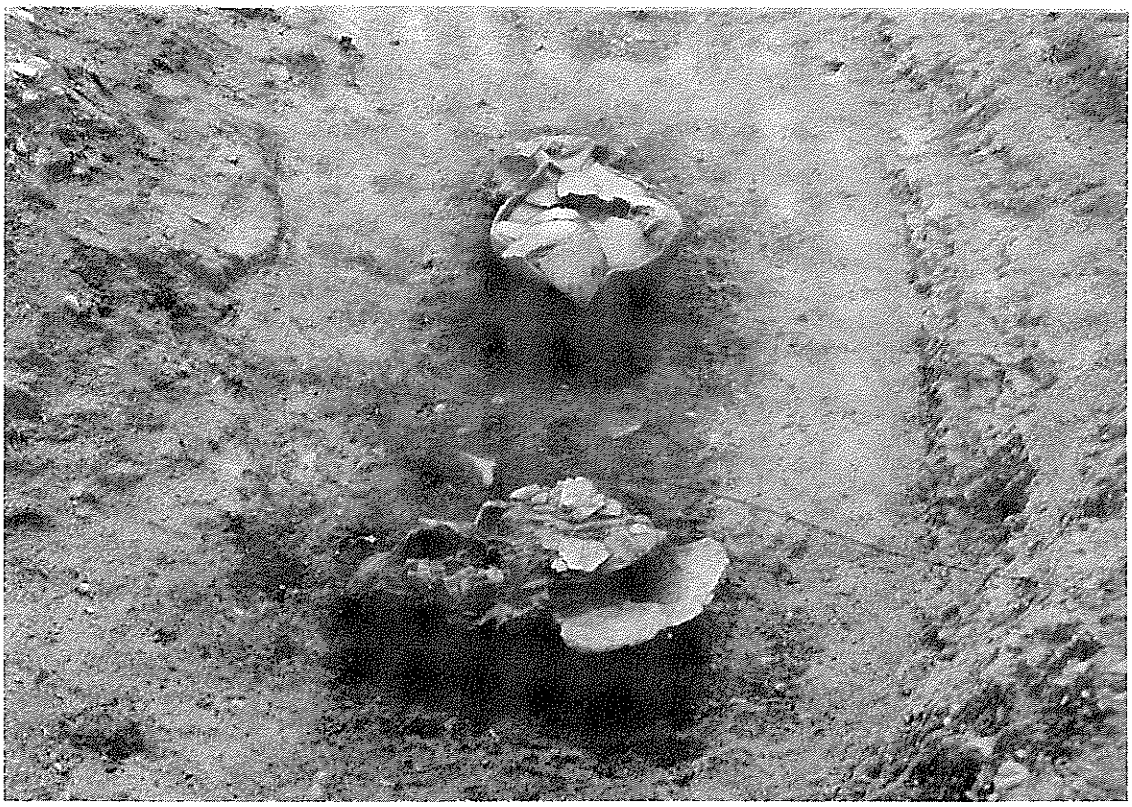
（１）発掘区中部（南東から）

（２）発掘区北部（北東から）

（1）SX74，SX75方形周溝址（北東から）

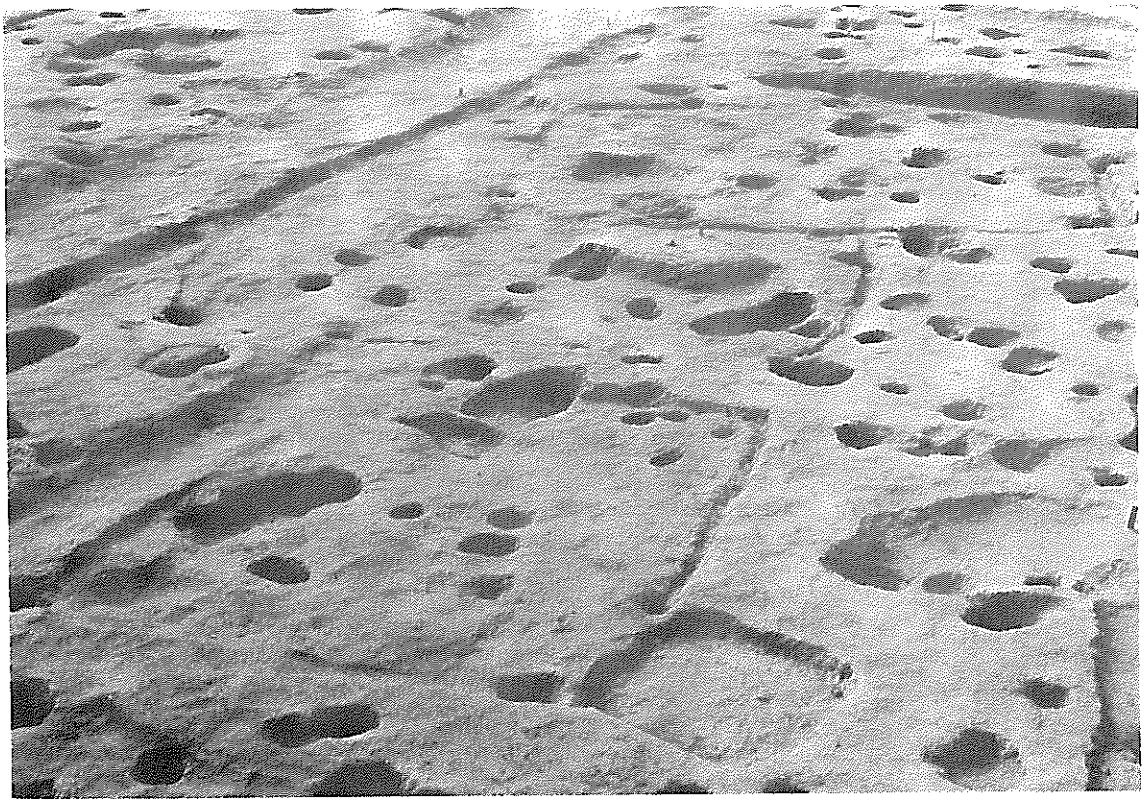
（2）SX74，SX75方形周溝址（南から）

（１）ＳＸ７５方形周溝址（東から）

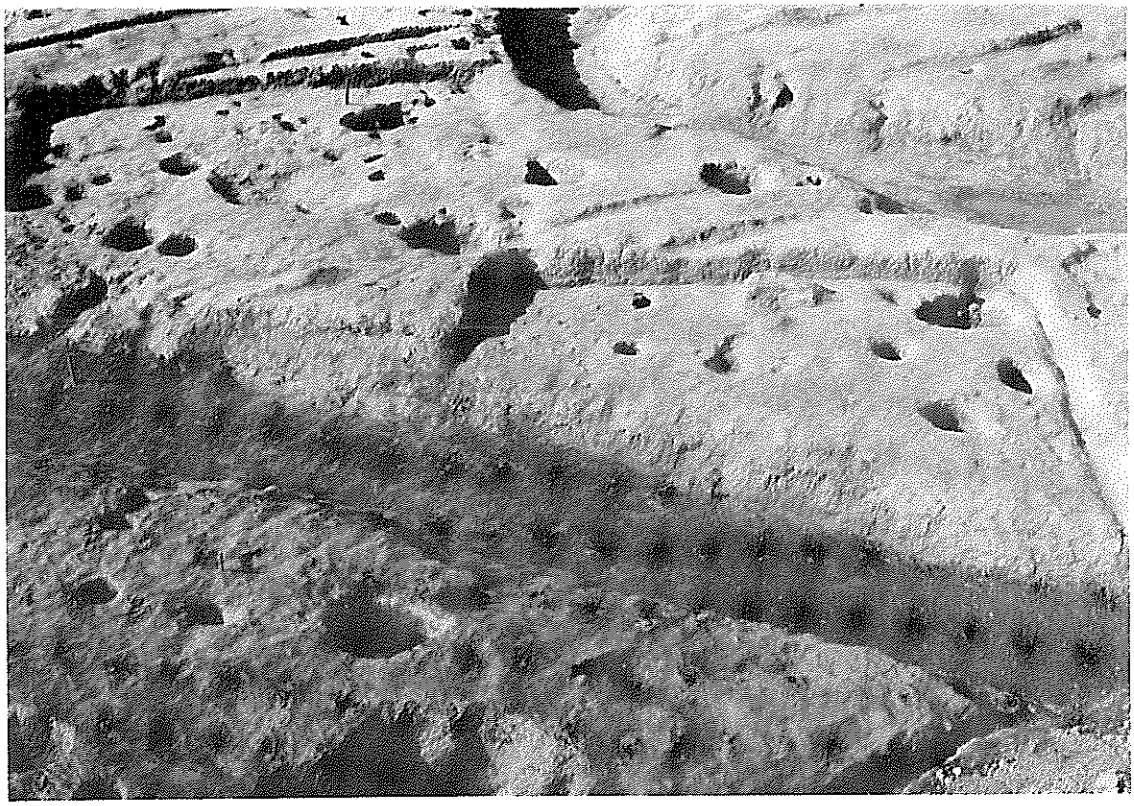


（２）ＳＸ７４方形周溝内の土器

（1）SB38住居址（北から）

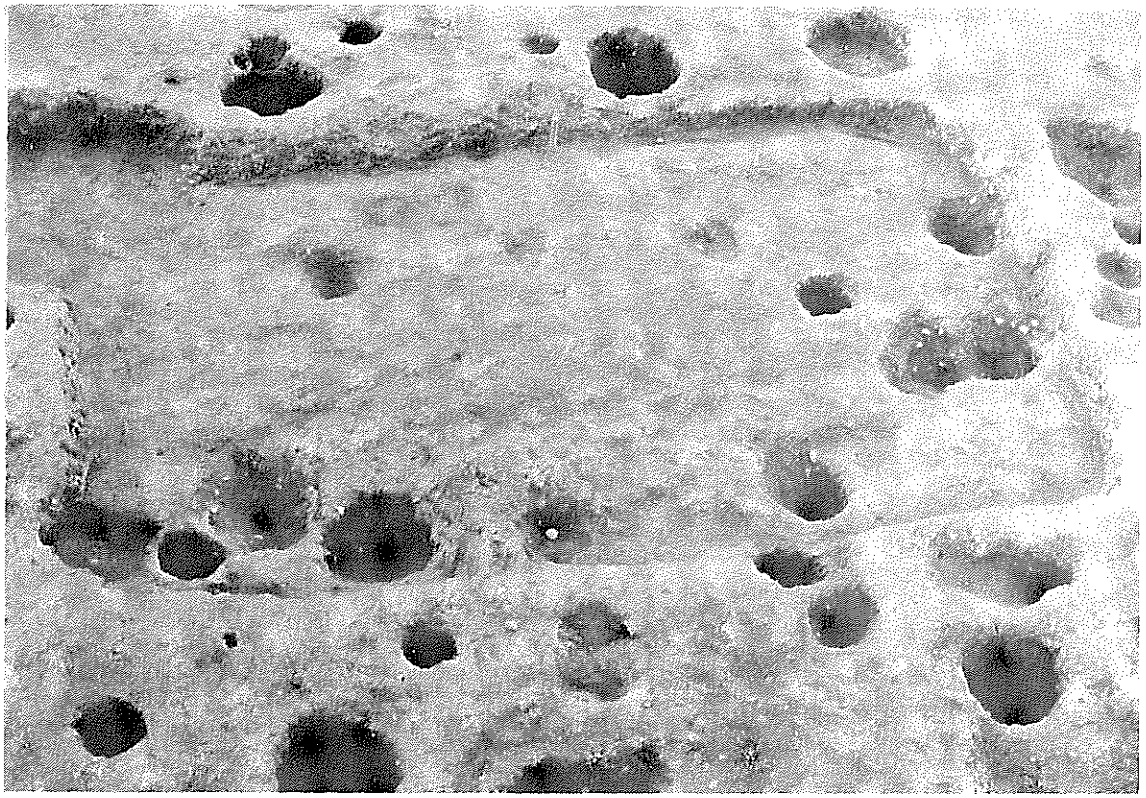


（2）SB58，SB62，SB63，SB64住居址（北から）



（1）SB 72，SB 73住居址（南から）

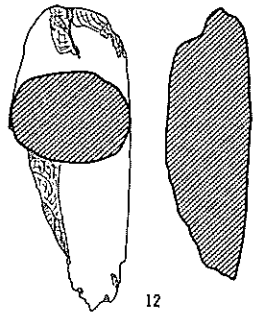
（2）SB 73住居址（東から）

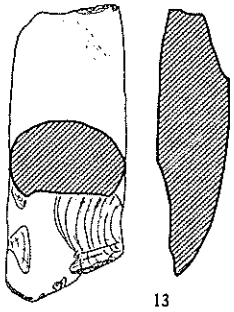


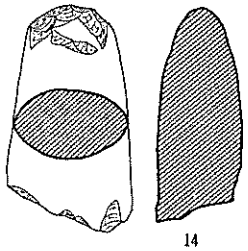
（１）SB７９住居址（北から）

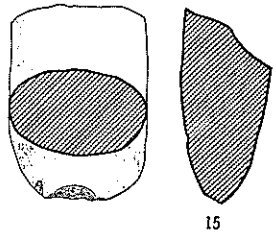
（２）SB７８掘立柱建物址（南から）

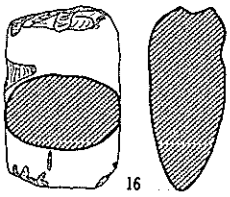
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

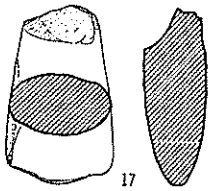

12

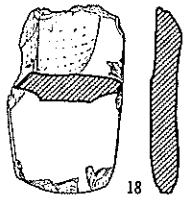

13

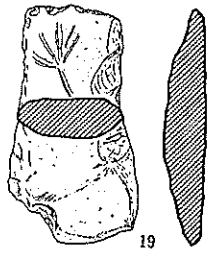

14

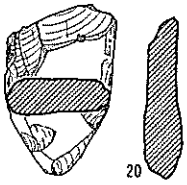

15

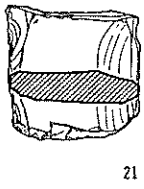

16

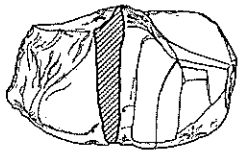

17

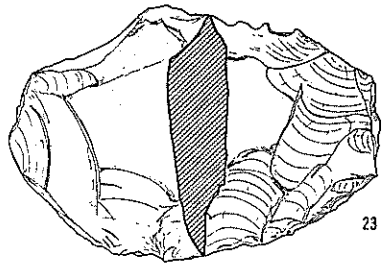

18

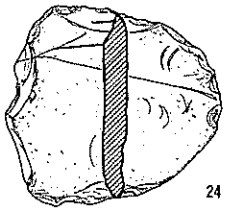

19

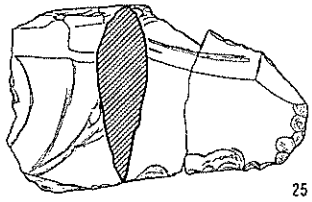

20

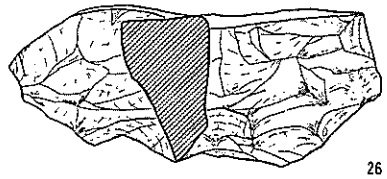

21

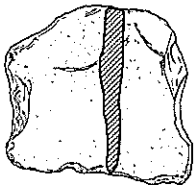

22

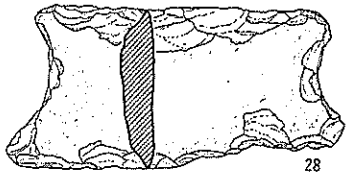

23

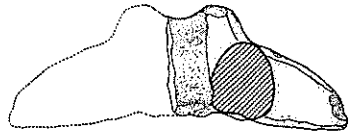

24

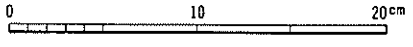

25


26

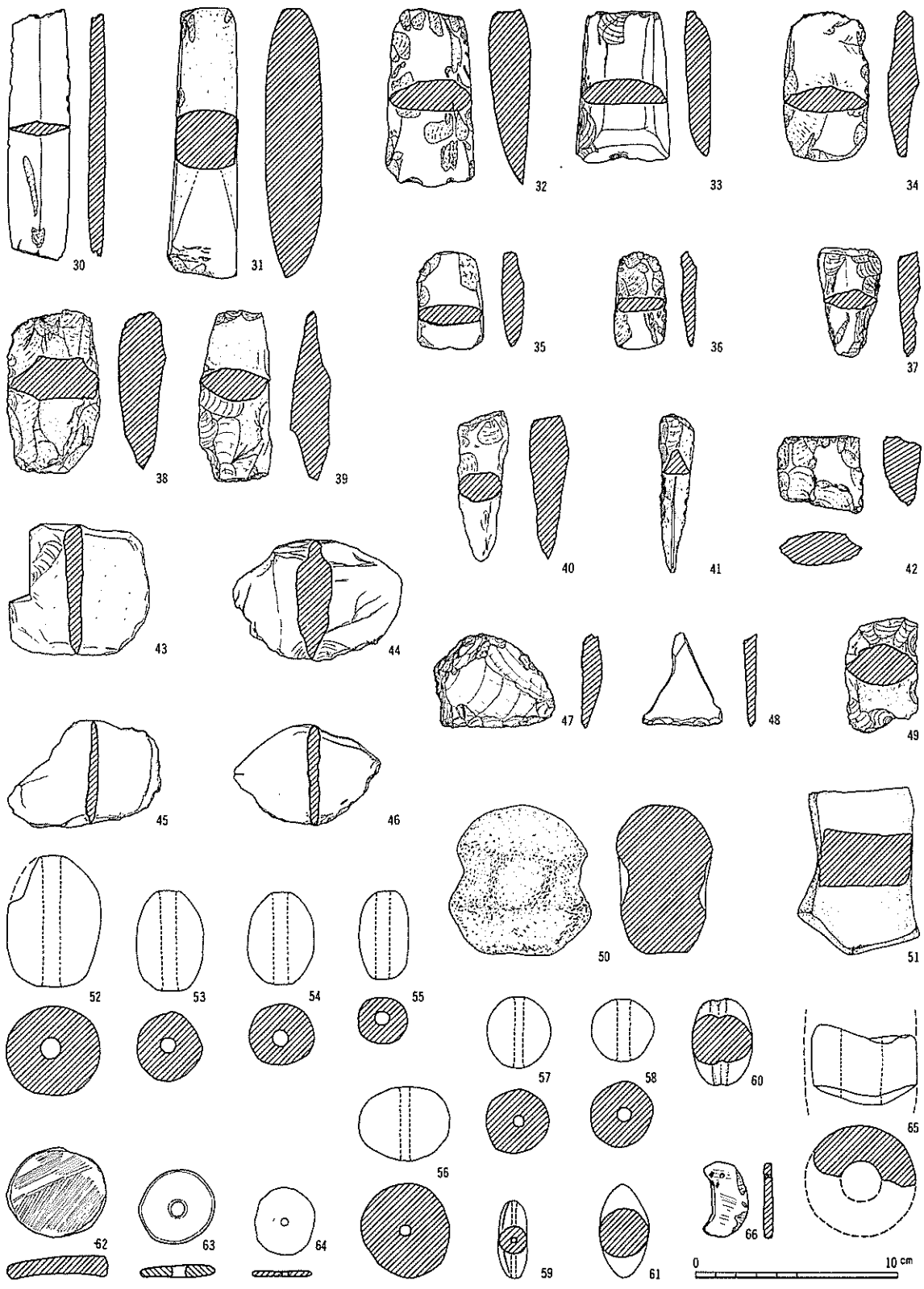

27


28

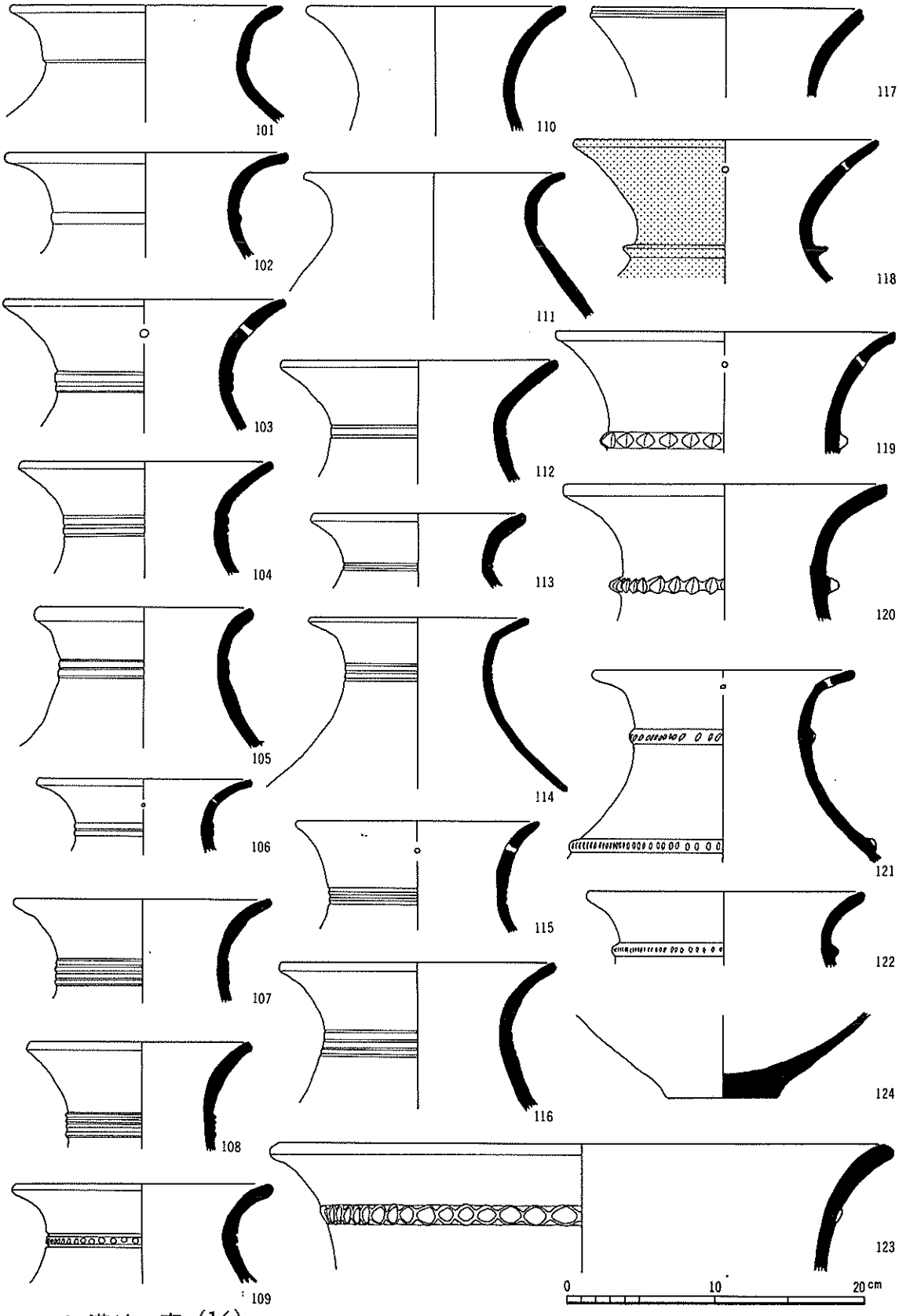

29


0
10
20cm

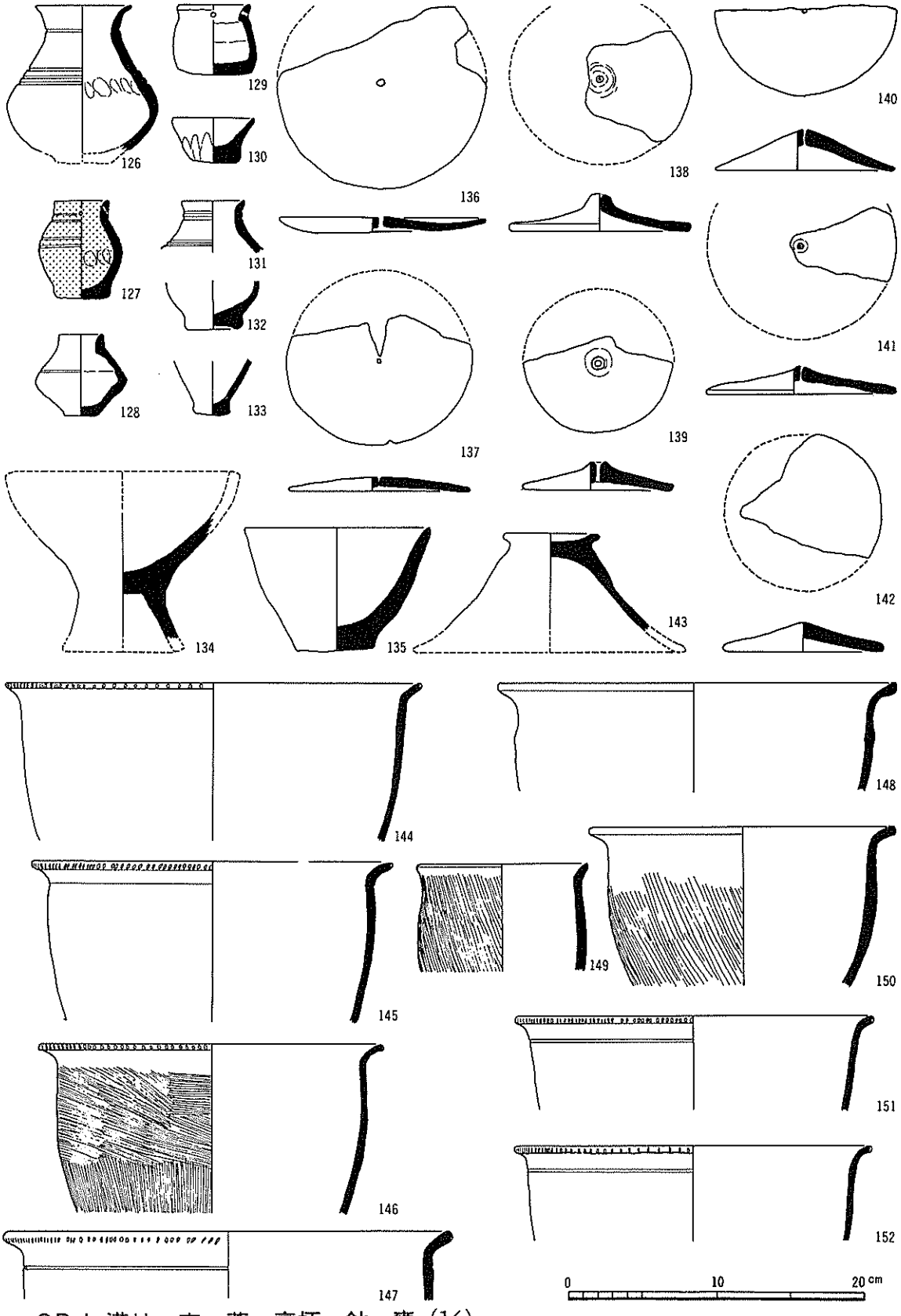
石鏃（½）石斧，石包丁等（¼）


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
0
10 cm

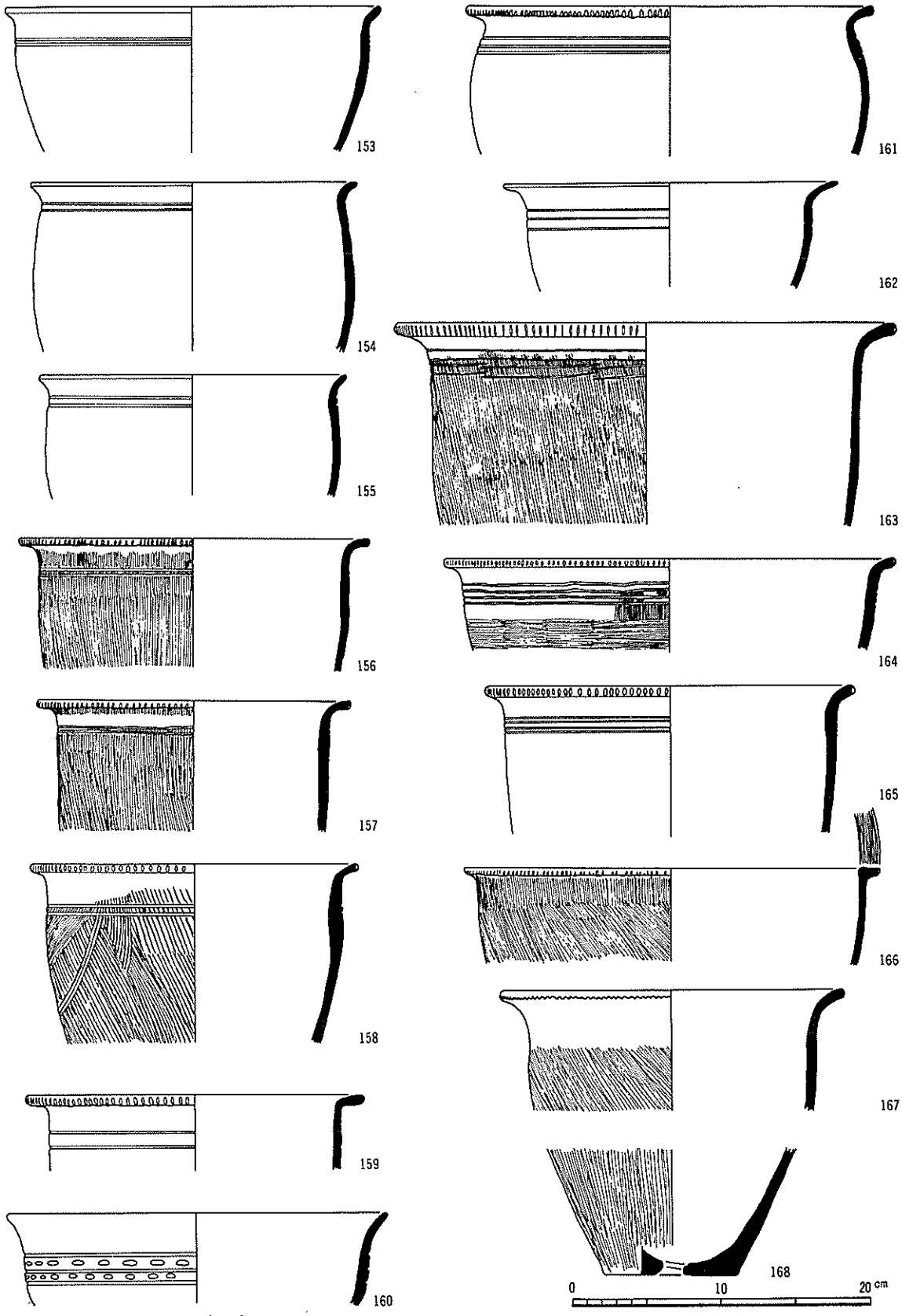
石斧，石剣，土錘等（1/3）


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
0
10
20cm

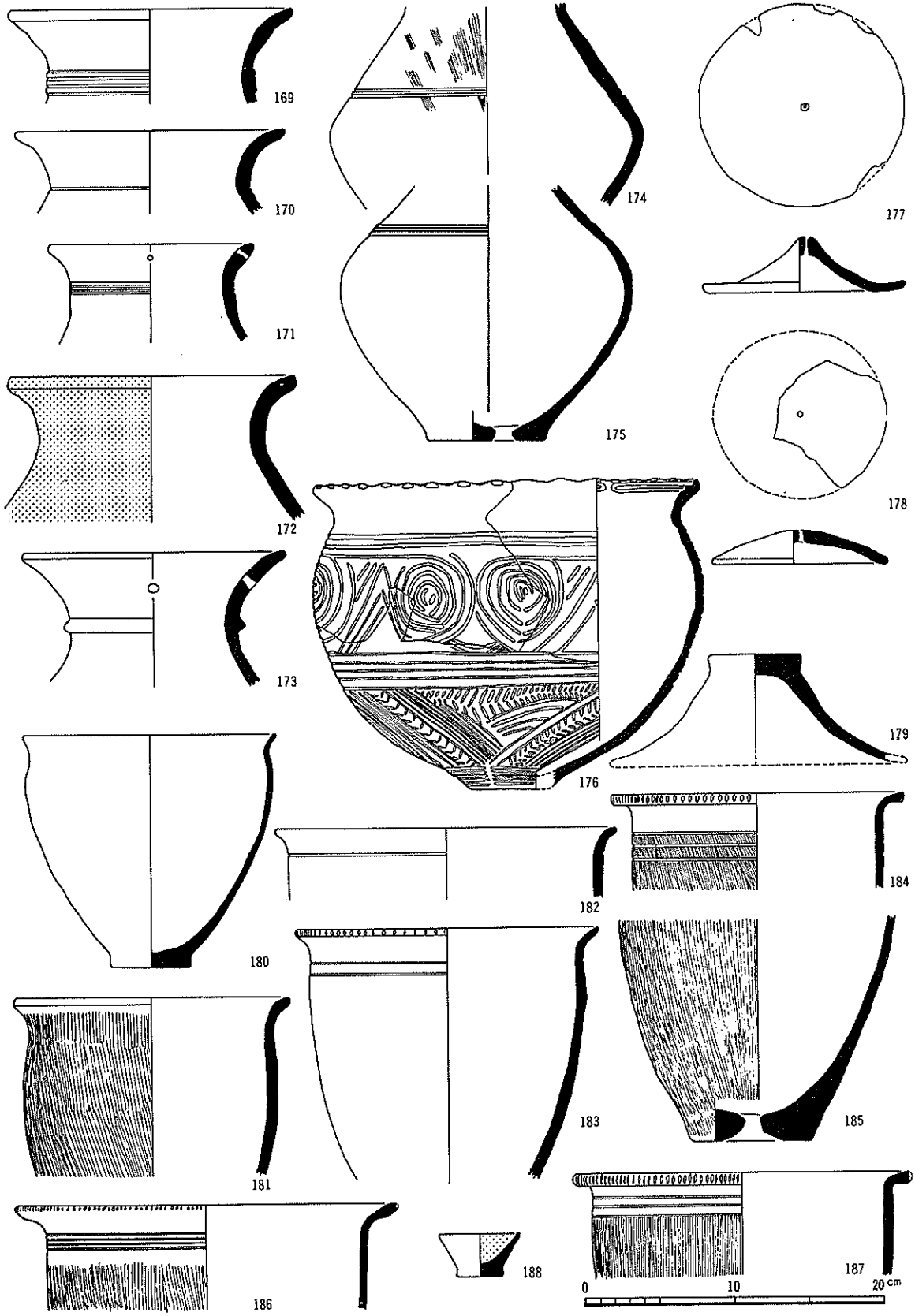
SD 1 溝址・壺 (¼)



SD 1 溝址・壺，蓋，高杯，鉢，甕（¼）


153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
0
10
20 cm

SD 1 溝址・甕 (¼)



SD 2 溝址・壺，蓋，鉢，甕 (1/4)